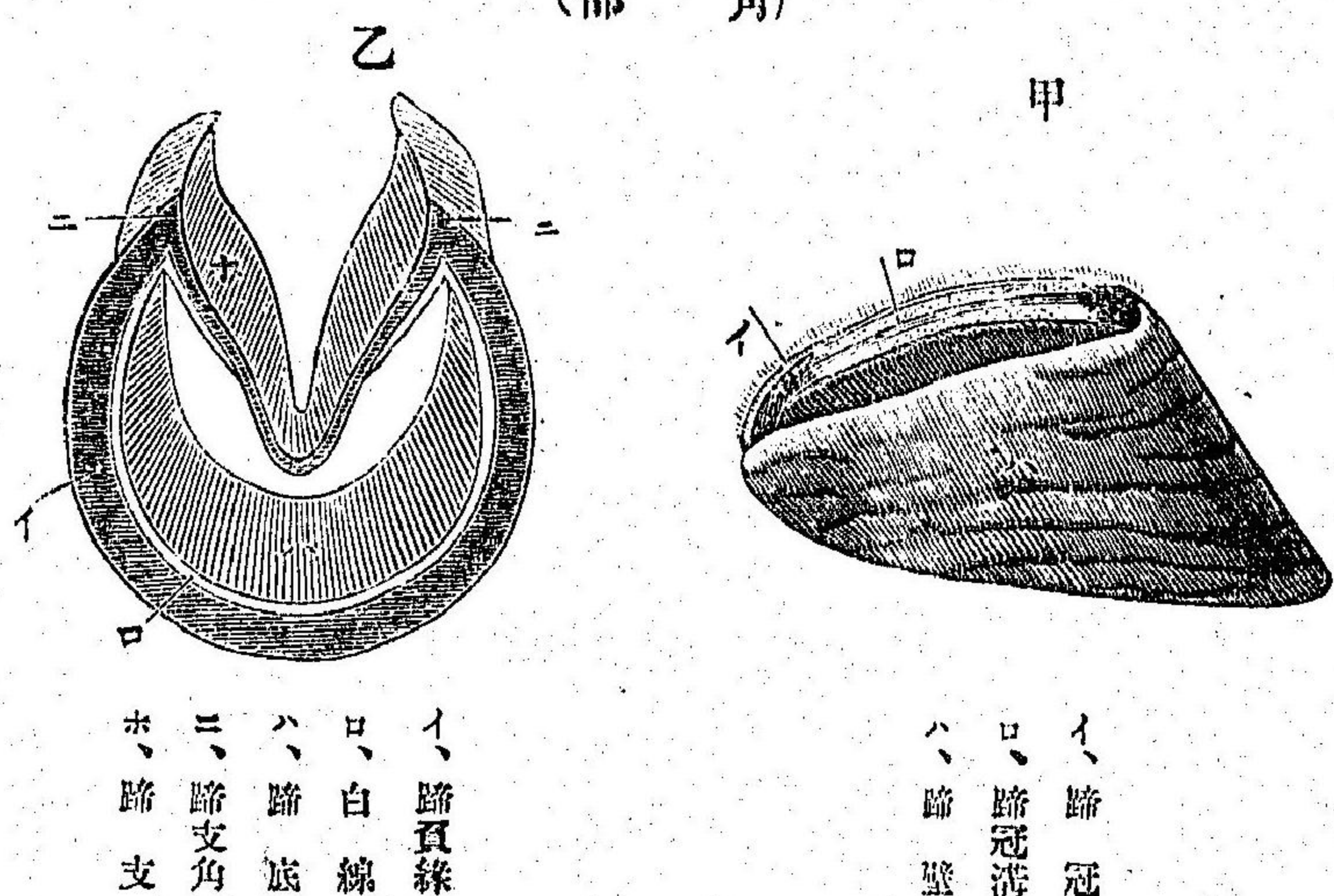


圖三十四第 (部角)



其の大小は馬體に相當し形状及方向は肢勢に一致し即ち前方及側方共に繋と蹄とは同一の方向にあらねばならぬ。其の他角壁が蹄の後部即ち踵壁部に於て隅角を爲して前方に屈折せる所を蹄支(第四十三圖乙ハ)と稱す蹄支は主に蹄後部の狭窄を防禦すべき支柱の用をなすにより此の部を妨ぐべき諸原因は常に之れを避けねばならぬ、即ち削蹄にあたりては過削せざる様に装鐵の際には鐵尾の觸れざる様に注意することが必要である。

二蹄底(第四十三圖乙ハ)とは蹄の底面に位して恰も吾人の靴底に相當せる處にして其前部を蹄底體、後部を蹄底脚と云

ふ正蹄に於ける蹄底は適當の大きさと厚さと凹みとを有すれども蹄炎に罹りたる蹄底は其の凹みを失ふか或は下方に向つて垂下し之に反し蹄底の狭窄症を來せば大に凹陥し蹄血斑に罹れるものは蹄底面に赤色の班點を現はし亦蹄底の角質薄弱なるものは知覺過敏にして抵抗力に乏しく或は角質の乾燥するか、死角蓄積せるものは弾力を失ひ蹄の縮張性を失ふが爲め蹄内部に震動を傳ゆるに依り適當なる削蹄裝鐵を行ふは勿論清潔と乾濕とを適度ならしむるは蹄管理上缺くべからざる要件である。

白線(第四十三圖乙ロ)とは蹄壁と蹄底との間にある白色の角質を云ふ此部は蹄底と蹄壁とを結合する働きを有するに依り成るべく緊密に連結してをらねばならぬ、殊に此の部は最も軟弱なる部分であるから削蹄裝鐵及び蹄の管理法を誤るときは屢々蹄壁より分裂することがある之れを白線裂と云ふ、或は此の部腐敗して弛解或は空洞を生じ之れを放任せば遂に上行して蹄冠部より排膿することがある之れを蟻洞と稱し俗に亦砂上りとも云ふ。

三蹄(第四十五圖)蹄又とは蹄下面の後方即ち蹄底脚の間に於て楔狀をなせる蹄彈器の一にして蹄踵の狭窄を防ぎ體重の劇動を軟らげ地面の摩擦を増し失脚

肢勢も眞直に其の歩み様も正しくあるものなれども馬體が不釣合に出來れば肢勢も眞直でなく或は前に傾き後に退き外に曲り内に捻れ様々の肢勢が出來るのである斯く肢勢が不規正となれば體重が均一に蹄に下らないから蹄形も亦不正となるそこで肢が左右に開き體重が肢蹄の内側に偏れる時は内狹外廣蹄となり或は亦肢が後退して之れに繋が峻立すれば蹄も亦起立せる高蹄が出來るが如く肢勢が變る程蹄形も亦之れに伴ふて變るのである斯く四肢にも種々の肢勢があり蹄にも様々の形がありて同じ肢勢蹄形を有するものは殆んどなく一頭毎に異つてをる様であるが併し其の肢勢及蹄形の種類は大體に於て定まつてをりて夫れが單純であるか或は二つ三つの肢勢と合して複雑なる肢勢となりてをるかであつて體形上より判斷して如何なる程度の者であるかを知る時は外貌鑑定は勿論削蹄並に裝蹄等のことも容易に判斷が出來ようと思ふにより次に體形と肢勢との關係上重要な部分に就きて其の梗概を述べん。

一、肩の成形と肢勢との關係

肩部は前肢運動の中心であつて此の構成が完全なれば前肢の運動は満足に出來るのであるが故に此部の構成及他部との關係を知るは前肢判斷の眼目である即

ち良好なる肩付とは長く斜めにして肩端が上着するを善良とする何せなれば肩胛骨が長ければ其の位置もよく方向も斜めにして肩幅もあり筋も長く附着する肩付良ければ頸の附着も高く前肢運動が自在になる肩附が良ければ肢勢も眞直に出來るのは普通の場合に多く見る處であるが斯るものは至りて少く我が國の馬の如きは殊に然りである肩若し短ければ多くは起肩となりて前方に偏在し肩端も低下し頸の附着も自然に低く肢勢も從つて後退する若し肩が體の方向と平行せず肩端外開すれば肩の下に位する上膊骨の下端は内方に向ひて肘離れの悪しき窄肘が出來て肢以下蹄尖の外向する肢勢が出來る譯になるのである。

肩及肘の次に注意すべきは膝と繋部なり善良なる膝は關節が強大にして膝の上に位する前膊骨は太く長く膝下にある骨と共に一直線をなさねばならぬが多くの場合には左右の膝が互に接近して牛膝(外弧肢勢)をなし左右に開きて内弧肢勢をなすものあり或は亦前に曲つて彎膝をなし後に曲つて凹膝をなし膝以下外向する等様々であつて眞直なるものは殆んど稀である次は繋部なり抑も此部は前肢體重の大部を負擔する所にして其方向長短は馬の作業上重要な關係を有す

る、例へば膝が多少不良でも繋に相當の力があつたならば之れを補ふことが出来る、又同じ外向肢勢でも繋の長さや方向とが適當で力あるものなれば比較的良繋と云はねばならぬ、若しも繋が軟弱にして臥繋をなしたるものは何れの使ひ向きにも疲れ易く又短くして起繋をなすものは反動強く是亦不良なり、故に善良なる繋にありては強大にして適宜の長さや力とを有し左右同大にして其の方向は地平線に對し四十五度乃至五十五六度を有してをらねばならぬ。

二背の成形と肢勢との關係

正背の長さは體長の三分の一を有すれども通常斯の如きもの至つて少く長背あり短背あり或は前後の移り不良にして前高なるあり或は後高なるものもある其の他凹背、凸背等あるが如く複雑なる背形をなすものにおいて肢勢も亦種々一様ならざるも之れを大體より云へば長、短、凸、凹の四種にして肢勢も之れに伴ふに外ならぬのである、即ち短背にして肩付よく頸高く尻長くして傾斜少なきものは前後に分散する肢勢即ち前肢は前進し後肢は後退する肢勢を伴ふことが多い、うして後肢の退立は能く見る處なるも前肢の前立は殆んど實際に見ざる所である、亦長背にして頸低く尻傾斜せしものは前後肢が腹下に集まる處の内國産馬の

通肩肢勢たる集合肢勢が出来易いのである。

三胸の成形と肢勢との關係

善良なる前胸の幅は體長の約四分の一を占め肢勢は垂直にして體の方向に並行すべきものなるも斯の如き正しきものは至りて少くして種々の形狀をなすものけれども大別すれば胸の廣狹、高低、凸凹の數種に過ぎぬのである、さうして狭胸の場合には支撐面を廣く踏む廣踏肢勢分張脚が出来又廣きに過ぐる時には前者に反して支撐面を狭く踏む狭踏肢勢が出来易い、其の他肩が體の方向に並行せず肩端外開するときには前述したる外向肢勢が出来譯になるのである。

四尻の成形と肢勢との關係

尻幅は體長の約三分の一を有して尻頂點の横徑と兩臀端横徑との長さが大差なくして適當の傾斜を有し肢勢垂直なるものを後望に於ける正しき體形肢勢と云ふ、さうして尻の形と肢勢との關係は胸の廣狹によりて肢勢が變るが如く、尻幅の廣狹及傾斜の緩急に依りて肢勢も亦之に伴ふて種々變るのである、即ち尻幅廣き時には概して下方に狹窄する肢勢を伴ひ又臀尖に向つて狹窄するものは股骨の下端は外向し脛骨は飛節に向つて狹まり以下分張する所の内國馬に最も多く見

る外弧肢勢^①、狀脚俗稱ヨリドモをなすのである、要するに後肢の肢勢も前肢に於けるが如く尻の廣狹方向腰部との接合の良否等により種々變ずるものと看做すことが出来る。

以上は専ら軀幹と四肢との關係を述べたのであるが肢勢は單に馬體のみならず四肢の疾患又は削蹄裝鐵の失宜の爲めに種々の變狀肢勢を來たすものなるに、り判断に當りては其肢勢が體形上自然に來るものなるか或は使役削蹄裝鐵の失宜の爲めに來る者なるやを究めて判定すべきである。

第三節 蹄形

蹄の形質を變ずる原因

蹄の形狀及性質を變ずる原因に種々あれども之れを大別すれば肢勢、體重、遺傳、土質、蹄管理法の如何に依るものにして即ち左の如くである。

其一 體形及肢勢

抑も蹄は馬體の支柱にして體を安全に支へ運動を確實になすものなれば其の形狀方向は一に軀幹及肢脚の位置方向に従ふべきものなるに依り體形釣合を得れば

ば肢勢及蹄形も單純にして正しけれども體形複雑なれば種々の肢勢蹄形を混同するに至るは免れざる處にして此等は其の因て來る體形肢勢に由來して生ずるものである。

其二 體重

體重は蹄形に大なる關係を有するものにして出産當時の蹄形は蹄冠と負縁とに於て大差なく恰も圓筒形をなせども體重の加ふるに伴れて漸次負縁は擴張し成熟後は圓形を呈する様になるものである。

其三 遺傳

皮膚の強弱毛色の遺傳するが如くに蹄の形質も其仔畜に遺傳するは疑を容れず例へばアラフ種の狹蹄を有するは原産地の土質に因れども亦其の遺傳に承繼せるは覆ふべからざる事實である。

其四 土質

土質によりて蹄の形質を變ずることも又能く説明することが出来る即ち土質軟かなれば歩毎に蹄は土中に没入するにより蹄底蹄又の發育は蹄壁の發育に超過して外方に壓排せられ正蹄變じて廣蹄となり狹蹄變じて遂に正蹄となるのである。

る土地若し硬ければ蹄壁は常に地面の壓迫を受けて發育旺盛なれども蹄底や蹄又は自然地面に觸るゝ機會を失ひて發育を妨げられ蹄壁の力は蹄底蹄又に超過して狭蹄となるは見易き事實である。

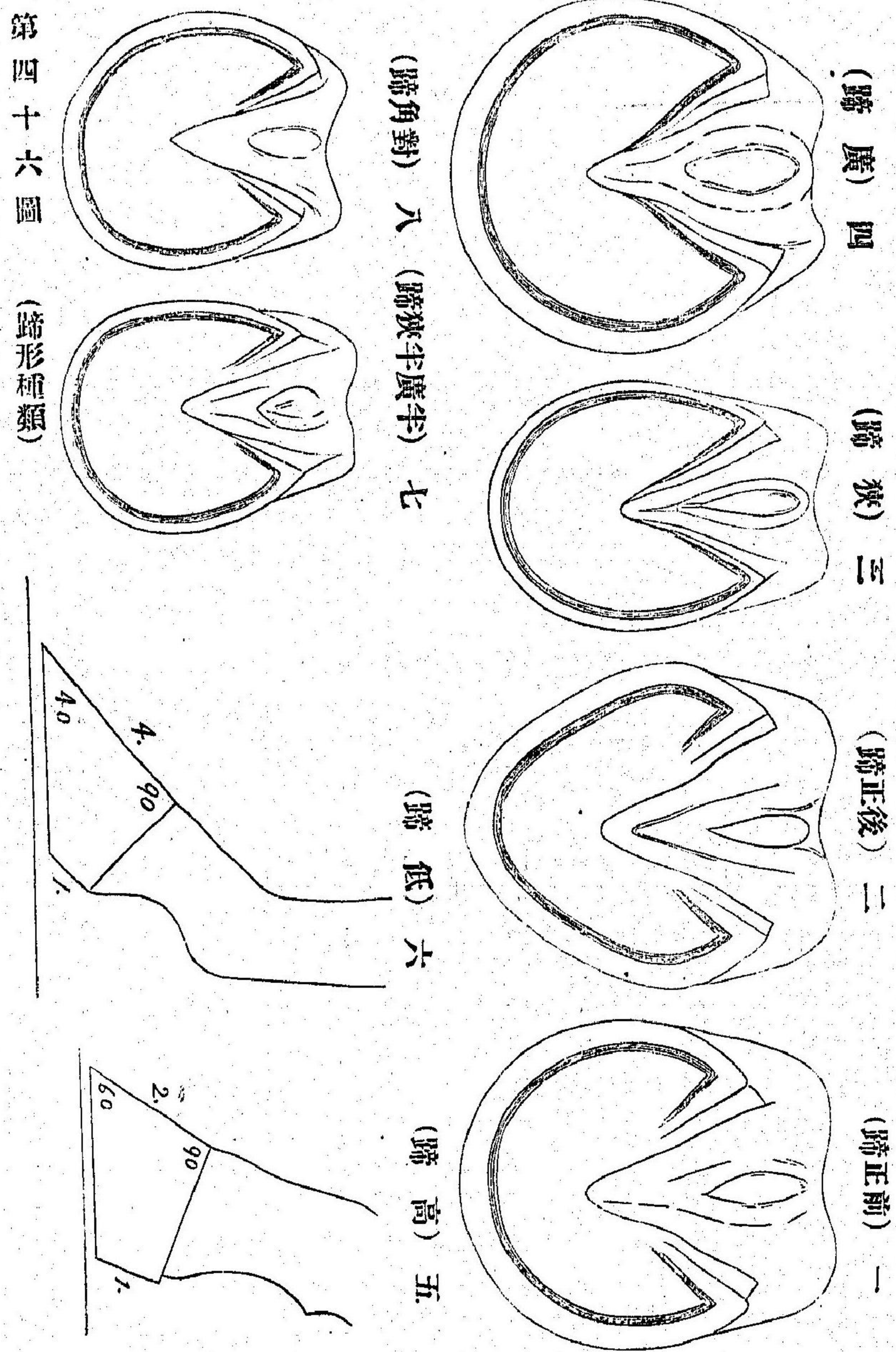
其五 蹄の管理

馬匹自然の生活たるや山野を自由に奔馳して蹄の發育と磨滅とは常に其の平均を得取て障害を蒙むることなけれども一旦人の手に馴養せらるゝや其の管理の方法を失へば忽ち種々の變形を來すものにして鐵を裝したるものに於て殊に然りである故に苟も蹄の健全を保たんとせば時々適宜の運動を課するは勿論平素肢勢と蹄との關係に注意して削蹄を行ひ清潔を謀ると共に乾濕の度合をよく保たしむることが必要である。

蹄形の種類

各種蹄形を左の如く區別する。

- 甲 正蹄に屬するもの (一)前正蹄 (二)後正蹄 (三)狭蹄 (四)廣蹄
乙 不正蹄に屬するもの (五)高蹄 (六)低蹄 (七)半狭半廣蹄 (八)對角蹄(外向及内向蹄)



第四十六圖

(蹄形種類)

第四節 肢勢判断及削蹄法總説

幼駒削蹄の必要。凡そ馬の發育時には肢勢と蹄形とが種々變じ易きにより蹄の管理は青馬上最大要務なり、さうして肢勢變状の原因は多くは蹄管理の失宜より來るのが多數であるから發育時に當り蹄の變形を矯正し尙は一層改良せんが爲めに削蹄を行ふことは最も必要なれども亦極めて難事にして若しも其の方法を誤りたならば肢に種々危険なる損徴を醸すに依り充分なる經驗を有するものにあらざれば完全に行ふことは出來ざるなり。

元來幼時には體の各部が總て軟弱であるから蹄の削り方或は管理の如何に依りては不良肢勢も幾分矯し得れども既に成熟したるものにはありては甚だ困難である此故に蹄の矯削は幼馬に限るのである、前述の如く肢蹄が完全であつたならば馬の最要部が完全したものと看做してよい即ち蹄の完全は四肢の完全を意味するからである、言ふまでもなく如何なる釣合よき良馬なりとも肢と蹄とに故障があつたならば殆んど馬たるの價値なきものなれども茲に一言せねばならぬことは世人が間々削蹄に重きを置き過ぎてをりはせぬかと云ふことである、即ち如何

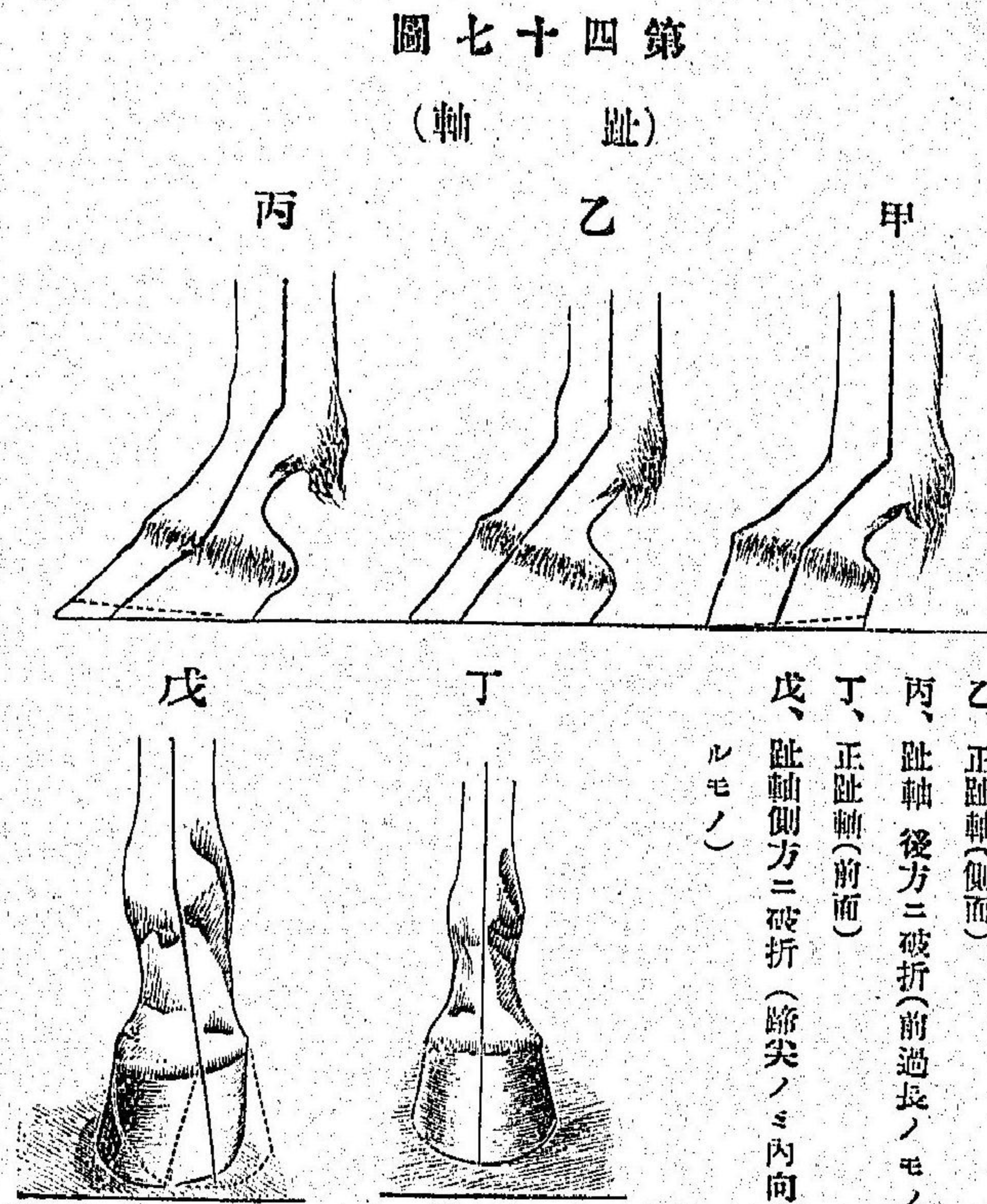
なる馬でも蹄を上手に削りさへすれば肢が眞直になると考へてをる様であるが之れは大なる誤解でありて如何なる名人でも蹄の削り方ばかりで馬の身體を造り直すことは出來ぬ筈だから此の編に述ぶる處もつまり削蹄上の原則を基とし自然以上に變形せるものを自然までに矯正し或は夫れ以上に幾分か改良することを述べる積りである。

肢勢に伴ひたる蹄形。肢勢を鑑識するに當り先づ第一に肢勢に適合したる蹄とは如何なるものなるやを知らねばならぬ。

抑も肢勢に伴ひたる蹄にありては蹄の前面及側面に於て常に繫と蹄とは其の方向を同ふし尙ほ蹄前壁と踵壁とは互に第四十七圖乙の如く蹄の中心を通過したる軸線と同一の方向をなすべきものなれども通常斯くの如き正しきもの甚だ少なくして繫と蹄との一致を失ふもの多し即ち蹄前壁が過長なる時には繫は蹄より峻立して趾軸後方破折すること第四十七圖丙の如く若し亦之れに反し繫が蹄より斜立せる時は蹄踵壁の過高の徴にして趾軸前方に破折すること第四十七圖甲の如し亦前面に於ても第四十七圖丁の如く繫と蹄とは同一の方向にあらねばならぬが是れ亦至りて少なく多くは其の方向を同らせずして蹄のみ一側に向ふ

即ち第四十七圖戊の如く趾軸側方に破折するが如き是れ皆な肢勢に相當せざる

- 甲、趾軸前方ニ破折(前壁過短ノモノ)
- 乙、正趾軸(側面)
- 丙、趾軸後方ニ破折(前過長ノモノ)
- 丁、正趾軸(前面)
- 戊、趾軸側方ニ破折(蹄尖ノミ内向セ



形せるや如何程削ればよいかを確めることが削蹄の眼目であるが其の之れを判

變形蹄にして其蹄壁の峻立せるは高き處にして斜側は低きを示したるものなり、斯くの如き馬をして運歩せしむれば其峻側壁たる高き部は地面に先着するものなれば削蹄に當りても其の高き處を削りて平坦に踏地する様削切すべきである。

其他削蹄を行ふに當り最も注意すべきは其變形の程度が自然よりどれ程變

斷するに當り蹄の變形のみに重きを置き過ぎれば往々間違ひを來すにより、削蹄の原則は體形を基として肢勢蹄形との關係を定むることが必要である、例へば此の蹄は外向蹄であるものとすれば其外向の程度如何を定むるには單に變形せる蹄形ばかりを以て決定することは出來ぬのである、即ち肩が良斜して肘離れよく繫に相當の力があつたならば假令著しき外向蹄の様であつても甚しき外向肢勢に伴ふべき蹄でなくして多くは從來削蹄裝鐵の失宜か或は怠慢かに因りて生じたる假裝の變形蹄で大に矯正の必要あるものと看做さねばならぬ。

然るに茲に亦前壁長く踵壁低き蹄ありと假定せんか單に蹄形のみを以て判断を下せば低繫に伴ふ低蹄と看做すべきであるが若しも歩むに當り繫に力を以て居たならば之れも軽度の低蹄と看做さねばならぬ要するに斯の如き場合には繫の長短と強弱とにより削蹄の程度を決定せねばならぬ。

亦後肢の狹窄せる肢勢にも種々の程度がある即ち此肢勢にして腰及飛節が弱く歩む毎に捻轉するか或は亦繫が緩くして力なきものは見込のなき狹窄脚なるも腰が丈夫で飛節及び繫に力を有して居たなれば先づ比較的良き者とせねばならぬ、上述の如く矯削蹄の判断は體形と肢勢との關係をよく觀察しなければ單に蹄

と繋との関係とか或は單純なる歩様の鑑定位では到底完全とは云へぬのである。一體人の知る如く馬は使ひ向きに依りて見方を換へねばならぬが完全なるものゝ少なき限りは能く馬體各部の關係を究めて許す所と否ざる處とを知らねばならぬ即ち内國馬に出來易い失格もあるし外國の馬にも夫々種類により出來易い失格がある故に馬體を見分けて變狀の程度を究めたならば其の馬の體格を判断することは勿論削蹄の程度等をも自然に了解が出來よふと思ふ尙ほ詳しく云へば人の知る如く肩が峻立して其の附着低く頸は水平に附着して體の中軀は長く尻は短く斜めにして四肢腹下に集合するものが内國馬の通有體形肢勢であるとしたならば頸高く前肢眞直に後肢の踏張りよく尻の傾斜過度ならず中軀の短い馬であつたらば先づ我が國固有の馬としては良馬となさねばならぬ斯く體形の大體に就いて判断を下すものとすれば其の判断はつまり程度の問題に外ならず假令折目が深くとも繋長きに失せず相當の力あるものなれば比較的良馬と看做さねばならぬ茲に亦削蹄上注意を要すべきは跣足蹄にありては體重の壓迫を受ける内側は磨滅して低くなり否らざる外側は過度に延長し其の部が運歩の際地面につかへて益々内側に向て體重壓を増すことになるから其の延長部を削りて

踏地の平均を爲さしむることが必要である例へば後肢の廣踏肢勢の内側の如きは體重壓の爲めに常に磨滅せらるゝも外側は之れを免かるゝが故に該側の角壁は延長して地面につかへ益々内側を踏地する様になるから跣足蹄の場合には内側よりも外側を多く削る場合がある即ち裝鐵蹄とは反對の方法を行ふ譯になるのであるさうして此の編に述ぶる所も多く跣足蹄に應用する方法が大部分を含んでをる。

左に削蹄を行ふに當り注意すべき必要なる事項を述べん。

其一。削蹄に當り先づ直接に知らねばならぬことは前壁を削る可きか踵壁を削らねばならぬか即ち起すべきや臥かすべきや内外何れを削るや即ち何れの部分が踏地の際地面につかへて蹄の返りを妨げるやを知らねばならぬ。

其二。幼馬にありては體の各部が軟弱であるから削蹄によりて肢勢及蹄形の變狀を或る程度までは矯し得れども必ず直し得る譯には行かぬにより削蹄に當りては果して直し得るや否やにつき其の取捨を先決し然る後着手することが最も必要である。

其三。幼時より蹄形を見て將來の出來具合を豫想することが亦必要である換言

すれば此の蹄は廣くなるや狭くなるや峻立するや傾斜するやを知らねばならぬ元より蹄の變るのは馬の種類、土地、飼育法の如何に依ることなれども概して蹄又の太きものは大蹄となり細きものは狭蹄となり長きものは低蹄となり短くして側方に開張するものは將來高蹄が出来易ひ亦蹄形に依りて繫の長短、蹄の強弱、肘離れの良否をも知ることが出来る、さうして踵壁の内方に彎曲するものは繫、腿、軟弱の徴か又は肩の働らき不良の徴である。

其四。削蹄を行ふに當り豫め注意を要するは假令不自然的肢勢蹄形の變常でも壯馬にして殊に使役せられ居るものは之れを無理に矯正するは却つて危険である、例へば屈腿短縮の爲め彎膝となりたるものに矯正の目的にて踵壁部を過削すれば腿は一層緊張せられ遂には益々彎膝となるに至るが如き其の適例である、其の他肢勢が變れば蹄形が代償的の變形をなすことをも知らねばならぬ、例へば熊脚に伴ふ蹄の如きは多くは著しき山羊蹄でありて而も其の蹄壁の後部が兩側に擴がり恰も鳥の兩翼の如き形をなして前屈するのを支えてをる如きは即ち代償的變形にして假令奇異の形をなすも猥りに其兩翼を削除するは不良なり、若しも此等に注意せず削除したならば忽ち前屈して前壁面を以て歩む様になる其の

他此等の代償的變形は種々あるにより能く其の變形の依て來る原因を究めざれば既に削除したる後は取返しが付かぬのである。

其五。削蹄に當り馬體各部の働きを知る事が緊要である、即ち肩の運動は如何であるか肘離れの良否、繫の強弱何れに偏しはせぬか、蹄内外何れを以て地を踏むか、右肢は外を踏み左肢は内を踏むものとするれば左右何れが馬體に相當せるかを確めねばならぬ。

其六。馬體各部の釣合如何を観察すると共に何れの部が構成優れたるや否やを知らねばならぬ、即ち馬により前半身良きも後半身不良なるあり或は肩の附着良きも膝繫の不良なるあり或は背腰に力あるも飛節の折目深く繫緩きものもある、斯く馬體の各部に於て良否の點が備はつたものとするれば働きに於ても一様ならず或る馬は肩の働き良きも繫の緩きものあり即ち肩の働き良きが爲め肢の運び宜しきものあり、膝の造り良きが爲め運び良き馬あり、繫の造りよきが爲め運び良きものあり、此等は最も注目すべき處にして例へば膝が彎り蹄は變形せるにも意外に運動良き馬あり、此等は肩にて歩む馬なることを知らねばならぬ、然るに肩の構成宜しきも繫弱ければ役馬には適せざるべし、然るに膝付き不良なるも繫に力

あれば膝及肘部の不良を補ふことを得るものである。

第五節 體形肢勢判斷及削蹄裝鐵法圖解

第四十八圖 馬體側面に於ける正體形

馬の體形を判斷するに種々の方法あれども最も實際に近くして一般に是認せらるゝものは馬體を方形に像とり之れを判斷すること即ち第四十八圖は側面に於ける正體形にして假想線を劃し其の割合を示したものである

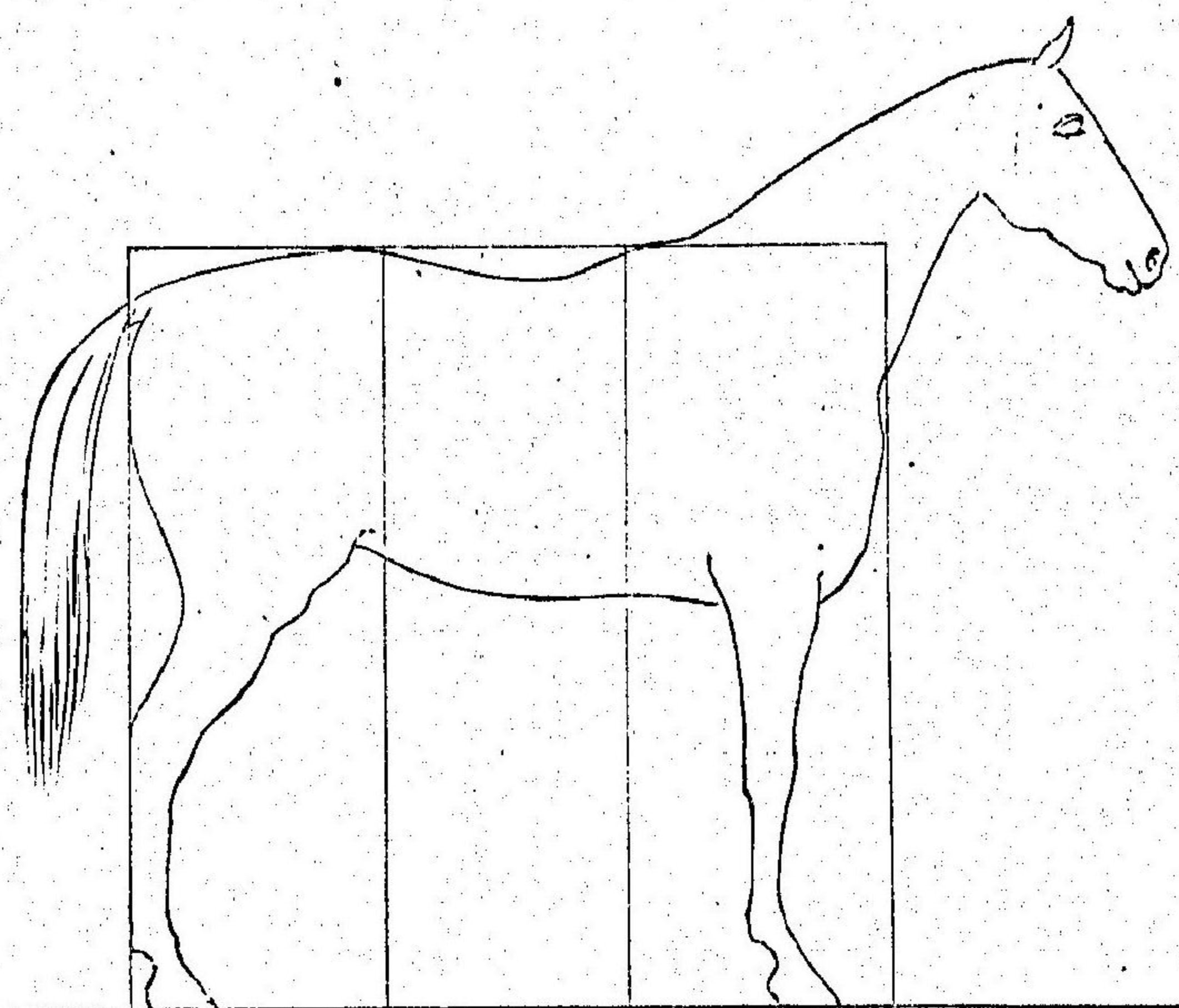
第一線 は鬐甲及尻の頂點を通過したる方形の上水平線なり

第二線 は肩端を通過したる方形の前垂直線なり

第三線 は臂端を通過したる方形の後垂直線なり

以上の如く上前後の三線を劃し更に之を連結すれば正しき馬體に在りては三線が同一の長さを有すれども通常種々の不正體形をなすものが多い即ち前垂直線なる體高が上水平線なる體長に超過する時は軀幹は過短となり肢は過長となる之れに反し體長が體高に超過する時には軀幹は過長となる又尻の頂點が鬐甲より高さものを后高の馬と云ひ又鬐甲の頂點より胸下に至る長さが肘より地上に至

圖八十四第 (形體正)



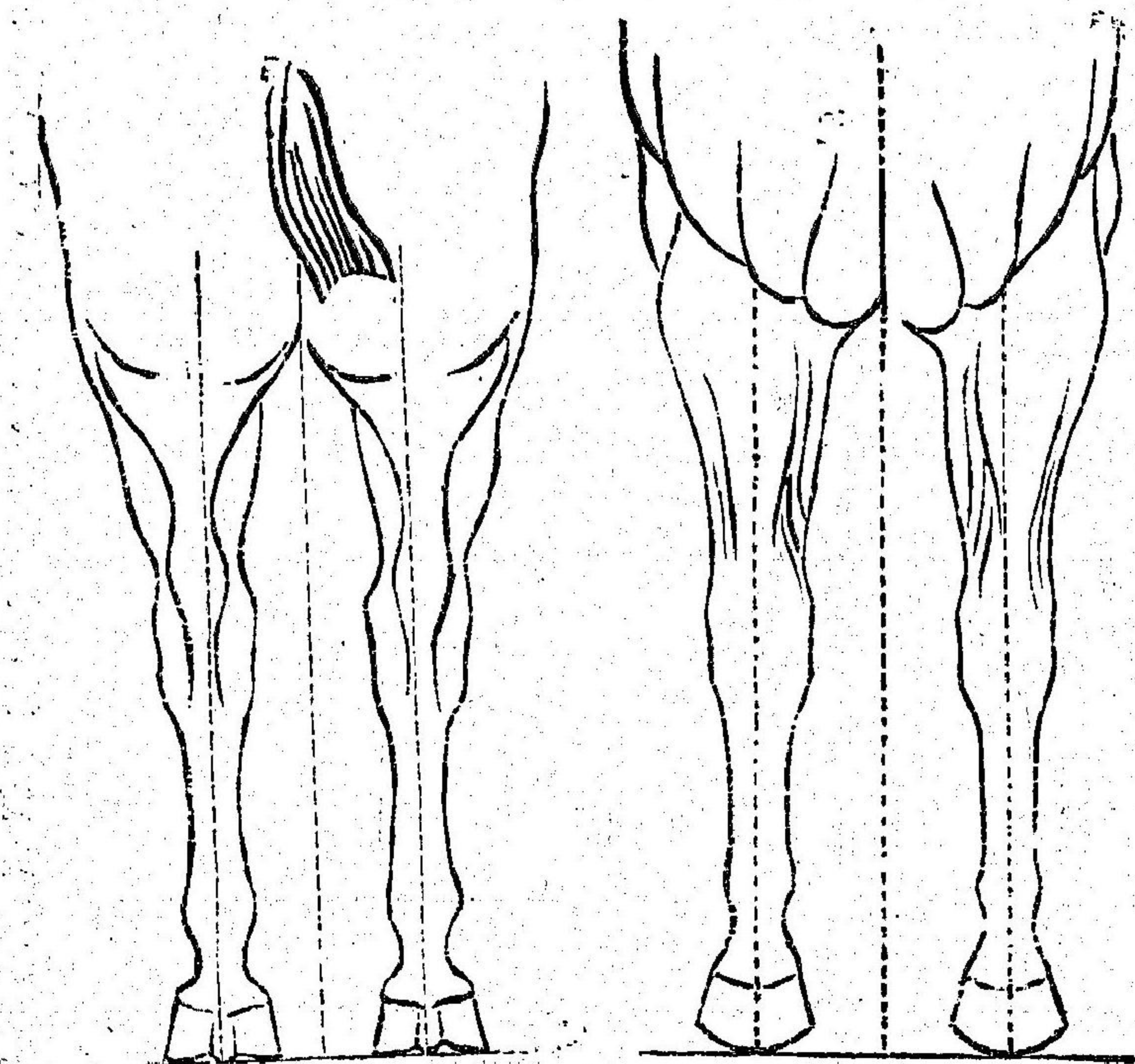
る長さと殆んど等しきものを短脚馬と稱ゆ尙更に軀幹を側面に於て三等分する

が爲めに肩胛骨の後隅及腰角の前部より二垂線を下し馬體を前中後の三軀に分つに共に其の長さが同一なるものを良き對稱の馬體と稱へ又鬐甲の頂點より胸下に至るまでの垂直線を下し此の線の長さが胸下より球節の中央に達するまでの垂直線と相等しきものを對稱善き馬と稱ふ。

第四十九圖

前面に於ける正體形及正肢勢

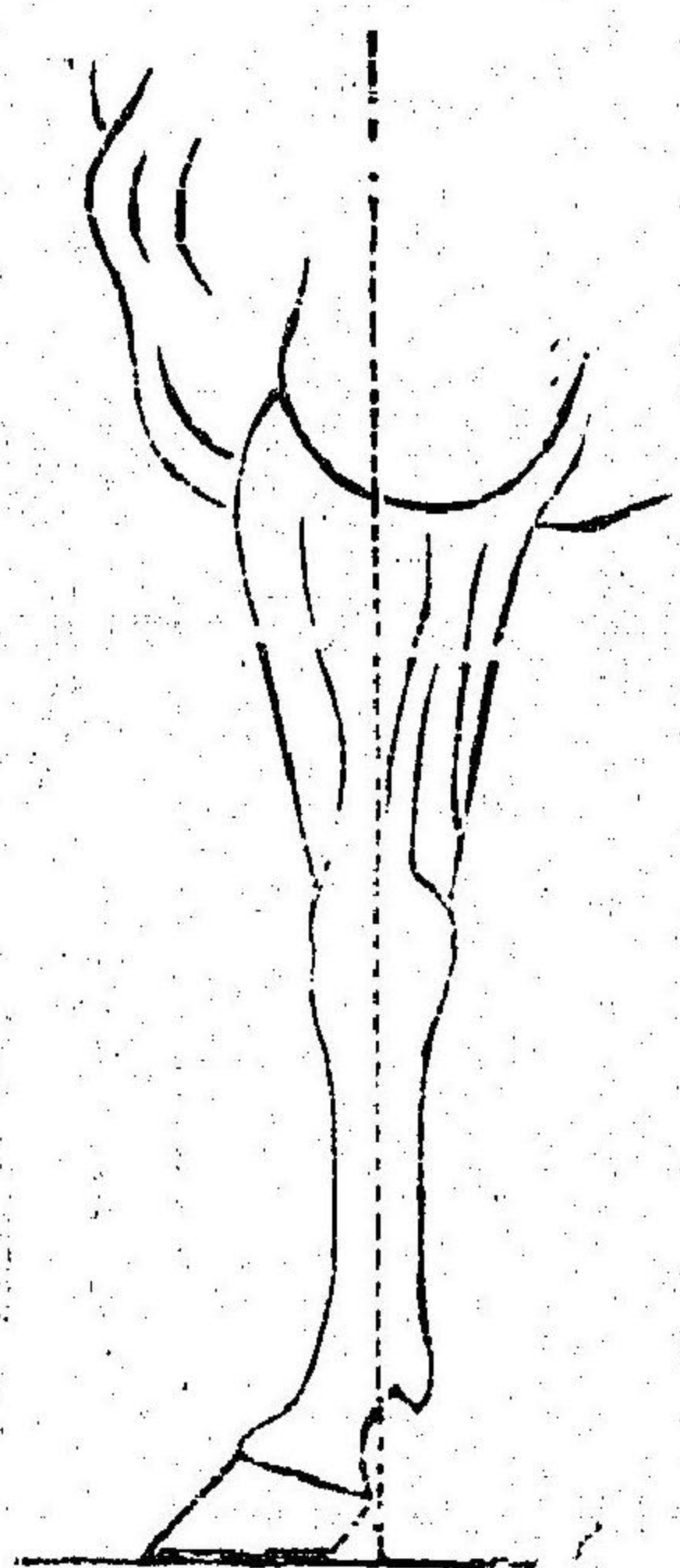
圖十五第 圖九十四第
(勢肢正及形體正るけ於に面前) (勢肢正及形體正るけ於に面後)



正しき體形肢勢を有する馬を前方より望めば體長の約四分の一の胸幅を有し肢勢真直にして肩端より鉛直線を下せば前肢前面の中央を通りて蹄の中央に達し又左右兩前蹄の間に一蹄を入るべき餘地を有するものを正體形及正肢勢と稱ふ。

第五十圖 後面に於ける正體形及正肢勢

圖一十五第
(勢肢正の面側肢前)



正しき體形肢勢を後方より望むに尻幅は胸前より稍々廣く體長の約三分の一を有して尻の頂點より臀尖に向て其幅の減少せず肢勢は鉛直に臀端より垂線を下すに其の線が飛節の後面に觸れ地に達するものを正體形及び正肢勢と稱ふ。

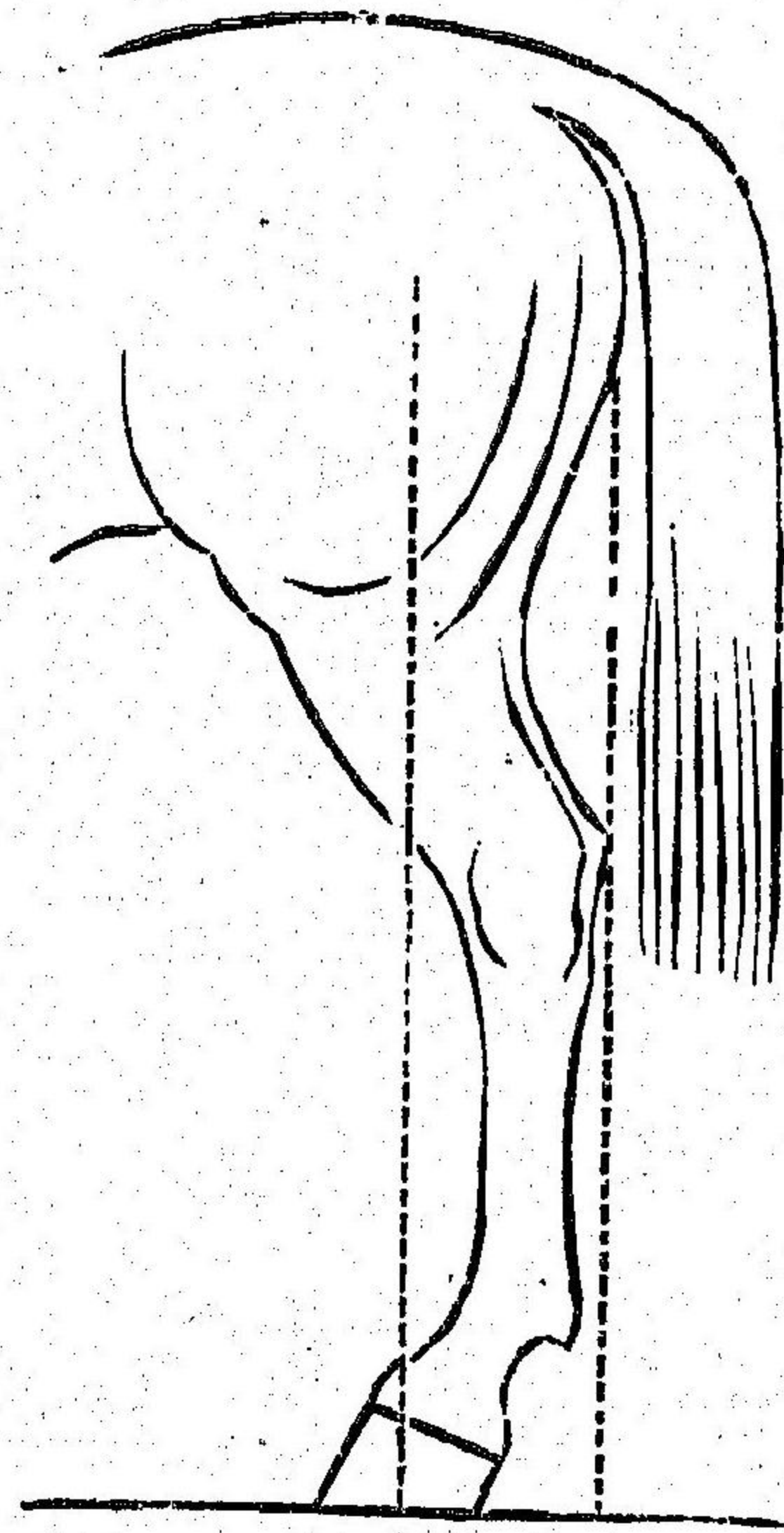
第五十一圖 前肢側面に於ける正肢勢

肩胛骨中央線の上三分の一より下せる垂線が前膝及球節の中央を通過し蹄の後方に落ちるものを前肢側面の正肢勢と稱へ、繋の角度は四十五度乃至五十度なり。

第五十二圖 後肢側面に於ける正肢勢
臀端より下せる垂線は飛節の後端に觸れて地に達し又臍股關節より下せる垂線は蹄負縁の側方の中央に落ちるものを後肢側面の正肢勢と稱ふ、繋の角度は前蹄

より多くして通常五十度乃至五十五度なり。

圖二十五第
(勢肢正の面側肢後)



甲 前後面に於肢ける不正勢

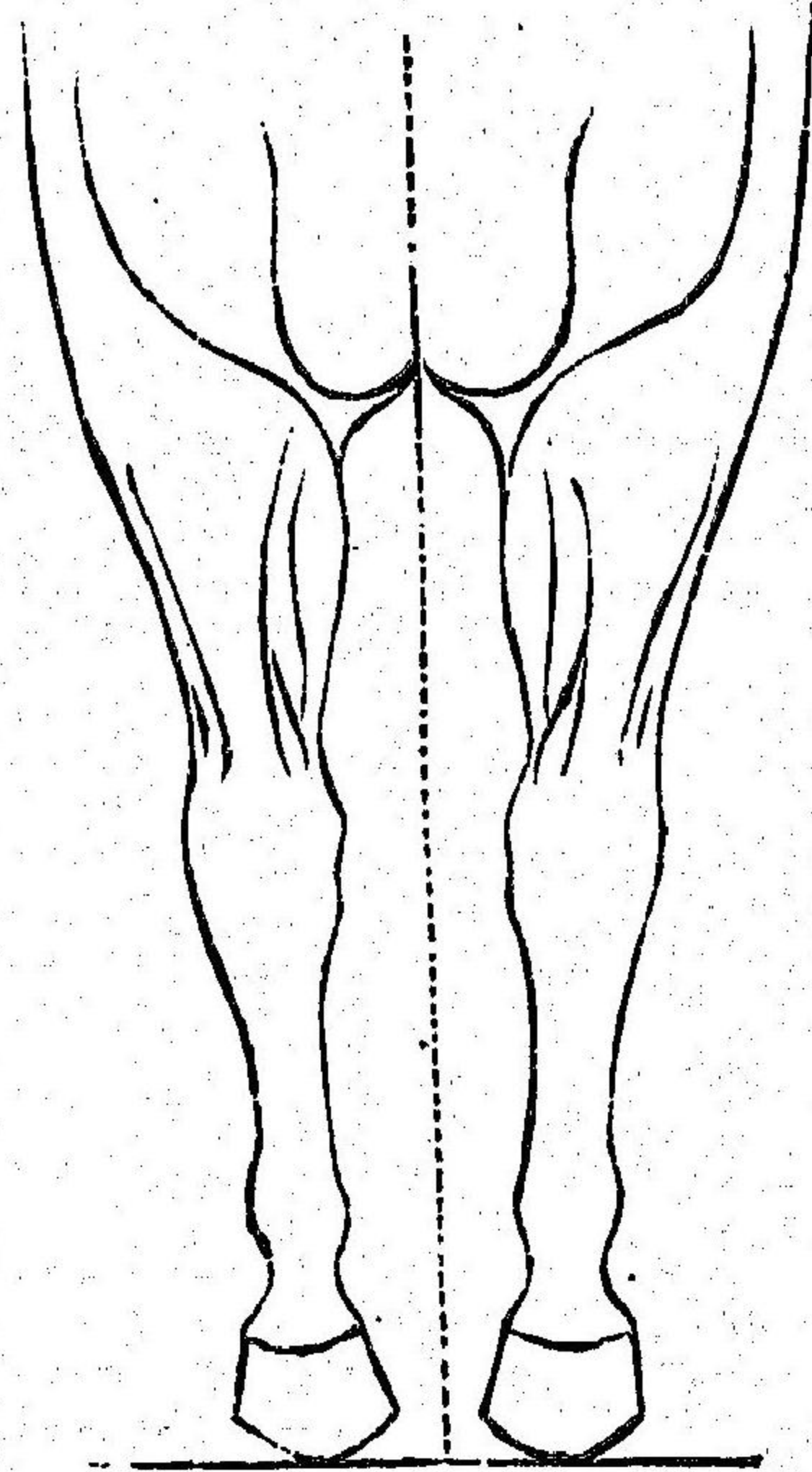
第五十三及第五十四圖 狹踏狹窄脚

狹踏とは肢が下方に向て内方に傾く肢勢にして體重は常に蹄の外側に落下するに

より蹄の外壁は峻立し内壁は傾斜せる外狹内廣蹄を生ずさうして此の肢勢に伴ふ體形は多くは胸の廣き馬か尻幅の廣過ぎるものか或は臀股筋の發育不良か又は腰飛節繋の軟弱なる者かに見る處にして地を踏むに當り先づ外蹄側を着き次に内蹄側に及ぶ、跣足蹄にありては外蹄側は磨滅すれども體重壓を免がる、内側壁は斜めに内方に延びて其の部が、運歩の際に地面につかへて、一層運びを悪くす

るにより益々外蹄側を踏着する様になる若し斯の如き肢勢の馬をして蹄の矯正を行はざれば外側壁の負線は内方に内側壁の負線は其の反對側に向て彎曲するに至るものなり。

圖三十五第
勢肢脚窄狹(踏狹の肢前)

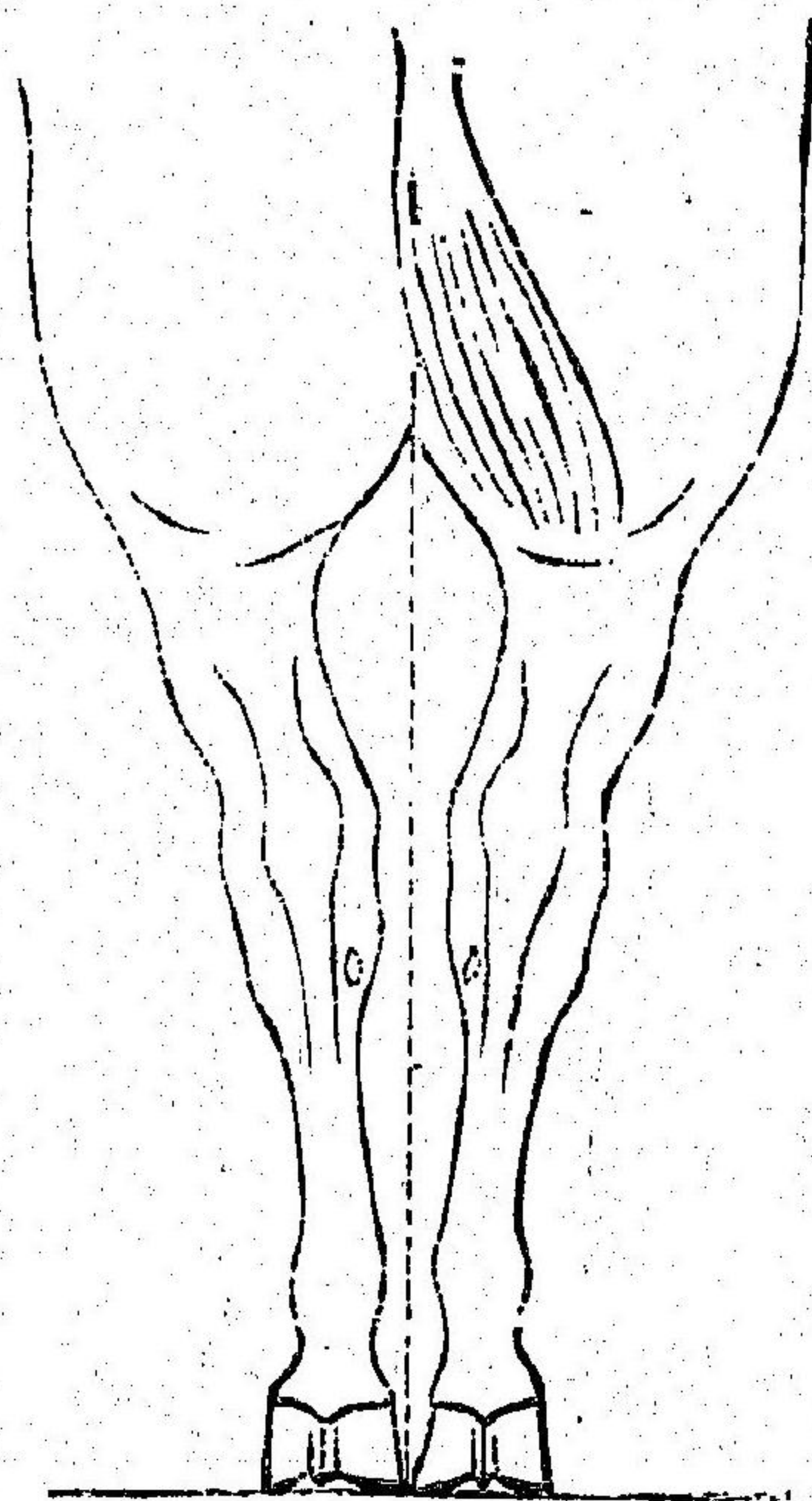


なきにあらざるも否らざるものは不良なり。

削蹄法。跣足蹄にありては體重を多く受くる外側は磨滅せられて低くなり、その免かる、内蹄尖及内蹄側壁は傾斜延長するにより削蹄に當りては先づ長さ内蹄尖部を壁面より鋸去し尙は負面より内蹄尖及内蹄側部にかけて稍々短く削切す

判断。前肢にありては肩の附着肘の離れよく繋適宜に長く且つ緩からざるもの、後肢にありては背腰の接合よく飛節繋に力あるものなれば削蹄及裝鐵の法其宜しきを得ば矯正の望み

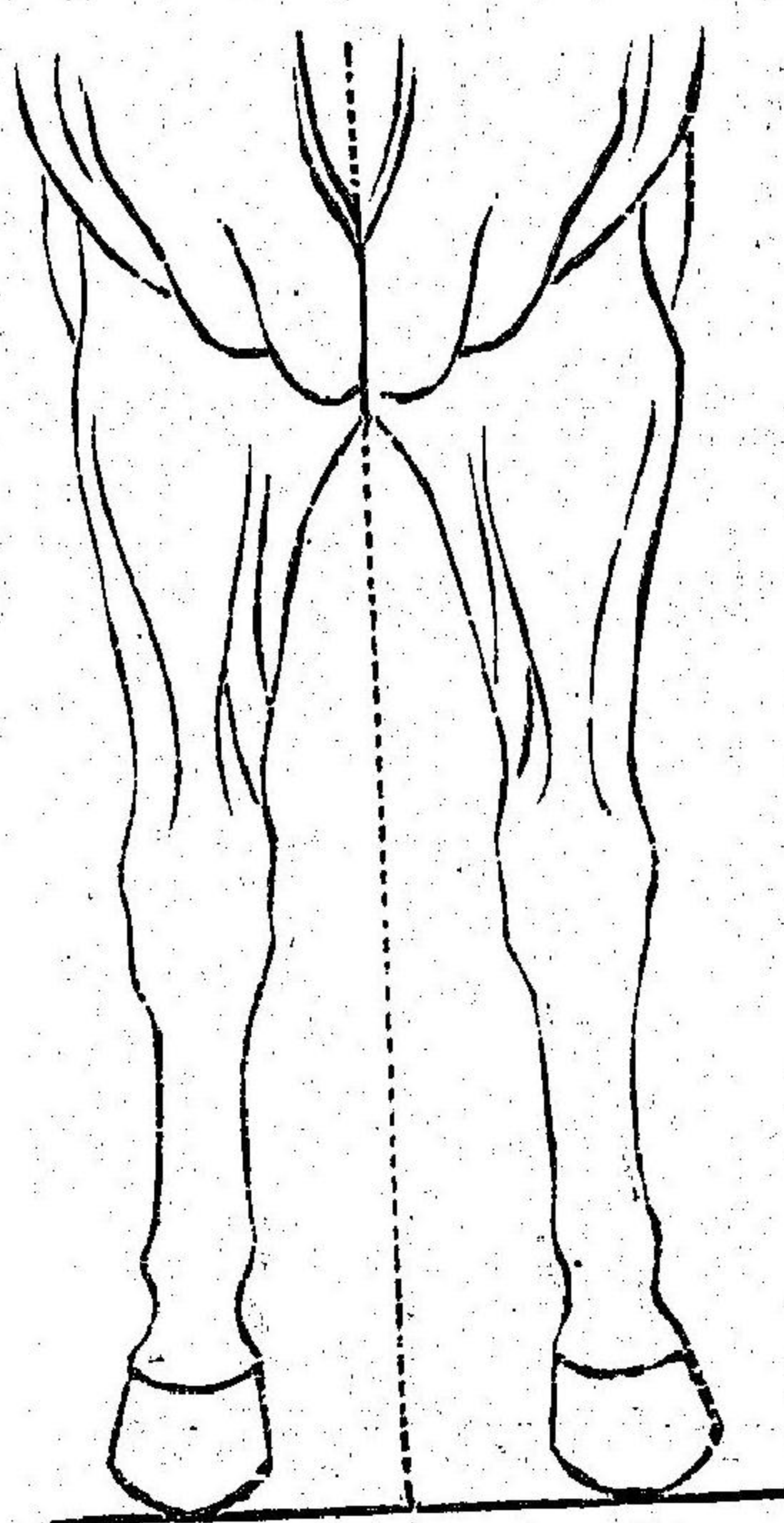
圖四十五第
勢肢脚窄狹(踏狭の肢后)



れば多くは平坦に踏地するを得れども久しく厩養して蹄の磨滅せざる者は装鐵せるものと同様に發育宜しき外蹄側は必ず峻立して高くなり踏地の際該部は先着するにより斯る場合には假令跣足踏たりとも装鐵蹄と同じく外蹄側を負面より削りて低くし内蹄尖及内側の斜めに延長せる部分は短く鋸去し後肢に於ても

内蹄尖及内側壁の延びたる部を短く削りて蹄を起てた方がよろし。装鐵法。鐵を装せるものにありては峻急なる外側の鐵は磨滅するも蹄は發育して高くなるが故に剝鐵して平坦なる蹄側及外蹄尖部の負縁を削りて低くし斜めに延びたる内蹄側部は鋸して短くすれば平らかに踏地する様になる。装鐵法は峻急なる外蹄側部に相當せる外鐵枝を

圖五十五第
勢肢脚張分(踏廣の肢前)



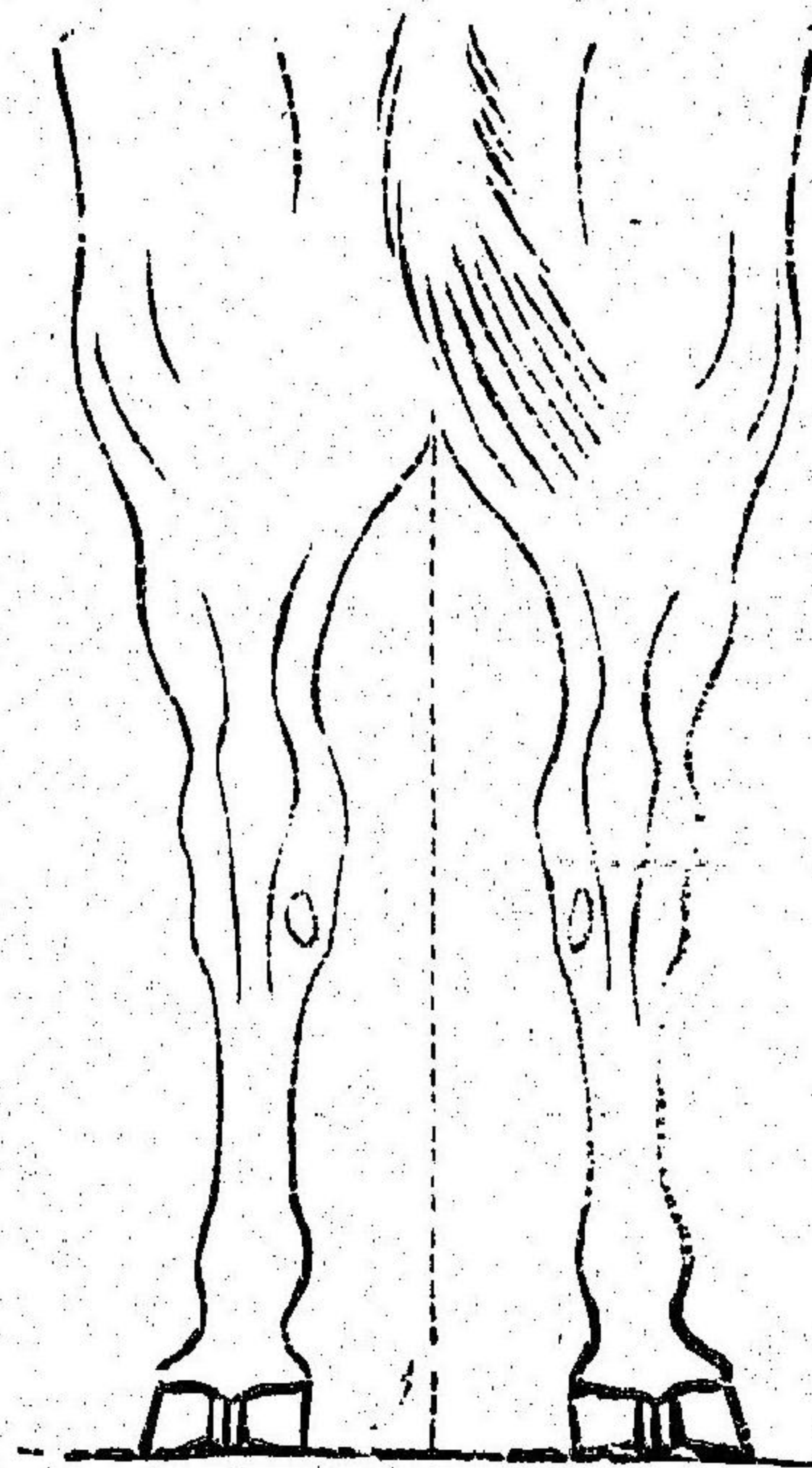
負縁外に少しく提出せしめて支撐面を廣くすべし斯くすれば鐵の内側に壓入するを防ぐことを得る。

第五十五及第五十六圖 廣踏分張脚

此の肢勢は前者の反對にして下方に向つて外方に傾く肢勢を云ふ胸狭く且つ淺く肘の胸側に接したる馬に見る所にして外向肢勢に牛膝を伴ふこと多く之れに繫長

く且つ緩きものは間々對側脚に交突することあり。判断。此の肢勢にありても胸狭からず肘の離れよく比較的に繫に力あるものなれば良なり。削蹄法。此の蹄形は内狭外廣蹄なるにより跣足蹄にありては内側は常に過滅せ

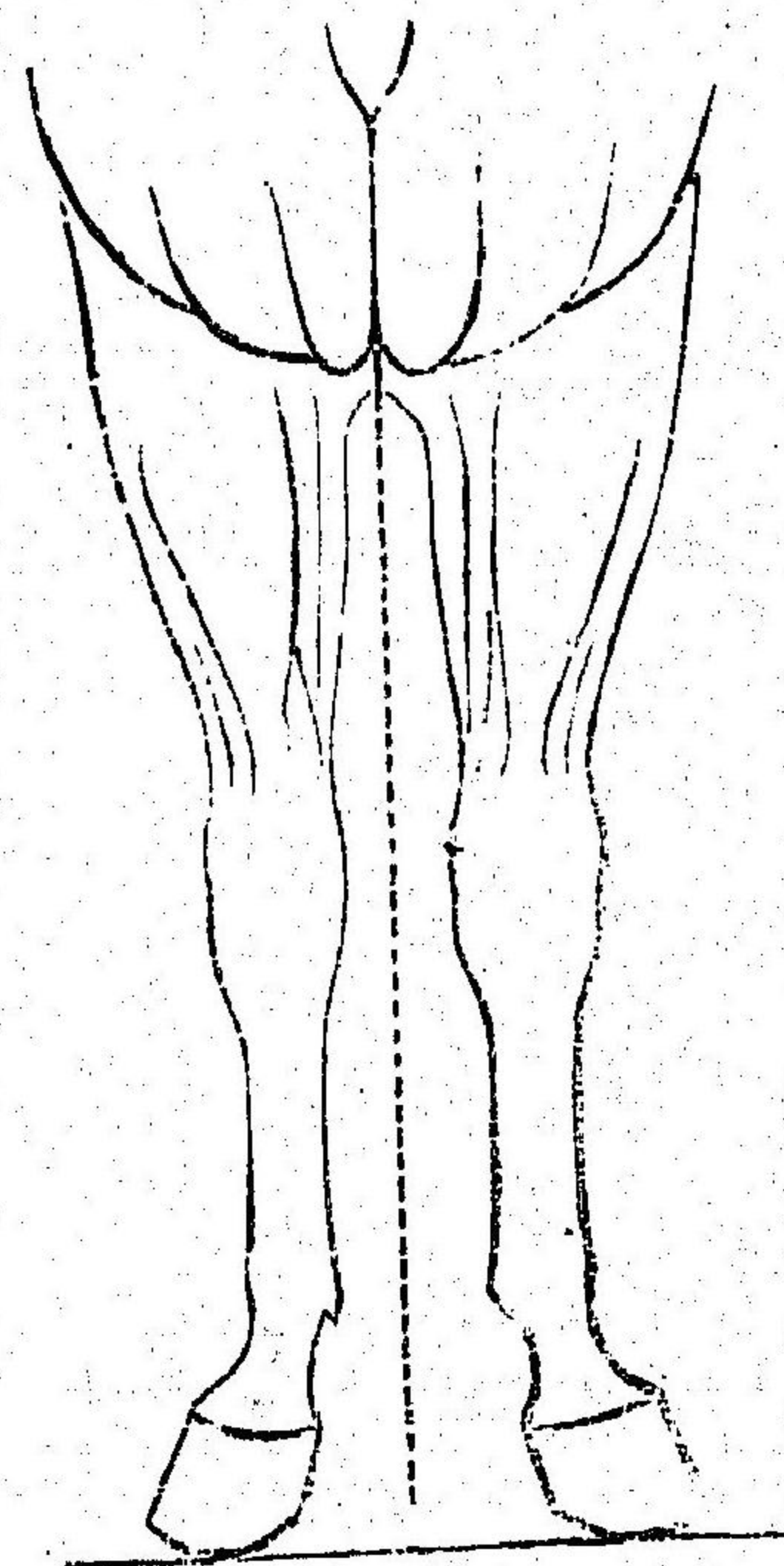
圖六十五第
勢肢脚張分(踏廣の肢后)



られて低く、外側は斜めに長く延びて其の部が踏地する際つかへるにより削蹄の目的は其のつかへる外蹄側部を削り尙ほ幾分か壁面よりも鈍して短くすれば平坦に地を踏む様になる。

裝鐵法。跳足蹄にありては狹踏の反對側なる外側を削除すれども裝鐵蹄に在りては鐵の内側は磨滅せられて薄くなれども其部の蹄壁は發育して高くなり甚しきときは内彎して狹踏と反對の變形をなすが故に先づ高さ内側壁を削りて低くし長さ外壁を壁面より短く鈍去せねばならぬ、そうして之れに外向肢勢を伴ふものによりては外蹄尖部をも削切する、若し交突の虞あるものなれば内鐵枝の鐵縁を下内方即ち下狹に鈍去するか或は鐵の内鐵肩部の鐵縁を下狹に鈍去して交突を防ぐがよい。

圖七十五第
勢肢角對外(勢肢向外の肢前)
ちぶ前外 [名俗]



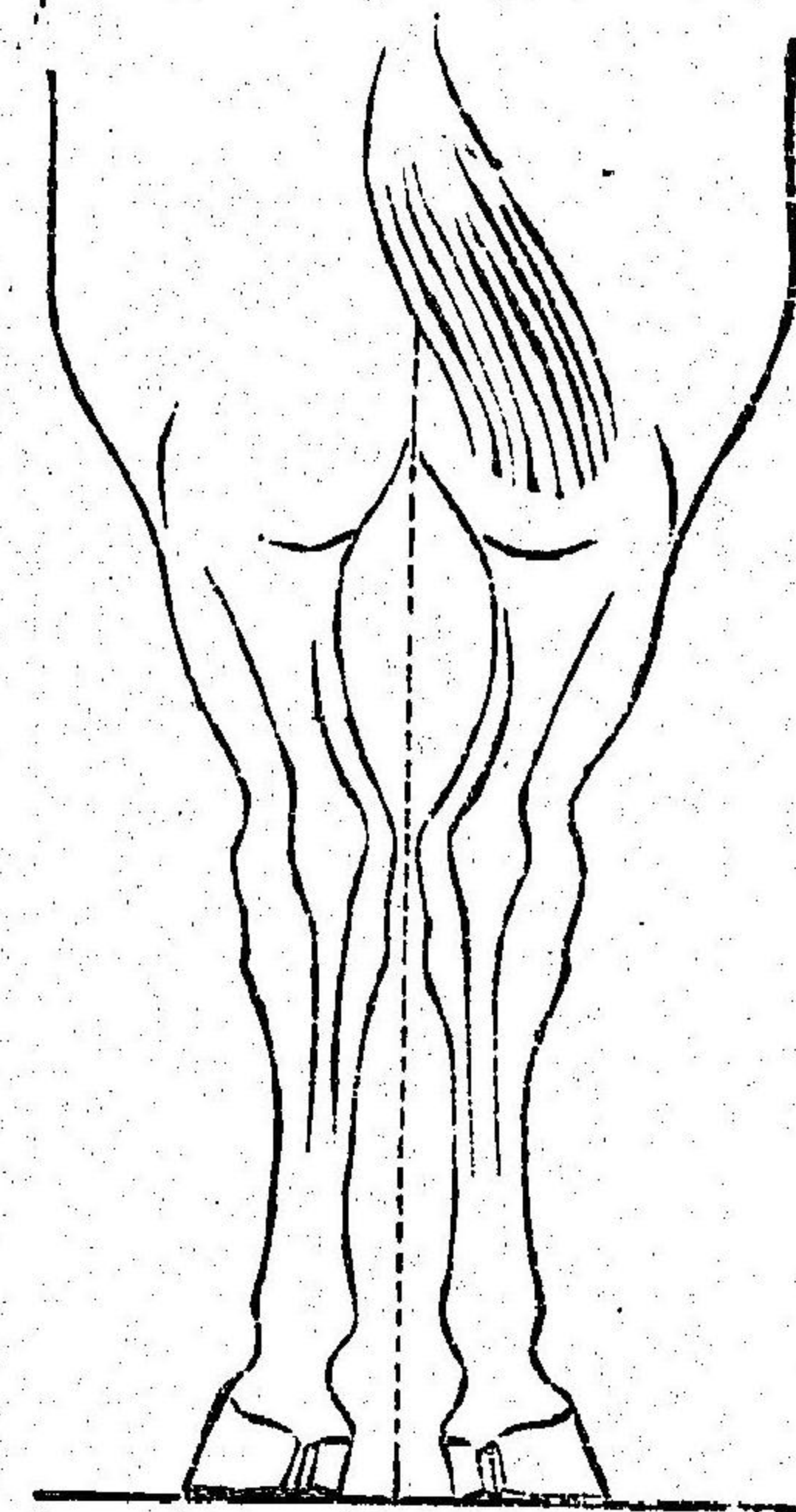
第五十七及第五十八圖 外向肢勢外對角肢勢

此の肢勢は肢位外方に向ふ肢勢にして内國馬の通有肢勢なり、其の種類は一様ならざるも肘以下の外向最も多く膝及繫より著しきあり或は之れに牛膝廣踏を伴ふもありて種々の肢勢を合併するもの多し、單純なる外向肢勢なれば外向蹄を伴ひ多くは内踵及外蹄尖壁部を以て踏地すれども廣踏或は外弧肢勢を伴へば内側を踏地すること單純のものよりも多く蹄形は半廣半狹の外向蹄である。

判斷。此の肢勢を判斷するには外向肢勢の程度と他の異常肢勢を伴ふや否やにあり、即ち胸狭く肩附き低く肘節胸部に接觸するものは肘離れ不良にして歩様狭く殊に狭胸にしして繫緩きものは動もすれば對側肢に交突することあるに依り

判斷に當りては胸の廣狹、肩の附着、肘離れの良否、繫にかあるや否やを鑑定せねばならぬ。

削蹄法。 跣足蹄にありては多くは内蹄踵及外蹄尖部は磨滅して低くなり内蹄尖

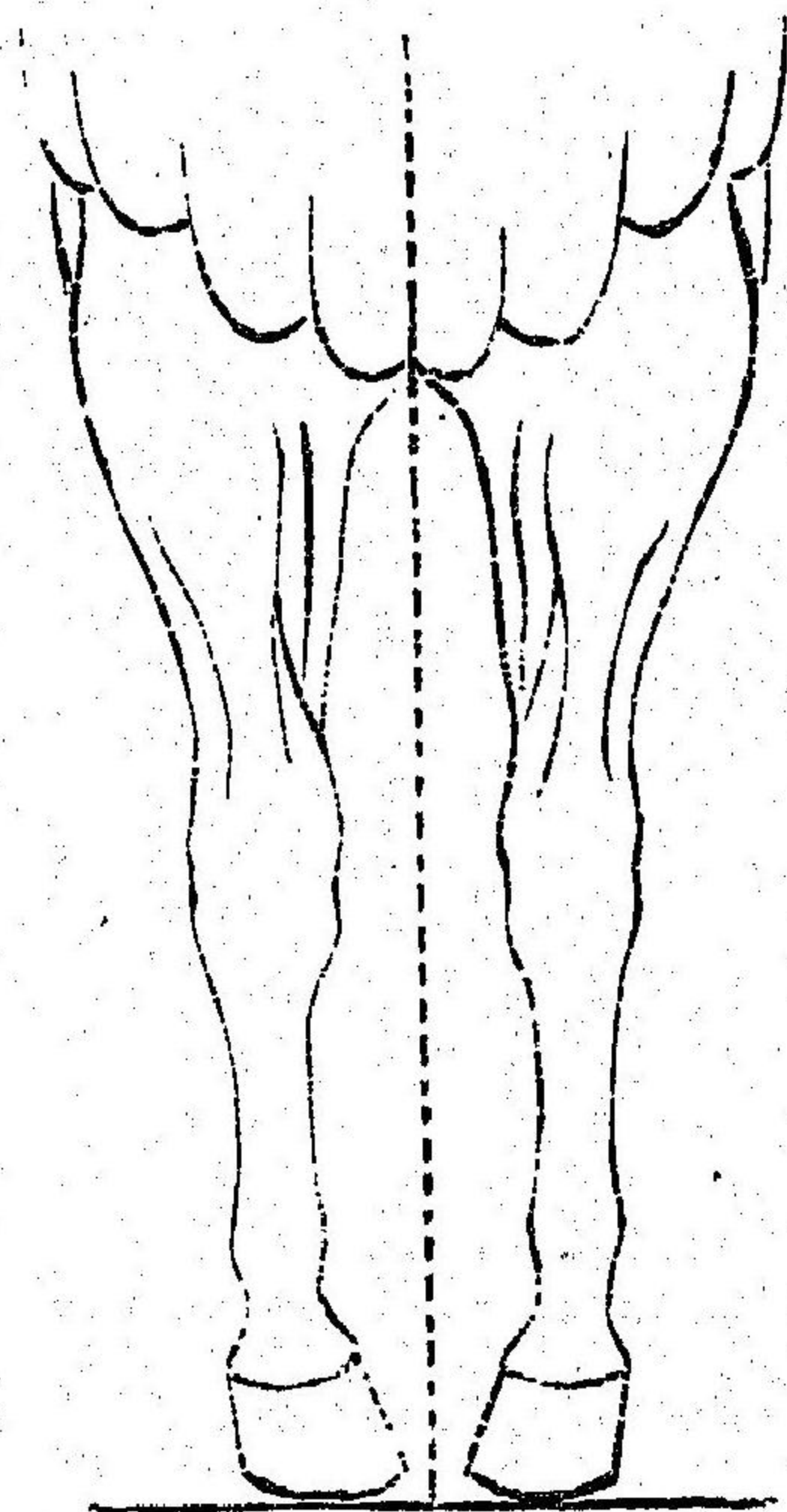


圖八十五第
(勢肢向外の肢後)

外蹄尖部過減せるものなれば低きが故に刀を下す必要少けれども永く休養せるものには裝鐵蹄と同じく外蹄尖及内蹄踵部發育して高くなるにより本肢勢削蹄の常則たる外蹄尖及内蹄踵を削るべく、さうして繫緩きものなれば外蹄尖部を削

壁面より短く鑑去し
廣き長き内蹄尖部を
削り得べく削蹄法は
別し得べく削蹄法は
の外向するを以て區
別し得べく削蹄法は
觀あれども前膝及繫
の内向肢勢なるやの
のみを一見すれば恰
ば蹄軸のみ内向し蹄

圖九十五第
勢肢角對内(勢肢向内の肢前)
ちぶ前内 [名俗]



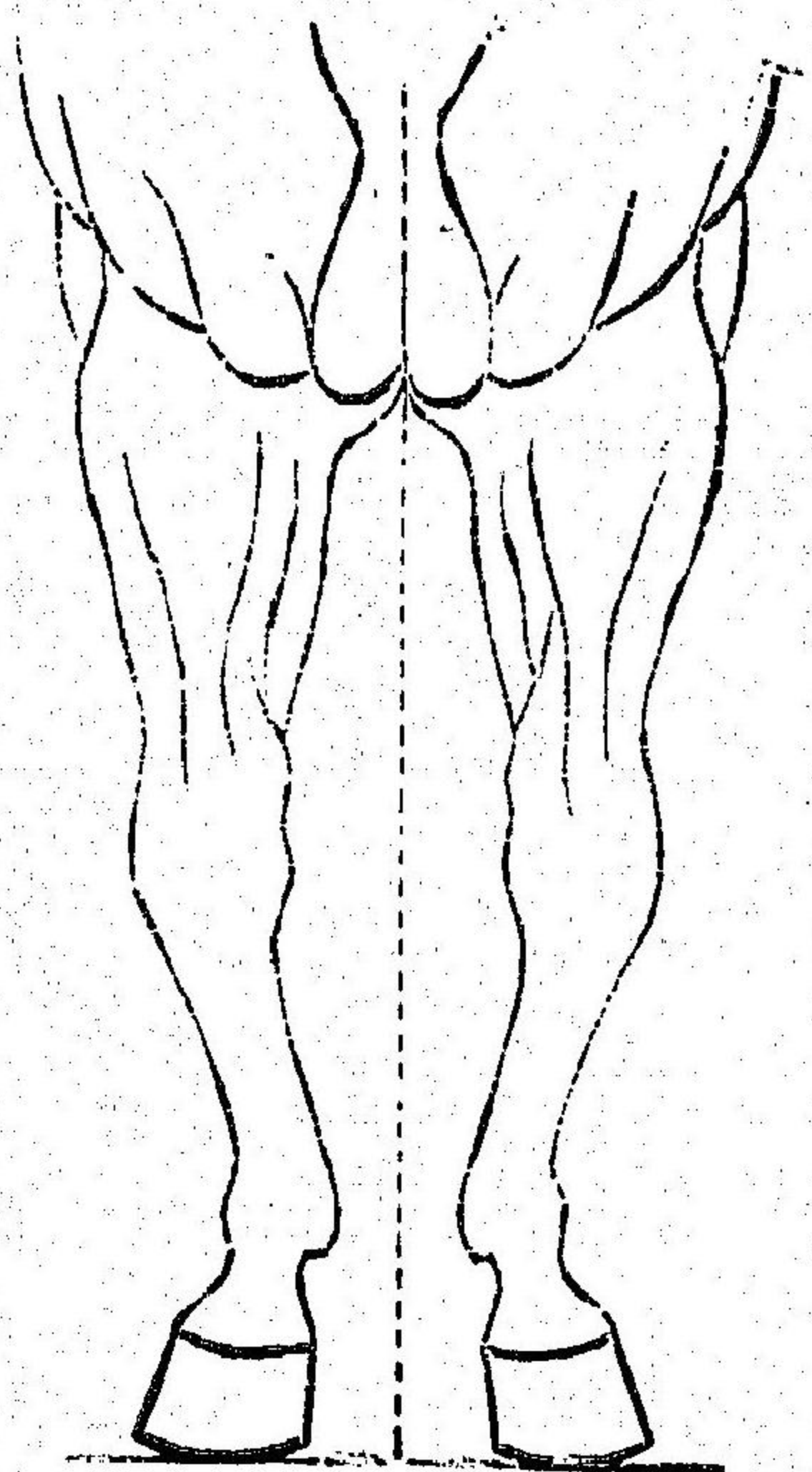
は眞の内向肢勢なるもの少けれども山坂狹隘の傾斜地に使役若くは放牧せる馬には蹄の外側過減の爲め蹄のみ内向せる假内向蹄は屢々見る處にして眞の内向蹄とは削蹄裝鐵の法を異にするに依り宜しく區別すべし。

りて蹄を起し繫に力を加へて返りを良くすべし。
裝鐵法。 裝鐵せるものありては常に體重を受くる鐵の外鐵尖及内鐵尾部は磨滅して薄くなれども蹄は發育して高くなるが故に剝鐵して歩ましむれば高さ外蹄尖部を地面に先着するにより其の部を多く削り、尙ほ内蹄踵部高くして地面に先着する様なれば其の部をも削らねばならぬ。

第五十九圖 内向肢勢
此の肢勢は前者に反し肢位内向するものにして我國の馬匹に

判断。先づ肢勢に伴ふ蹄形なるや假、内、向、蹄、なるや或、亦、裝、鐵、削、蹄、失、宜、の、爲、め、なるやを判し、眞の内、向、蹄、なれば外、向、蹄、に反する削蹄を行ひ假裝のものなれば内、蹄、尖及内、蹄、側、部、は通常延長せるにより其部を壁面より鏝去し負面よりも低く切るべ

圖十六第 勢肢脚狀○(勢肢弧内の肢前)

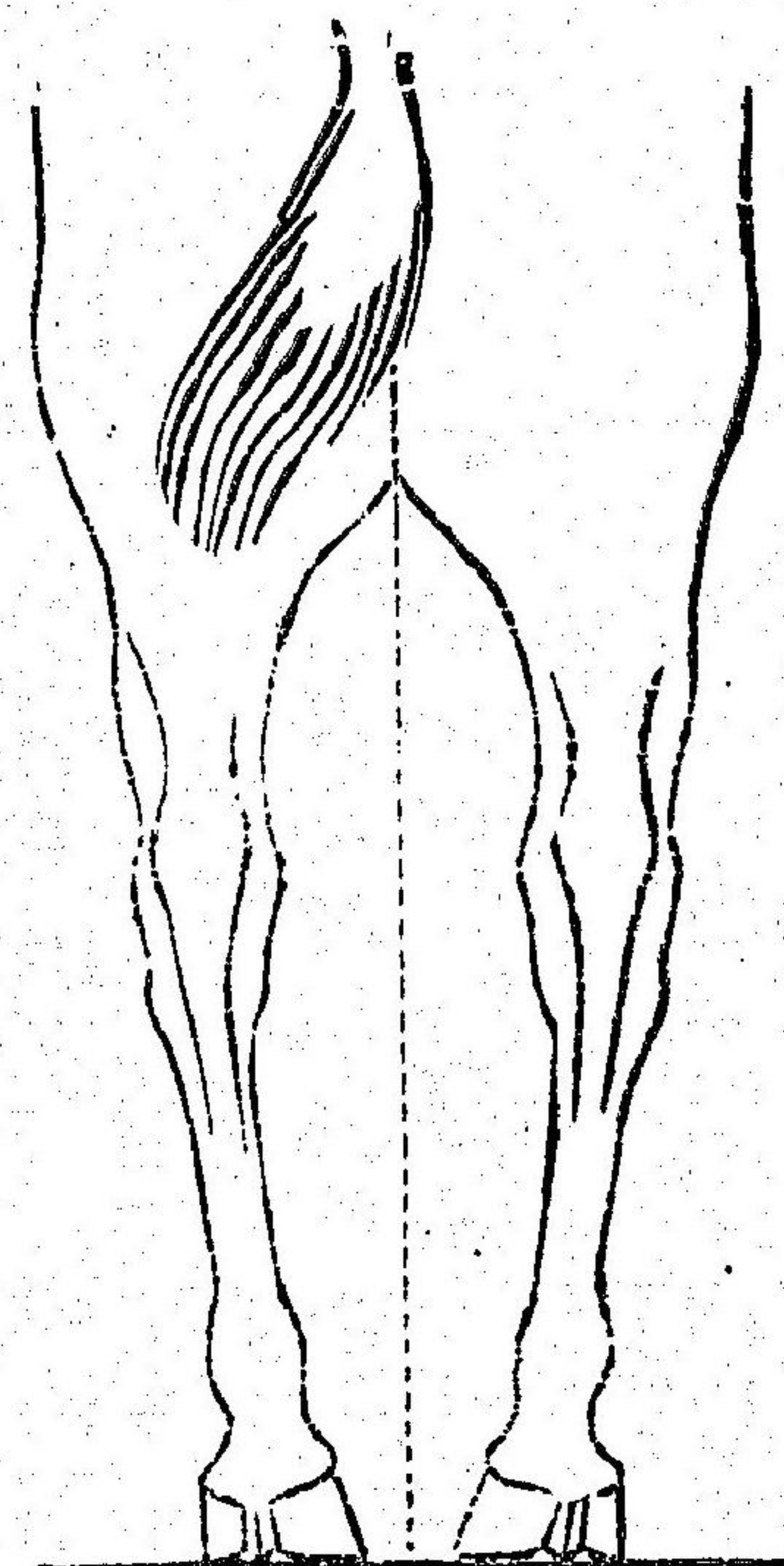


く殊に繫の弱きものは蹄踵を助けて蹄を起さねばならぬ。

第六十及第六十一圖 内弧肢勢○狀脚肢勢

此の肢勢は前肢に於ては膝后肢に於ては飛節に於て開き以下内方に向ふ肢勢にして異常肢勢中最も不良の肢勢なり前肢に稀に於て後肢に多く運歩の際飛節及繫を捻轉し蹄形は外狭内廣蹄なり。判断。後肢に於ける此肢勢は背腰の接合臀股諸筋の發育よく繫に力あるものは比較的良なり。

圖一十六第 勢肢脚狀○(勢肢弧内の肢後) もど輪金 [名俗]



削蹄法。後肢の跣足蹄にありては體重の壓迫を受くる外蹄側部は常に磨滅して短くなれども内蹄尖及内側壁部は長く斜向し其の延長部が地面につかへて益々此肢勢を過度ならしむるが故に削蹄の目的は内側の延びてつかへる部分を削り尙ほ前壁を削りて蹄を起し繫に力を加へた方がよ。

装鐵法。装鐵蹄にありては跣足蹄と異なり先着する外蹄側の鐵は磨れて薄くなれども外蹄壁は峻急に發育して高くなり常に外蹄側を先着するにより削蹄に當りて

は高さ外蹄側及同蹄尖部を削ると同時に長く延びたる内蹄尖及内側壁は壁面より短く鏝去し負面よりも同部を削りて低くし繫に力を付ける爲めに前壁を削りて蹄を起し尙ほ鐵の外鐵側は幾分負線外に提出せしめて支撐面を廣くし捻轉を

防が爲めには鐵蹄を設くる場合もある(以上は主として後肢)

第六十二及第六十三圖 外弧肢勢X狀脚牛膝

此の肢勢は前肢に於ては兩前膝後肢に於ては飛節互に倚り以下分張する肢勢に

して牛の膝の如き

が故に牛膝と稱へ

後肢に於ては俗に

「ヨリドモ」と云ふて

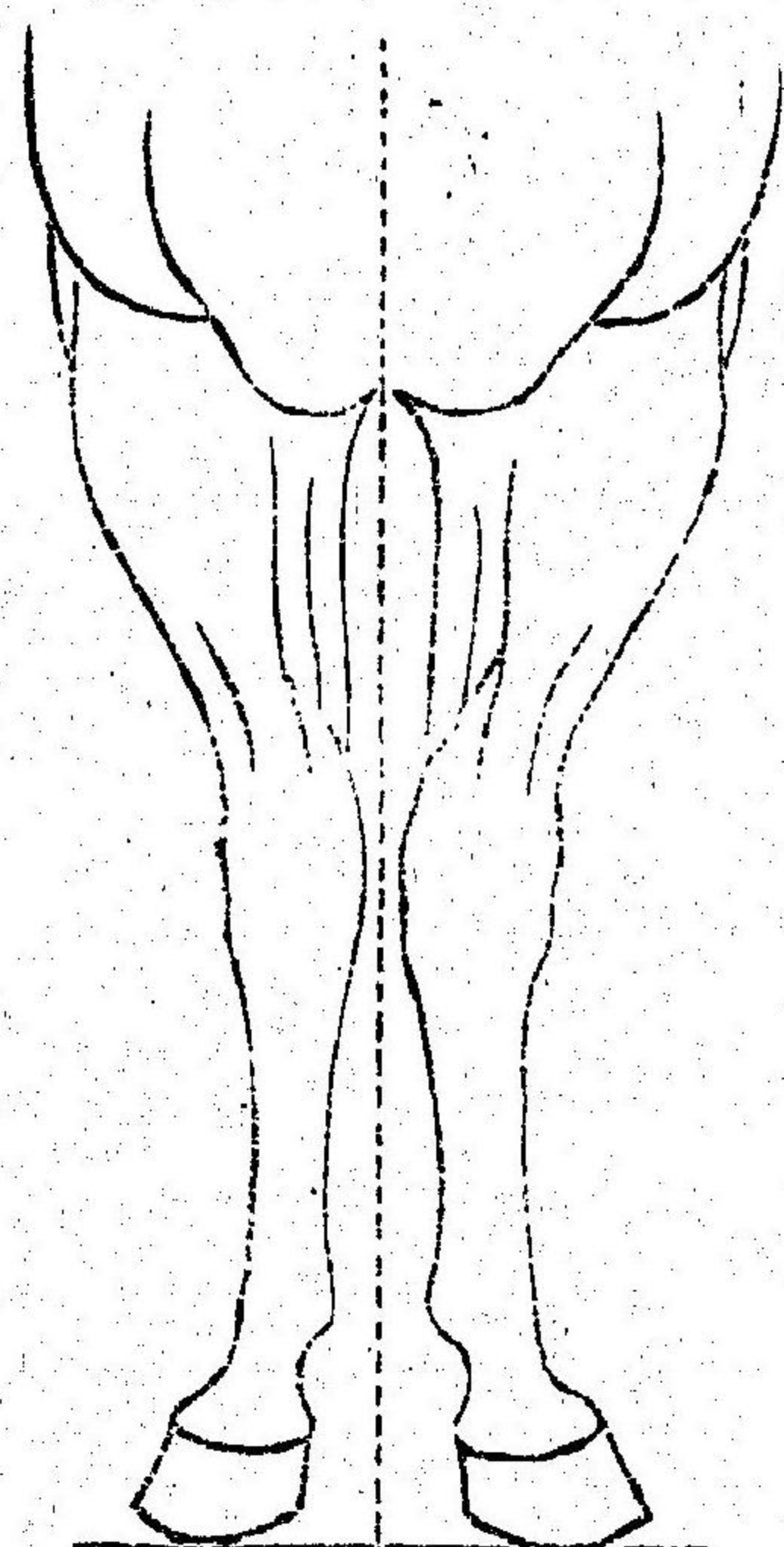
我國馬匹の通有肢

勢なり蹄形は内狹

外廣蹄をなし前後

とも歩行の際膝飛

圖二十六第
(勢肢弧外の肢前) Xの肢前
膝牛又脚狀さひりよ [名俗]



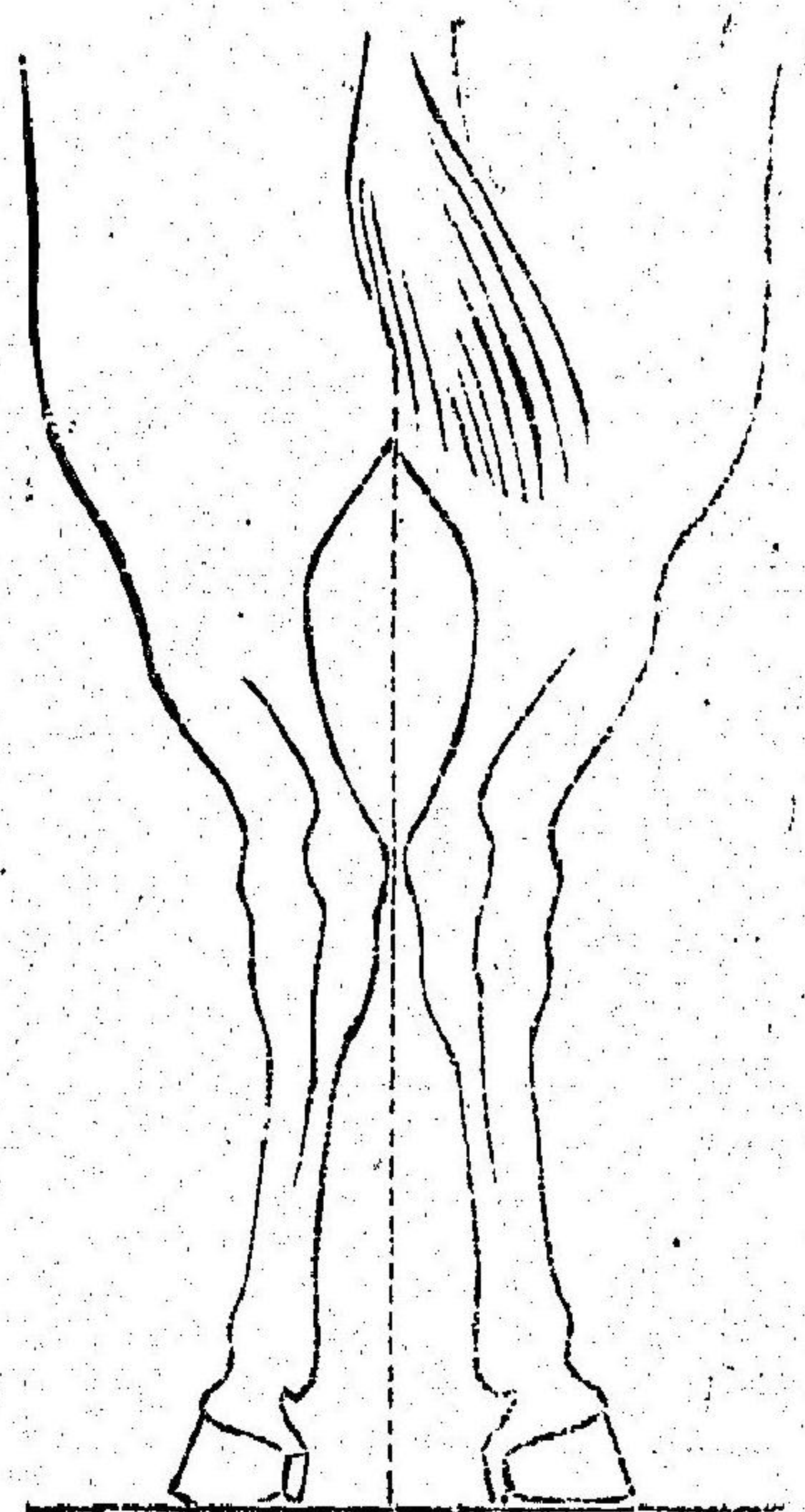
節の轉向運動甚しく一種奇異の歩様をなす。

判断。前肢は肘離れよく後肢は臀端割合に廣くして股筋の發育よきものは良

か。

削蹄法。跣足蹄にありては内蹄側は常に體重の爲めに磨れて低くなり外側は益

圖三十六第
脚狀Xの肢後(勢肢弧外の肢後) もどりよ [名俗]



々延びて地面につかへ前膝及飛節の内側に於ける激動が一層加はるにより削蹄の目的は之れを柔らげんが爲め廣き外蹄側部を壁面より鏝去し尙ほ負面よりも低く削るべし。

裝鐵法。裝鐵蹄に在りては跣足蹄と異なり内蹄側の鐵は磨れても蹄は發育して

高くなるにより必

ず内側を削り長く

延びたる外側は壁

面より鏝去して短

かくすべし。

第六十四及六十

五圖 狹踏外

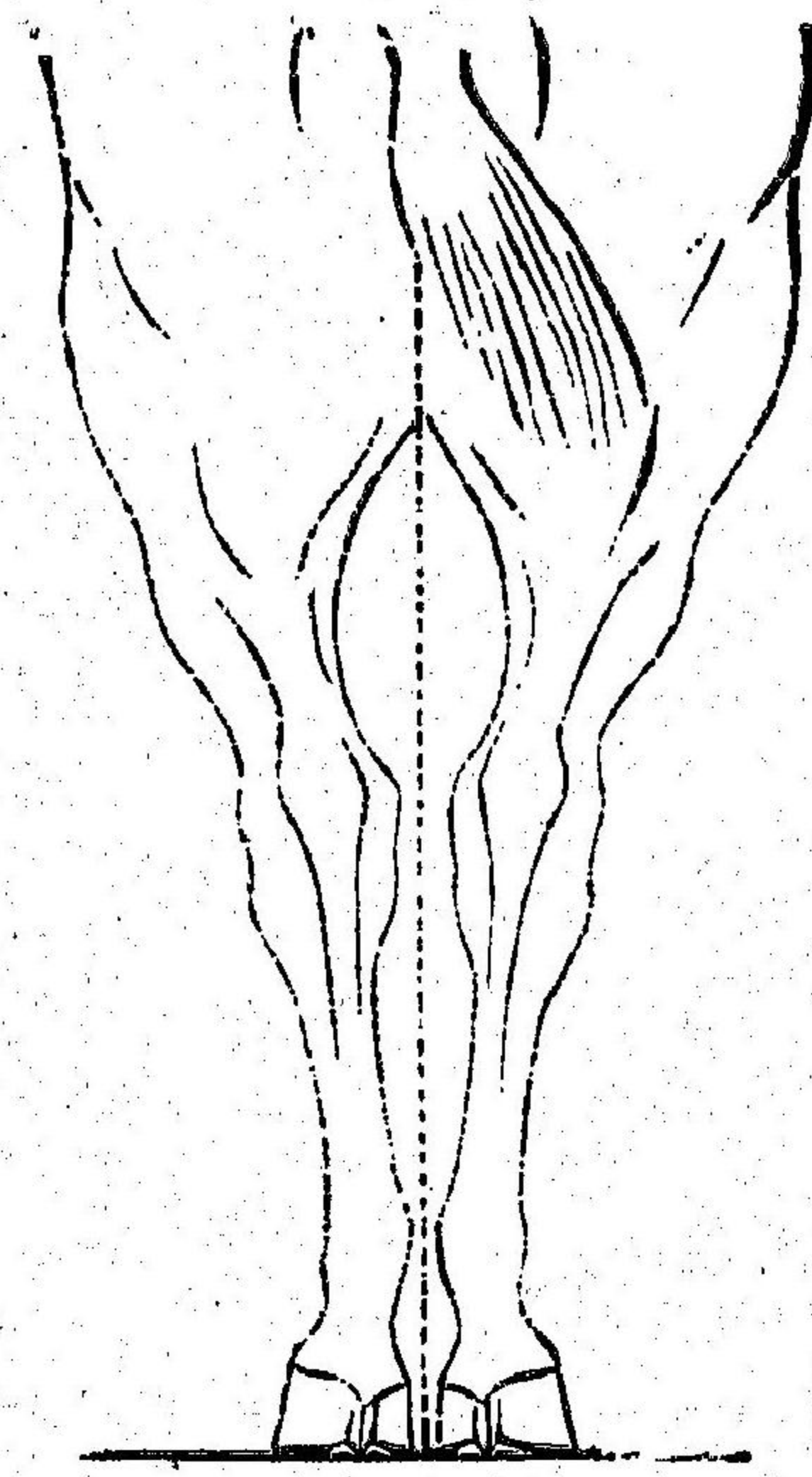
向肢勢

此の肢勢は狹踏に外向肢勢を合併したる最も不良肢勢にして之れに繋長く緩

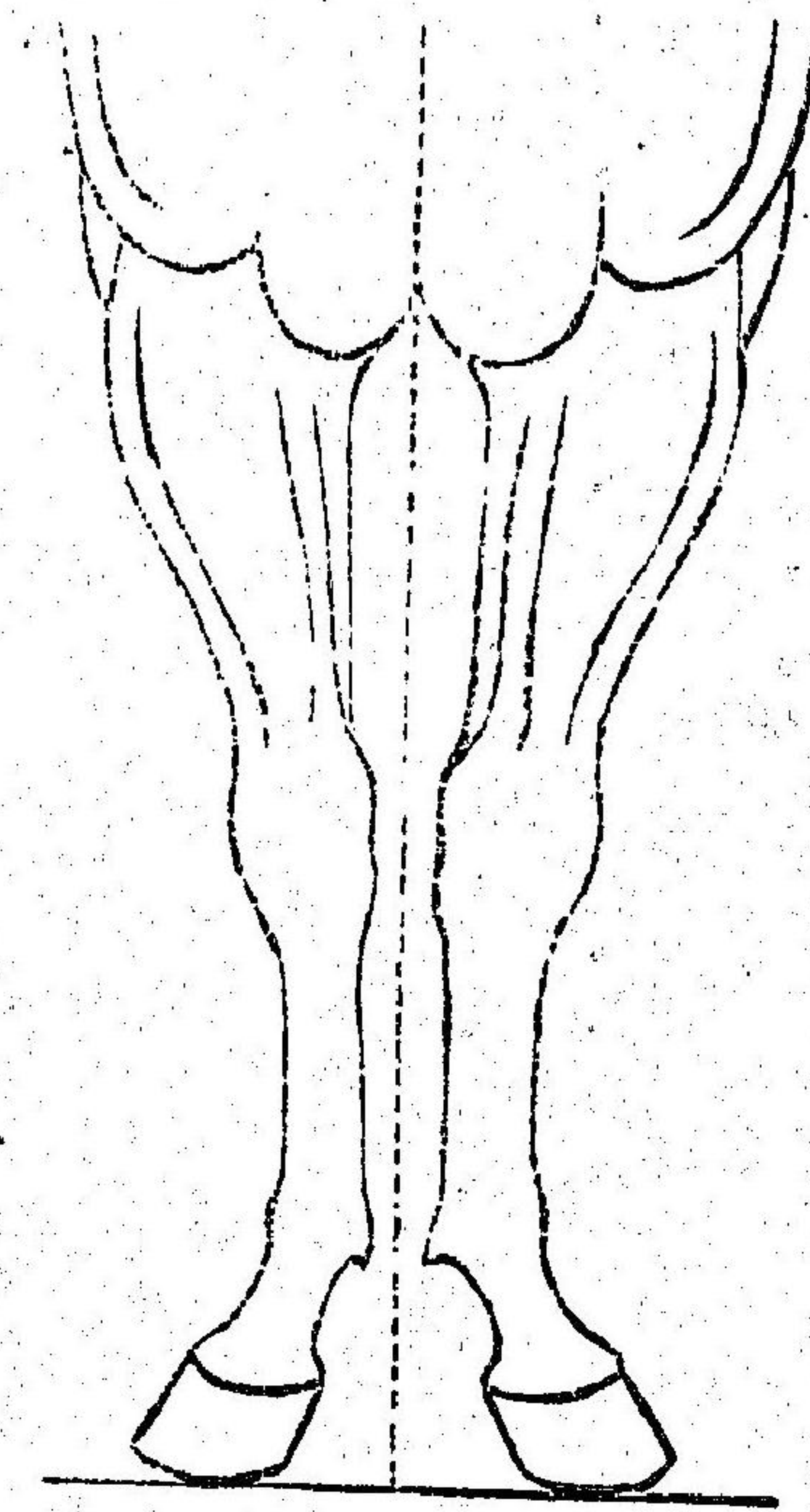
ときは運歩の際繋の轉向甚しく屢々對側肢に交突することあり。

削蹄法。概して蹄を起て繋に力を付け又外蹄尖部を削り尙ほ前蹄には上彎を設

圖五十六第
(勢肢向外踏狹の肢後)



圖四十六第
(勢肢向外踏狹の肢前)
ちぶ前付錢 [名俗]



けて返りを良くし
交突する者には第
五十六圖廣踏に述べ
たる交突鐵を裝す。
乙 前後側面に於
ける不正肢勢

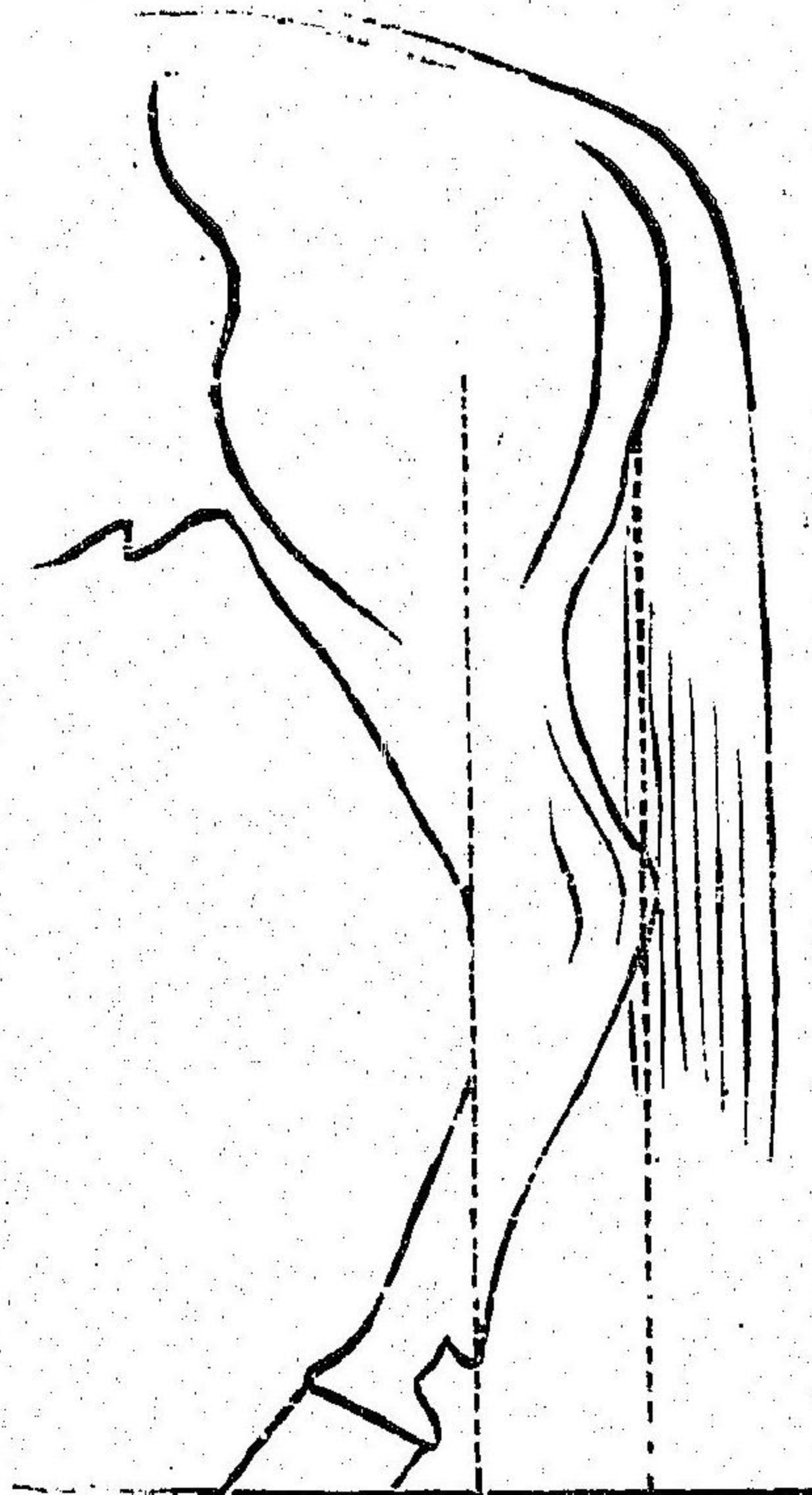
第六十六及六十

七圖 前踏肢

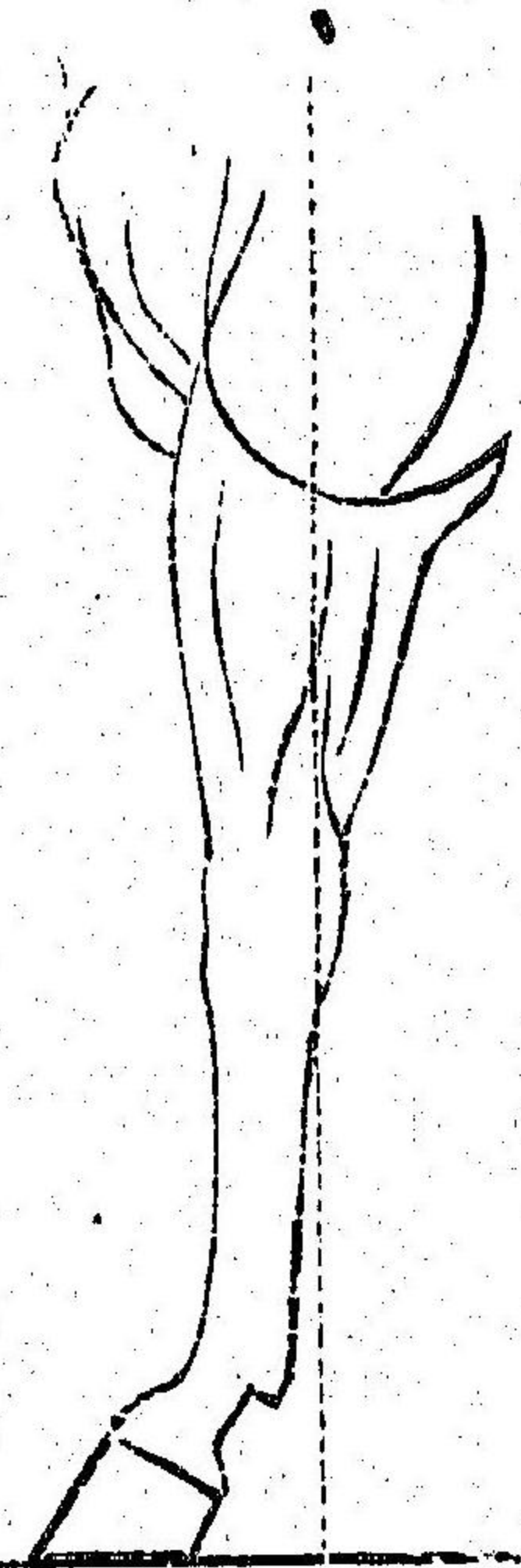
勢前立

此れは前に云ふ垂
線を離れて肢位前
立するものにして
前肢に稀れなるも
後肢には我國馬匹
に見る通有肢勢に

圖七十六第
勢肢立前肢前(踏前の肢後)

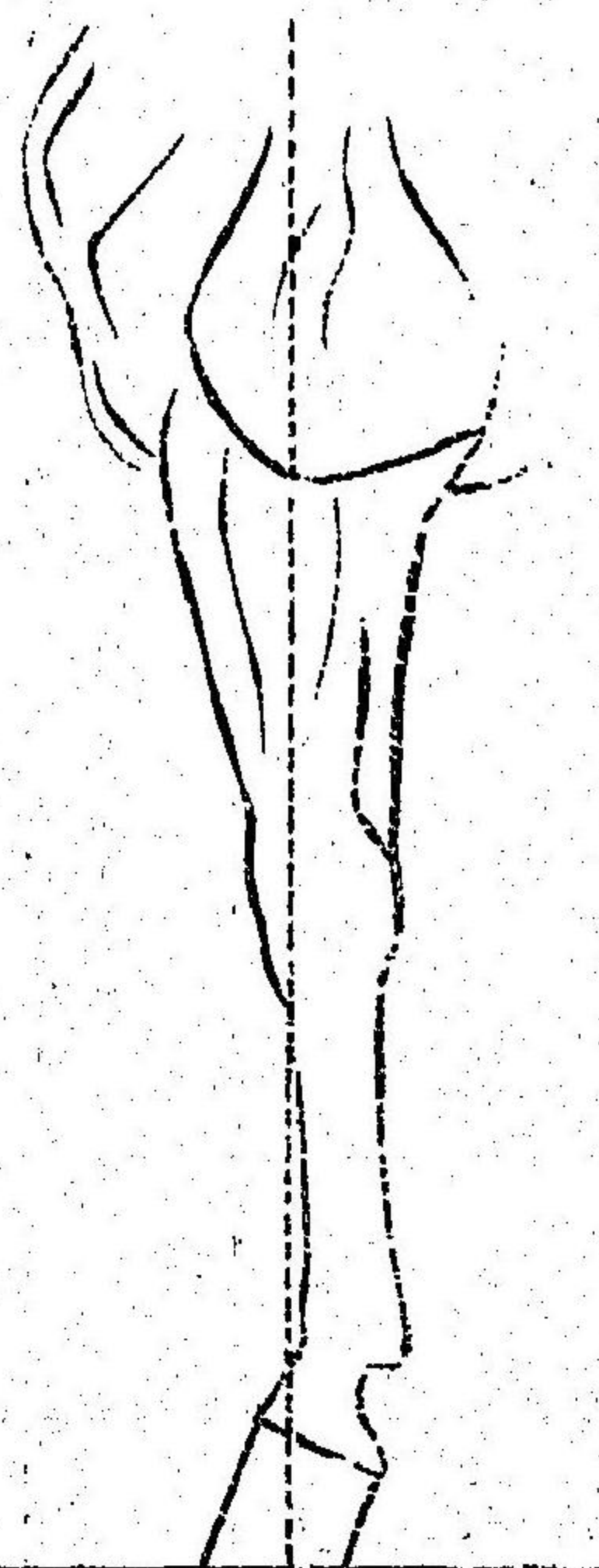


圖六十六第
勢肢立前(踏前の肢前)

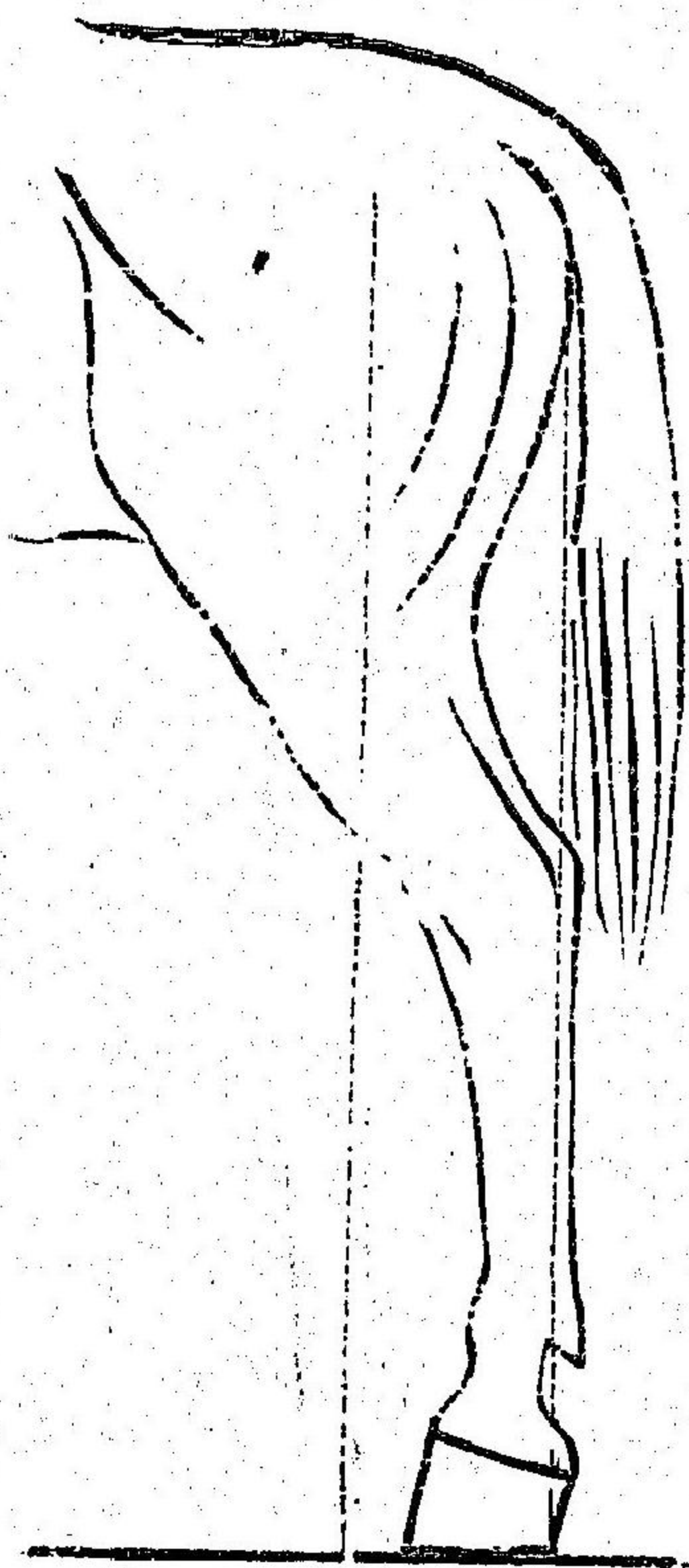


して多くは之れに
低繫を伴ふことが
多し。
判断 前肢にあり
ては比較的肩付き
肘離れよく繫丈夫
なるもの、後肢にあ
りては背腰の接合
と臀股諸筋の發育
よく繫に力あるも
のは良なり。
削蹄法 多くは軟
繫に低蹄を伴ふに
より概して前壁を
削りて蹄を起て前

圖八十六第
勢肢立後(踏後の肢前)



圖九十六第
勢肢立後(踏後の肢後)

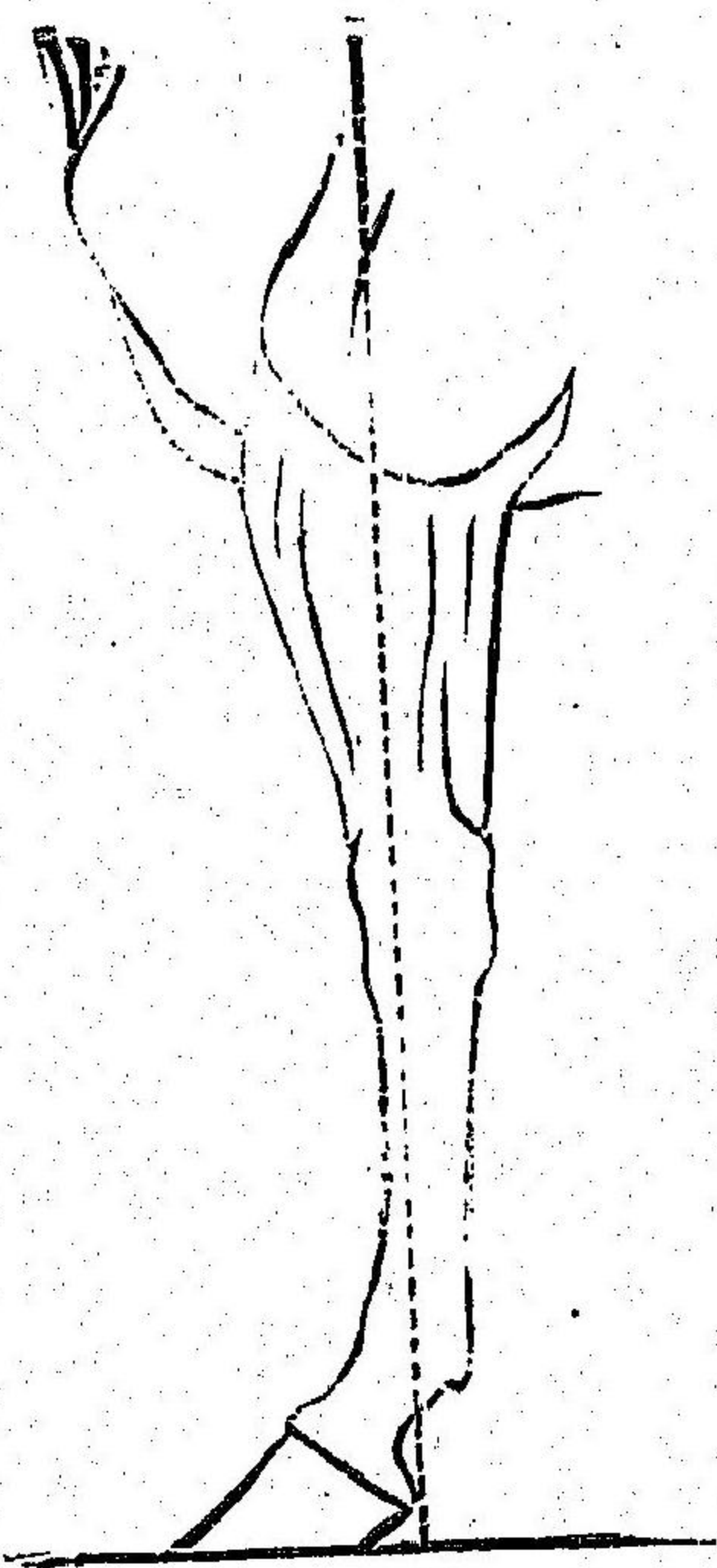


蹄にありては上變の度を多くして返りを良くし鐵を装する場合には鐵唇を焼込みて鐵唇を幾分長くするは低蹄に於ける裝鐵法の通則なれども追突の恐れあるものには宜しく之れを避けぬばならぬ。

第六十八及第六十九圖 後踏肢勢後立

此の肢勢は前立に

圖十七第
(膝 凹)
さひめた [名俗]



反し垂線を離れて肢位後退するものを云ふ概して前者より良好なれども其の原因肩の短直に由来するか水平尻に依るか起繋に因るものは不良なり。

削蹄法。通常踵壁部を削るべきものなれども一時に過削するは危険なり。

裝鐵法。前蹄にありては上變を少くして前後とも鐵唇を深く焼込まざる様裝鐵すべし。

第七十圖 凹膝(後彎立肢勢)

此の肢勢は前膝後方に

に凹彎する最も不良の肢勢にして多くは膝管腕部の構成充分ならざるが爲めに發す。

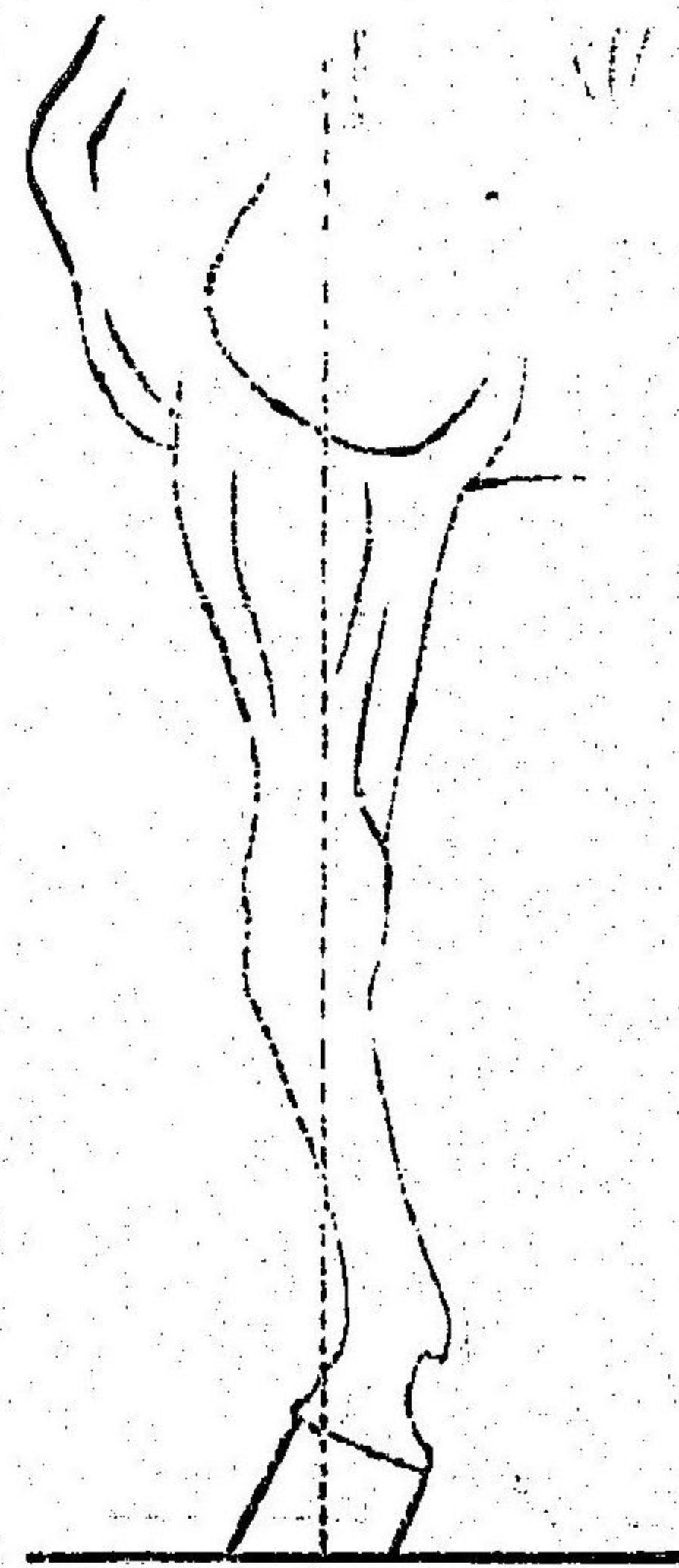
判断。壯馬には見込なきも幼駒にありては肩と頸との附着良く繋丈夫なれば望みあり。

削蹄及裝鐵法。低蹄に於ける方法を應用すべし。

第七十一圖 彎膝前彎立肢勢

此の肢勢は前者に反し膝の前方に凸彎する肢勢を云ふ。判断。使役の結果に因らざる膝曲りにして頸肩の附着よく繫に力あるものなれば望みあるも使役の結果膝の短縮關節の用廢によるもの及軟繫のものは不良なり。

圖一十七第 (膝彎) りがまさひ [名俗]

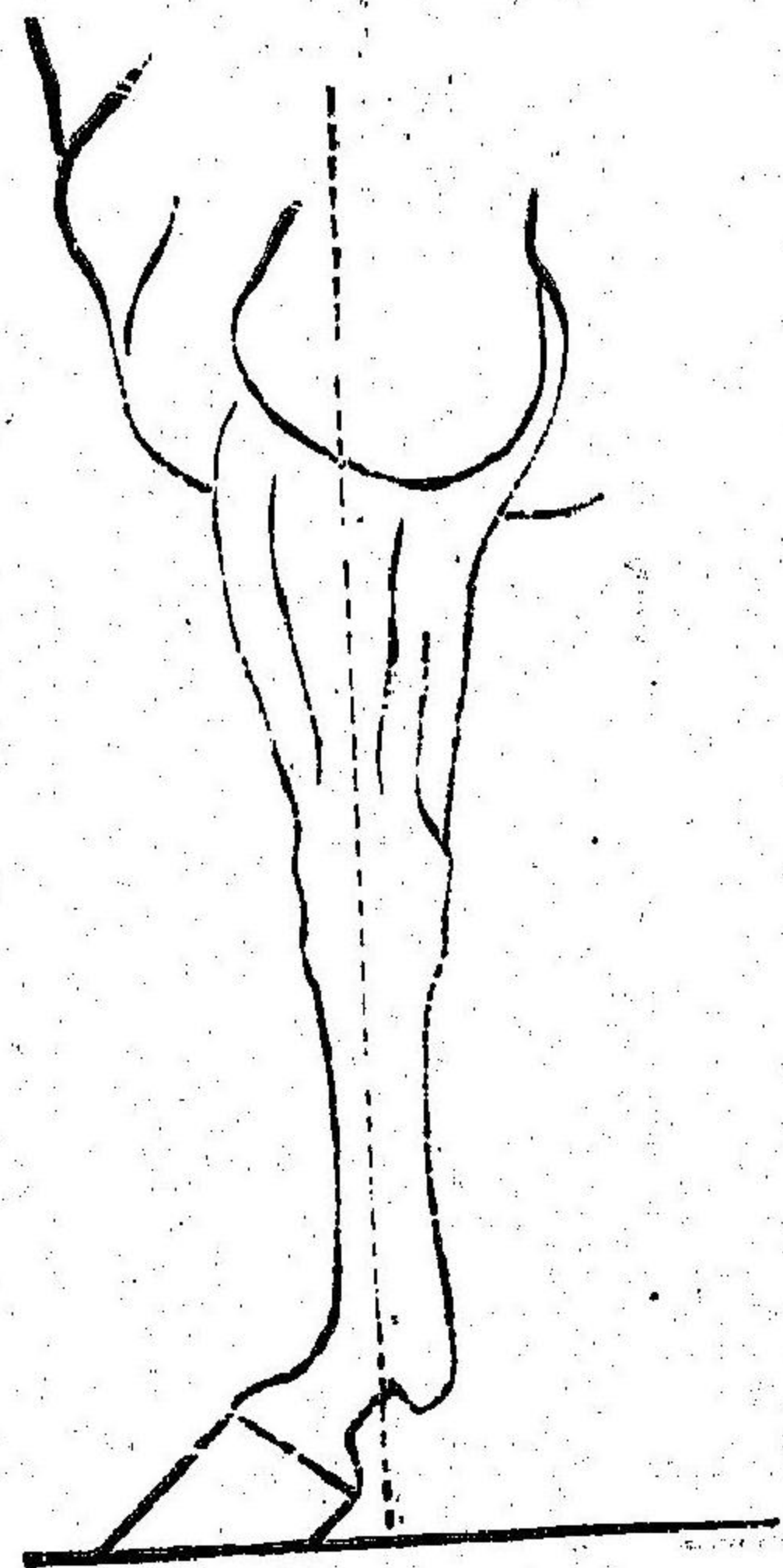


削蹄及裝鐵法。使役の結果による彎膝なれば寧ろ鐵蹄を設けて蹄趾を高くして膝の疲勞を豫防する必要あり。

第七十二圖 臥繫斜趾

此の肢勢は球節までは正しくして以下繫及蹄が著しく前方に傾斜せるものを云ふ。

圖二十七第 趾斜 (繫臥) で う [名俗]



膝に伴ふ低蹄と同一の方法なれども尙ほ之れよりも程度を進め削蹄するがよろし。

第七十三圖 起繫峻趾

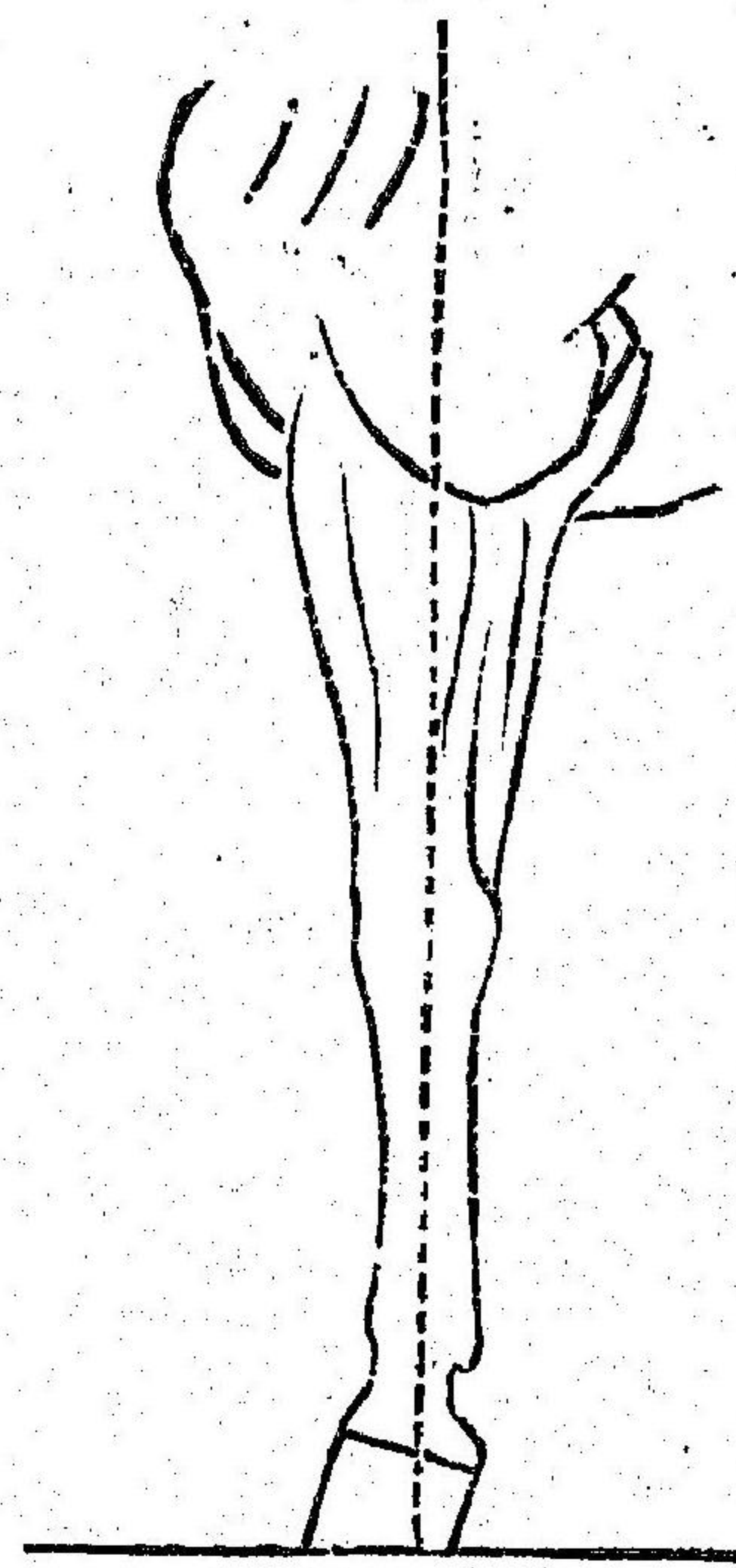
此の肢勢は前者の反對にして球節の著しく峻立するものを云ふ。

判断。此の肢勢を伴ふものは四肢ともに不良なれども前肢特に不良にして繫部軟弱なるが故に何れの使役にも疲かれ易く最も忌むべき肢勢なり。要するに判断に當りては他部に於て之を補償すべき構成を具ふるや否やにして即ち肩と頸と膝との附着よく繫の餘り長からざれる比較的望みあり。

削蹄法。は前立及凹

判斷 壯馬に於ける起繫は望みなきも幼馬にして肩付及肘の離れ良く歩むに繫のしなやかなる位のもの、將來直る望みあり。

圖三十七第
趾峻(繫起)
でうくぼ [名俗]



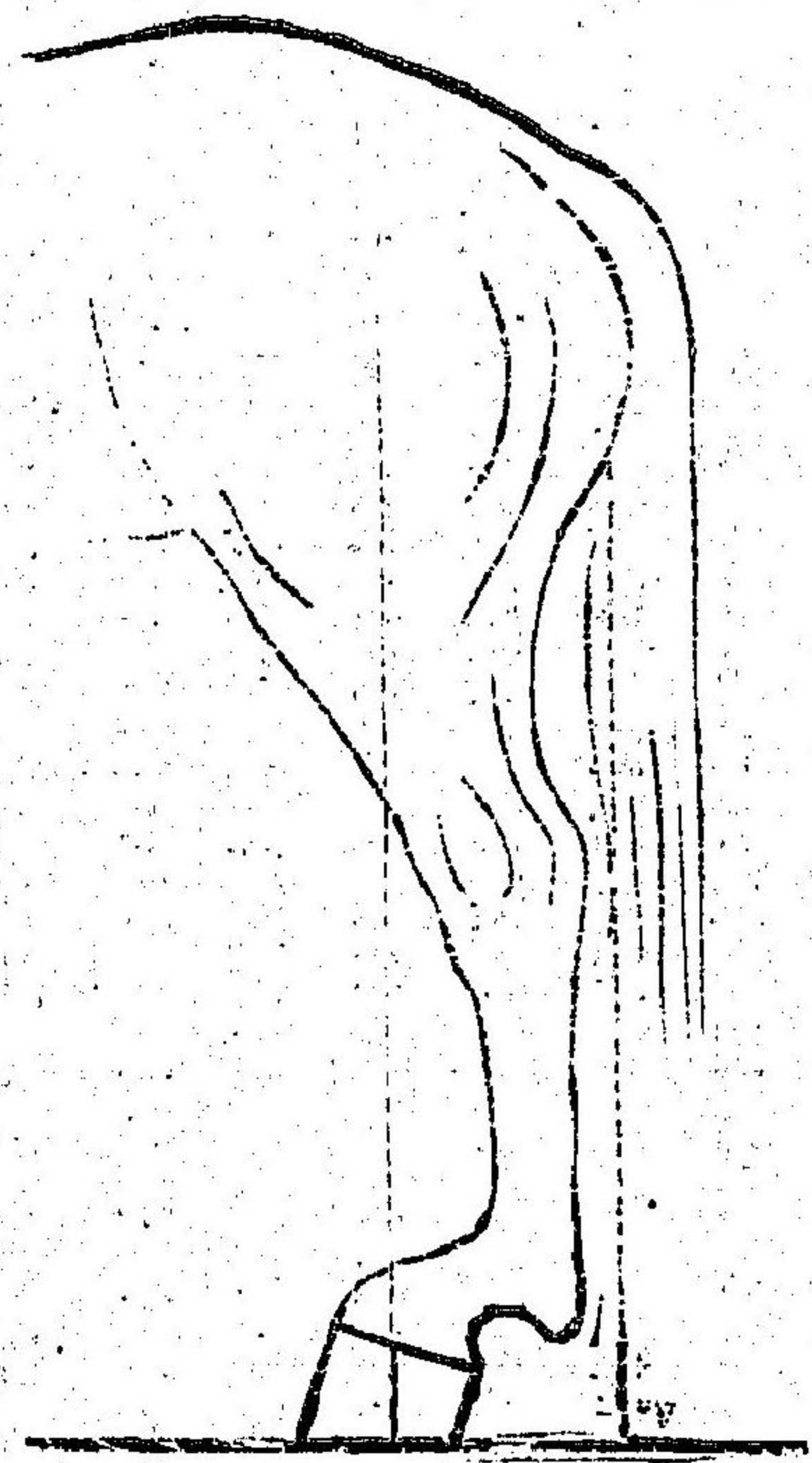
鐵唇の焼き付け法を加減するがよし。

第七十四圖 熊脚肢勢

熊脚肢勢とは繫部著しく斜向するにも拘はらず蹄は其の反對に峻立するものを

削蹄法。概して踵壁を僅かづゝ削るべきなれども幼時より之れを豫防せんには單に踵壁を削るのみに止まらず成るべく蹄後部の擴がらぬ様蹄踵壁外表部を薄切して其部の角質を弱くし或は亦兩側に擴張し易き蹄叉脚を幾分削除して力を減することも亦一法なり。

圖四十七第
脚熊の肢後)
びくって [名俗]



云ふ即ち繫は臥繫で蹄は高蹄なり其の甚しき者に至りては前方に屈し前壁面を以て踏地するものあり、そうして此の蹄側の後部は兩側に擴がり恰も鳥の兩翼の如き形をなして蹄の前屈するを支へて居る如きは熊脚に對する補償的變形と看

做さねばならぬ。

削蹄法。此蹄は前述の如く主として前壁を以て踏地し蹄踵部は寧ろ浮游するにより前壁部を削除するは勿論なるも蹄側后部の擴がりたる兩翼

部は刀を加へず牽る之を助け成るべく蹄踵部に負重する様削蹄せねばならぬ。裝鐵法。鐵を前壁負線外に提出せしめて前方に屈するを支へ同時に鐵臍を設けて浮游せる蹄踵部の踏地することに努むべきものである。

左に示したる圖は著者が各地巡回中體形肢勢の最も不良なる珍敷馬ある毎に撮影し置きしが今回是れを彫刻せしめ體形肢勢判断及び削蹄裝鐵法等の解説材料に供したるものなり、讀者之を諒せよ。

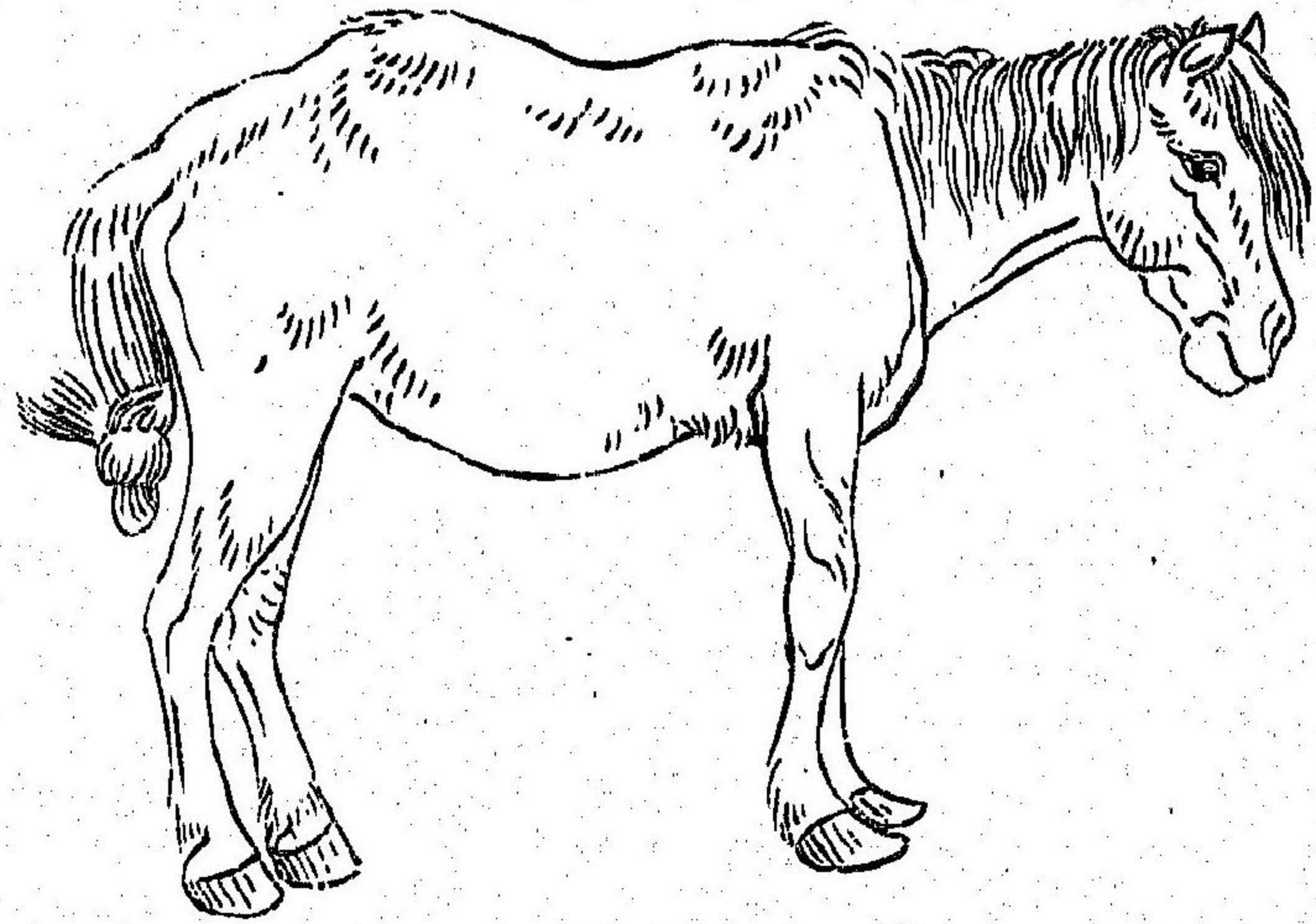
第七十五圖 鯉背内國種青色牡馬、四尺六寸拾七歲、駄用

體形及肢勢判断。此の馬の體形は甚しき凸背にして恰も駱背狀をなせり、頸水平に肩は短く直立して低く前方に偏在し肘の離れ不良にして肢位外向をなし膝は前に曲り繋に力なく蹄亦斜向せる低蹄(尖蹄)を伴へり尻は短く傾斜して兩腰角の幅は相當に廣げれども臀尖に至りて狹窄せり后肢の肢勢は一般に后退し飛節は互に倚りて外弧肢勢をなし後繋は前繋より稍々力あり。

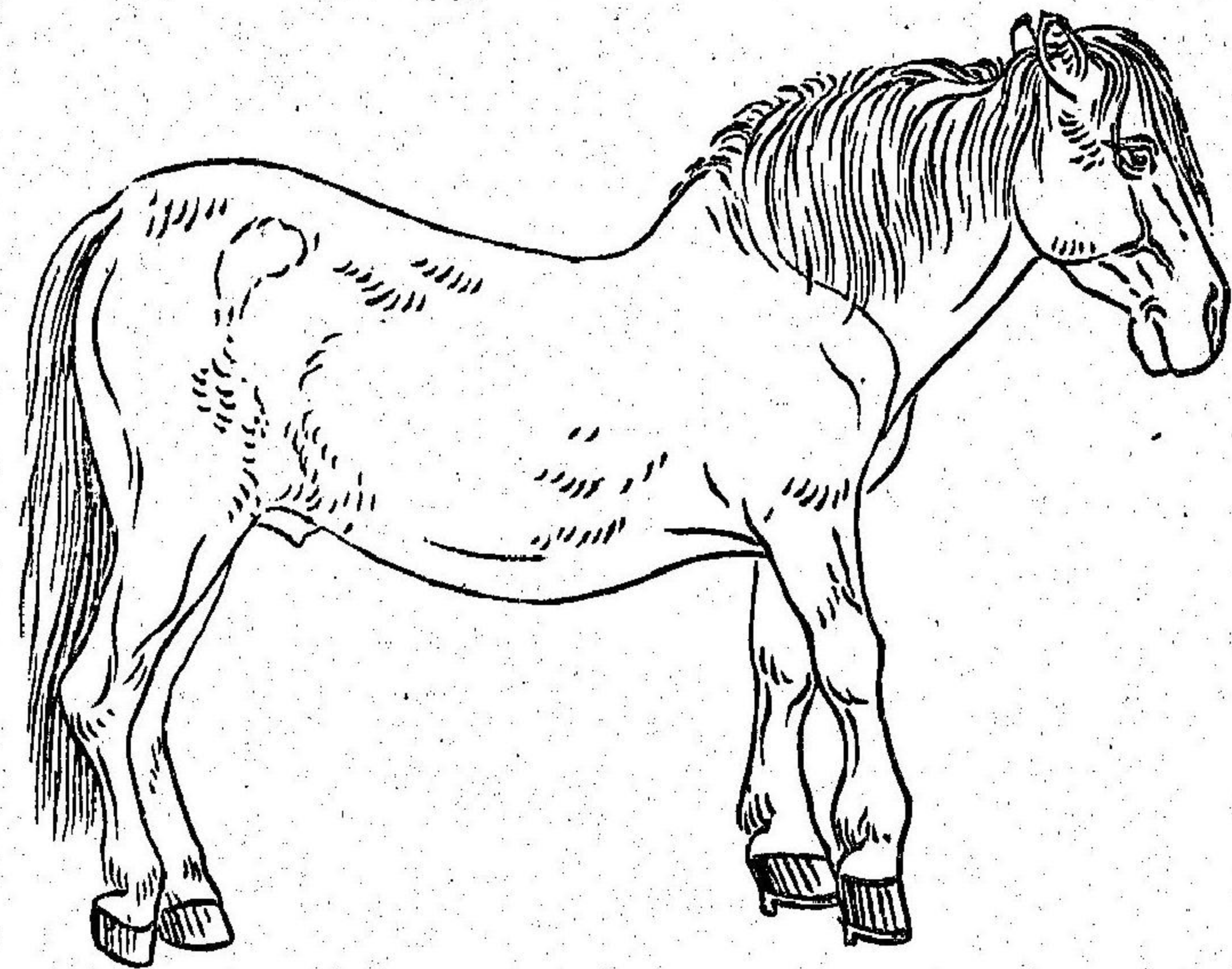
削蹄法。前肢は外向にして繋緩く低蹄を伴ふにより長さ前壁及び外蹄尖部を短削し上彎を設けて返りをよくするは普通の削蹄法なれども日常使役せるものに向つては決して過度に削除すべからず成るべく徐々に前壁部を短く鋸去し尙ほ負縁よりも同部を幾分低く削るべし、そうして壁面より鋸去すること七なれば負面より三分位の割合にて削るべし。

第七十六圖 凹背雜種、枳栗毛、牡馬、四尺九寸、拾五歲、鞍用

圖五十七第 (背 鯉)



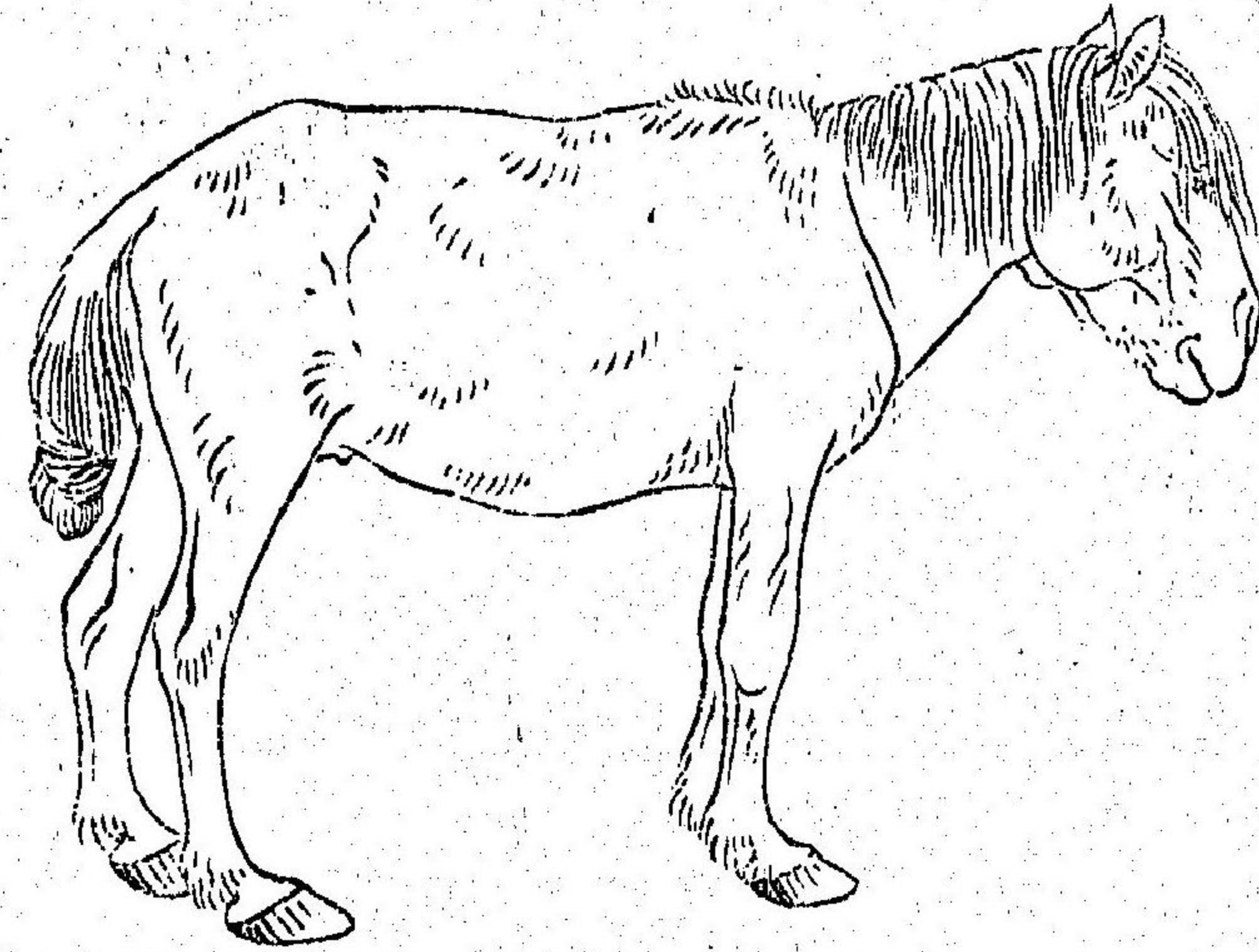
圖六十七第 (背 凹)



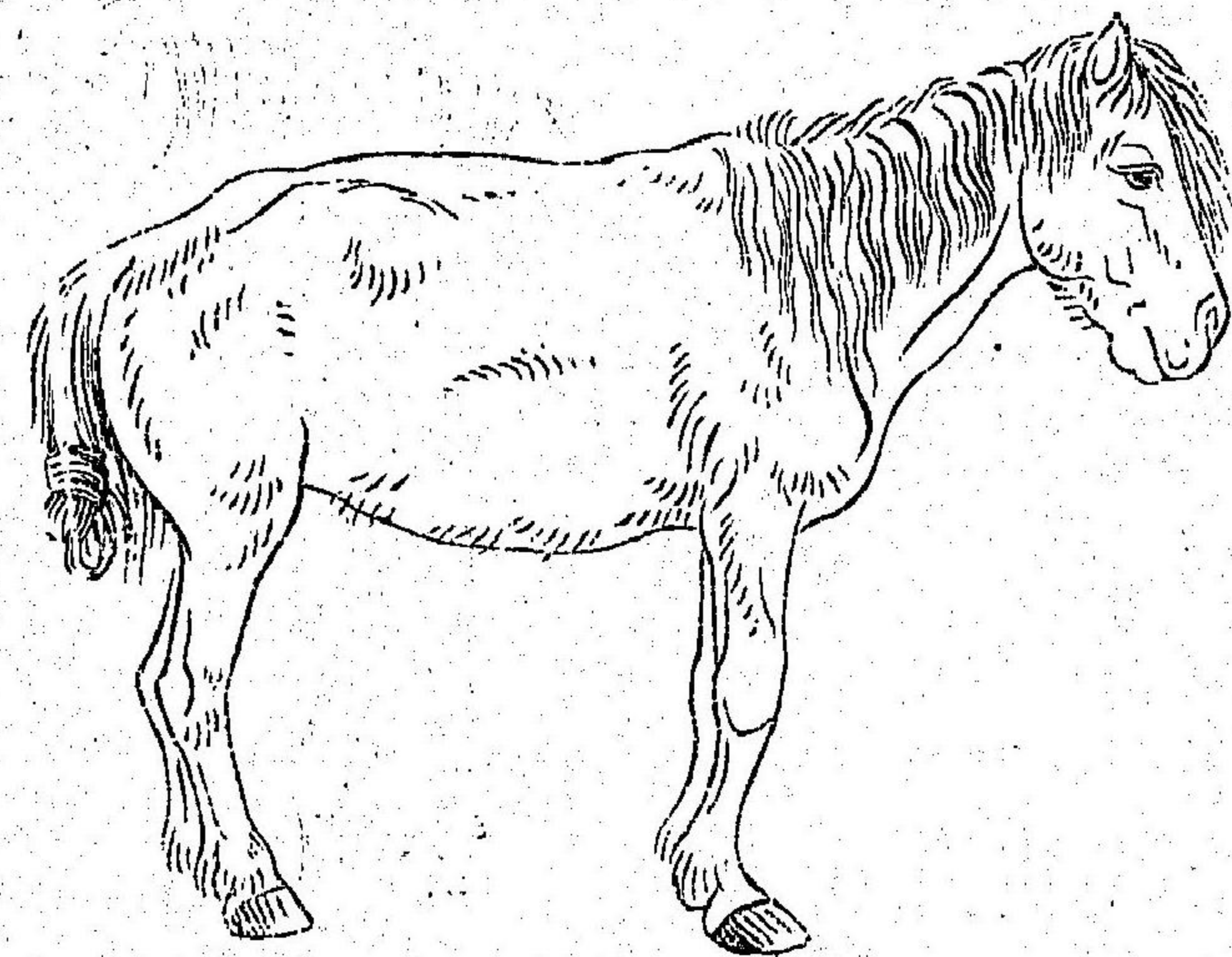
體形及肢勢判断。頸は短く肩は前方に偏在し鬐甲は短く背は長くして上圖の如く甚しき凹背をなし膝は甚だしく前方に彎曲し蹄は慢性腫炎の結果肥厚短縮し

冠部の外側に太き骨癒あり、爲めに球節は負重に堪へずして突球をなせり。
削蹄及裝鐵法。前肢は腿の短縮及趾骨癒の爲め突球をなせるが故に削蹄及裝鐵

圖七十七第
(繫 臥)



圖八十七第
(繫 臥 膝 彎)



の目的は腿關節の疲勞を柔らげんが爲め蹄踵部を助けねばならぬ現に此の馬に
装せる蹄鐵は其の目的を達せん爲め鐵臍を設けて蹄踵部を高からしめたるもの
なり。

第七十七圖 臥繫内國種青毛牡馬、四尺三寸、五歲駄用

體形及肢勢判斷。肩は短く前方に偏より頸は水平に附着して胸狭く偏肋を伴ひ
肘節低く胸壁に狭まりて肢位外方に向ひ繫は緩くして低蹄を伴へり背は長けれ
ども力を具へ腰薦の接合部少く凹み尻は短くして著しく兩側に傾斜し飛節の折
目深くして四繫とも過度の臥繫をなし后肢の距毛は殆んど地に達する位である、
尙ほ后肢は内弧肢勢を伴ふにより蹄の外側壁は峻立し内側は斜めに延びて外蹄
側を先着捻轉して歩む。

削蹄及裝鐵法。前後肢とも臥繫に低蹄を伴ふにより概して前壁を削りて蹄を起
て尙ほ前蹄は外向蹄を伴ふにより外蹄尖部を削るべく後蹄は跣足のため外側壁
は過減せるが故に其の内方に傾斜せる内側壁より前壁にかけて削り尙ほ壁面よ
りも短かく鋸去すべし、裝鐵法は第六十一圖を参照すべし。

第七十八圖 彎膝及臥繫内國種青毛牡馬、四尺四寸、十八歲駄用

體形及肢勢判斷。肩は短直にして前方に偏より肩端外方に向ひて胸前に突出し胸は狭く肘頭胸側に接して肢位外向し膝は前に曲り繋は緩くして外方に斜向せる低蹄を伴へり背は長けれども稍々力を具へ腰薦の連接部に至りて僅かに凹み尻は短く斜めに臀尖に向つて狭穿し飛節は互に接近して外弧肢勢をなし后繋は前肢のものより力あり。

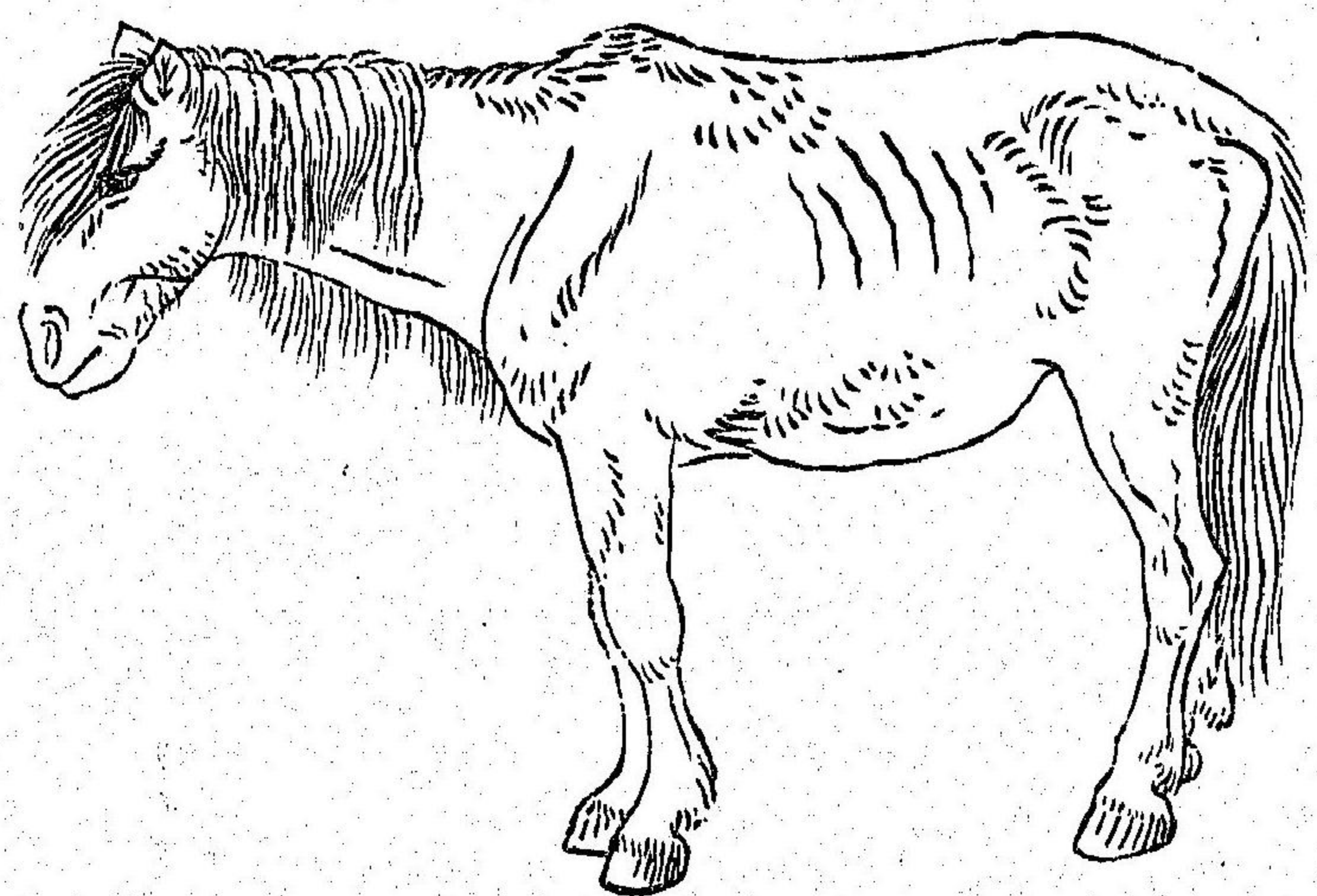
削蹄法。前蹄は低蹄なるにより前壁部を壁面及負面より短削して繋に力を付け尙ほ外向の内狭外廣蹄を伴ふが故に外蹄尖及外蹄壁の廣き部を壁面より少しく鋏去し前壁殊に外蹄尖部に上彎を設けて返りをよくすべし。

第七十九圖 彎膝内國種鹿毛牡馬四尺七寸十八歲駄用

體形及肢勢判斷。畜主の語に依れば此の馬は數年前に最も廉價に買入たる者にして當時彎膝の度は現在以上甚しく之を使役に供し得るや否や大に危ふみし位なるが力量は外形に似ず然も年既に老いて數十貫の重量を駄載し日々勞役に服してをるさうして彎膝の度は漸次減じたと云ふことである。

鬚甲及背部は此の馬に對して比較的力を備へ腰薦接合部稍々不良にして前肢は彎膝軟繫なれども肩附き肘の離れ割合に良く尻短けれども相當の幅を具へ后繋

圖九十七第 (膝彎)

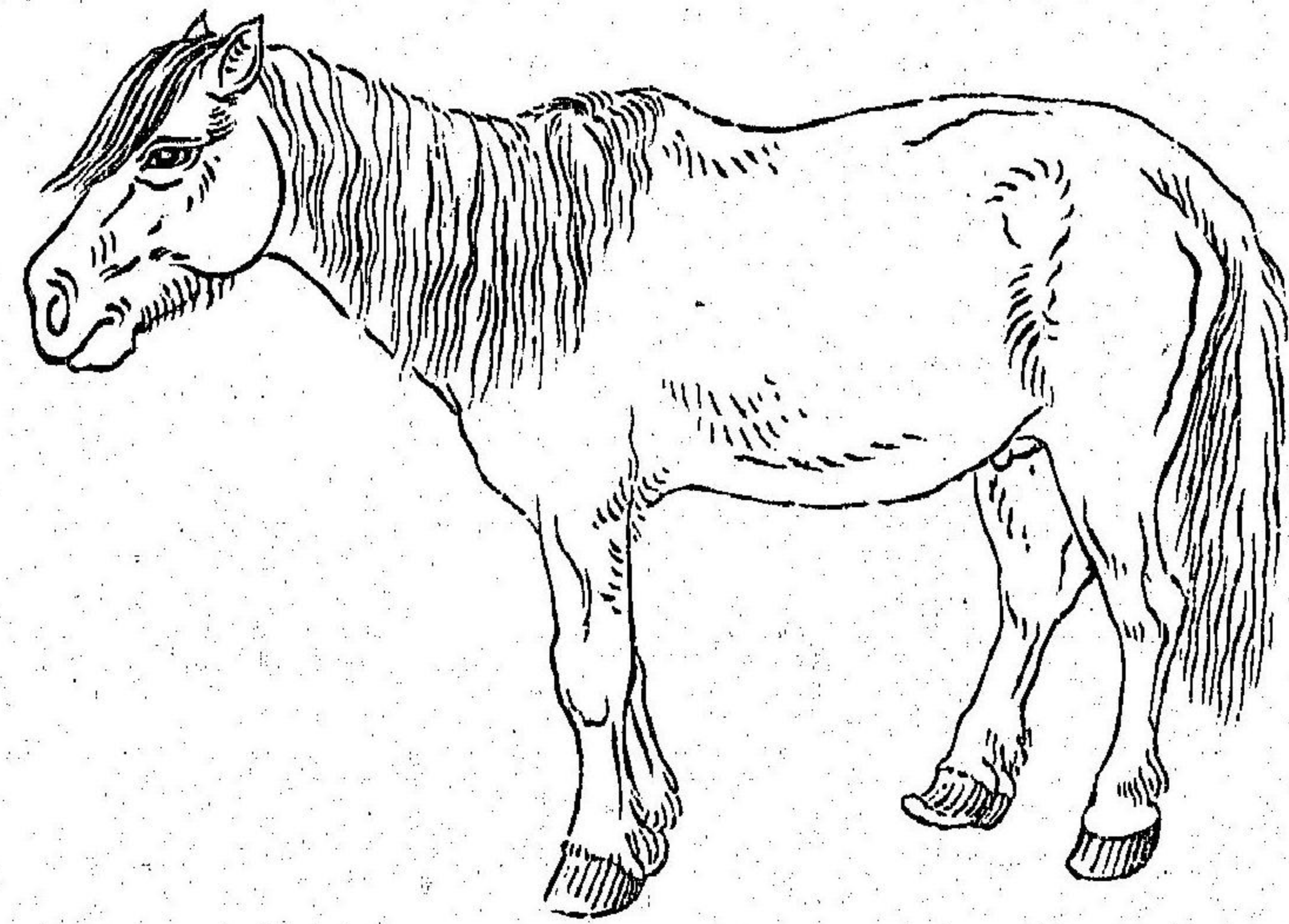


稍々良なり。

凡そ馬を相する目的は成るべく良點を具ふるものを選択するは勿論なれども完全なる馬の少き限りは其の馬の體格に於て望む良點のみを取らて之れを利用するに外ならざるべし、果して用途に適せる良點の幾部が具備してをれば他に假令不良點あるも其の目的に達はねば之れを許すも可ならん、此の圖に掲げたるは敢て良馬と云ふにあらざるも價格甚だ廉にして用役に堪ゆる處を見れば肩と鬚甲と背と悍威とは其の用を辨するに足るならんか。

第八十圖 前肢起繫後肢彎蹄内

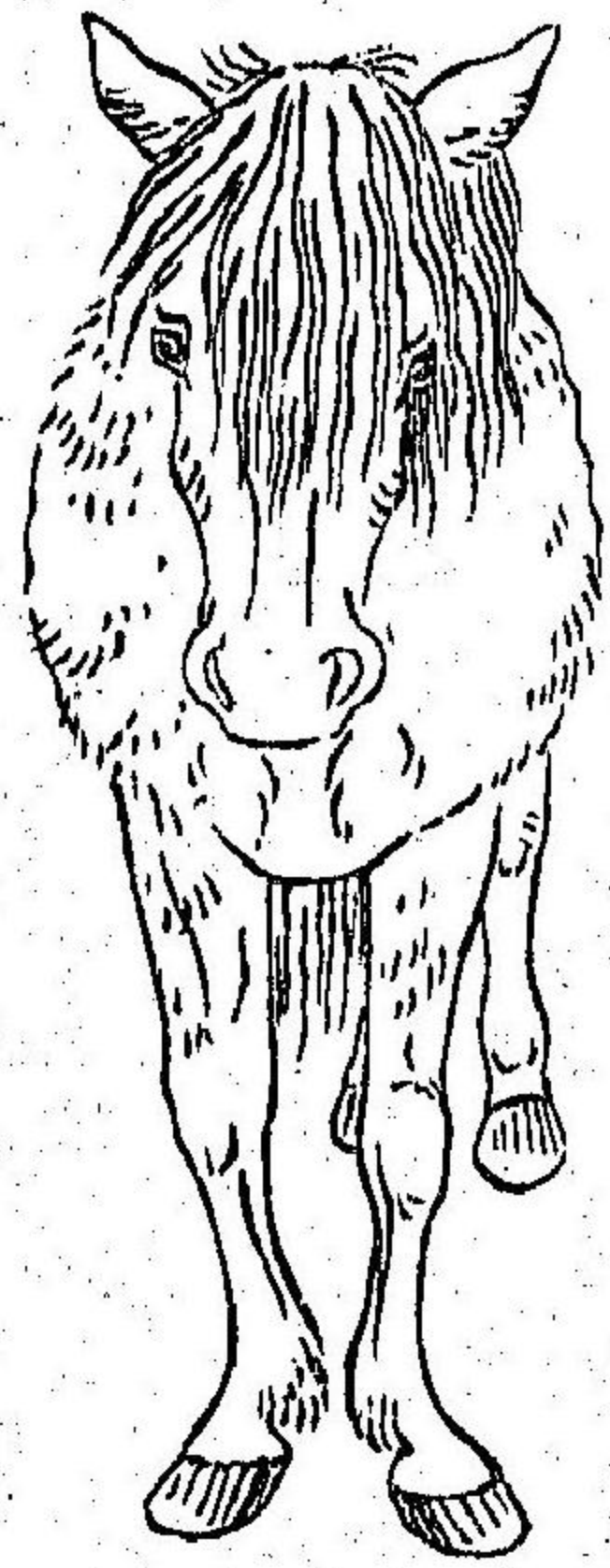
圖 十 八 第
(蹄彎肢后、繫起肢前)



國種青毛牡馬、四尺三寸十二歲、
駄用

體形及肢勢判斷。此の馬を掲げたるは前肢の起繫と后肢の甚しき彎蹄なるにあり、即ち前肢は外向に起繫を伴ひ肋は圓く背は凸背にして力を具へ尻は短く斜めにして外弧肢勢をなし兩后蹄とも甚しく内彎して恰も牛角狀をなせり、變形斯の如くならざるに手入れを行へば敢て矯正の望みなきにあらざるも時期既に後れ殆んど手の付け様がない、故に幼壯馬に拘はらず削蹄の忽にすべからざることを覺知すべし、強いて削蹄せば先着せる外蹄側を削りて踏地を平均せしめ尙ほ

圖 一 十 八 第
勢肢向外踏狭、膝彎



延びたる内蹄尖及内蹄側部を短かく鋸去すべし。

第八十一圖 彎膝にして甚しき狭踏外向肢勢を合併せるもの

(内國種青毛牡馬、四尺二寸十五歲、駄用)

體形及肢勢判斷。胸は狭く肘は胸壁に接して窄肘をなし膝は前方に彎りて外向に狭踏を伴ひ繫は緩く外方に斜向し運歩の際繫部の轉向著しく爲めに屢々對側肢に交突することあり。

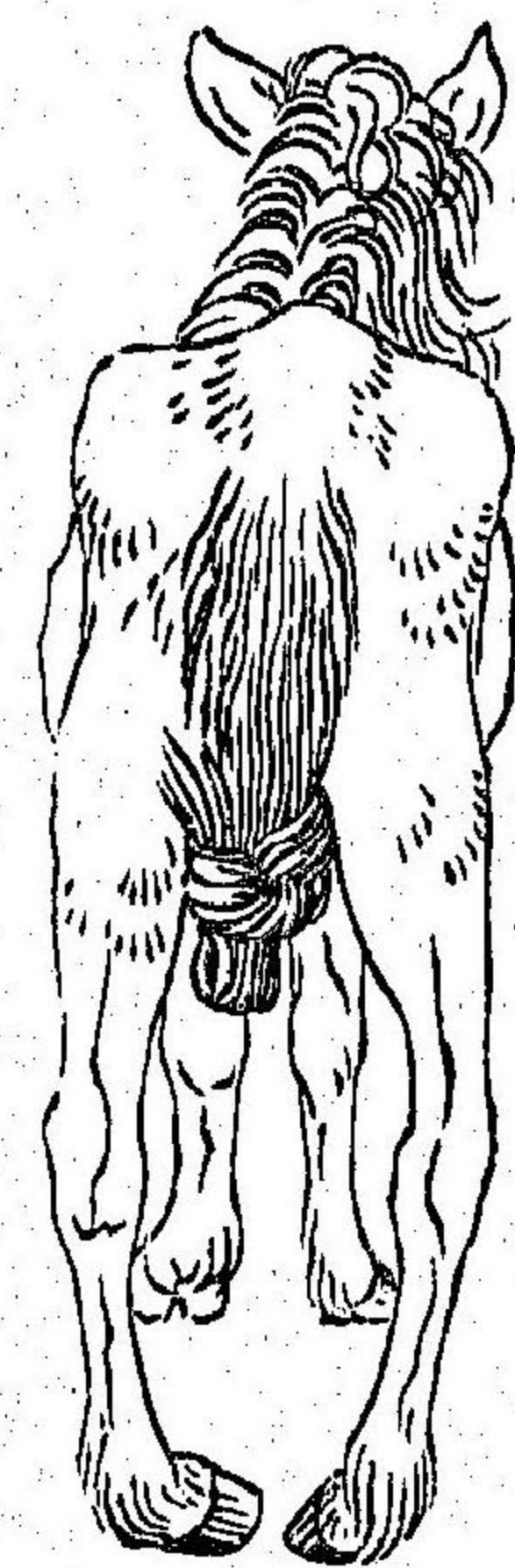
削蹄及裝鐵法。削蹄の目的は

繫に力を加へんが爲め前壁殊に外蹄尖部を削りて蹄を起て該部に上彎を設けて返りを善くし鐵を裝する場合にも上彎を設け鐵唇は稍々深く焼き込み交突を防ぐには内鐵枝の外出せざる様にして尙ほ鐵の外縁を圓く下狭に鋸去し鐵尾を内に入るべし。

體形及肢勢判斷。尻幅廣けれども臀股筋の發育不良にして力なく飛節は低く外

第八十二圖 后肢内弧肢勢(内國種鹿毛牡馬、四尺三寸六歲、駄用)

圖二十八第
(勢肢孤內肢後)



方に開きて内弧肢勢をなし繋
は弱く前方に傾斜し殆んど距
毛地に達し踏地毎に飛節繋部
を捻轉して歩む蹄形は低蹄に
外狹内廣蹄を伴ふてをる。

削蹄及裝鐵法。第六十一圖の削蹄裝鐵法を参照すべし。

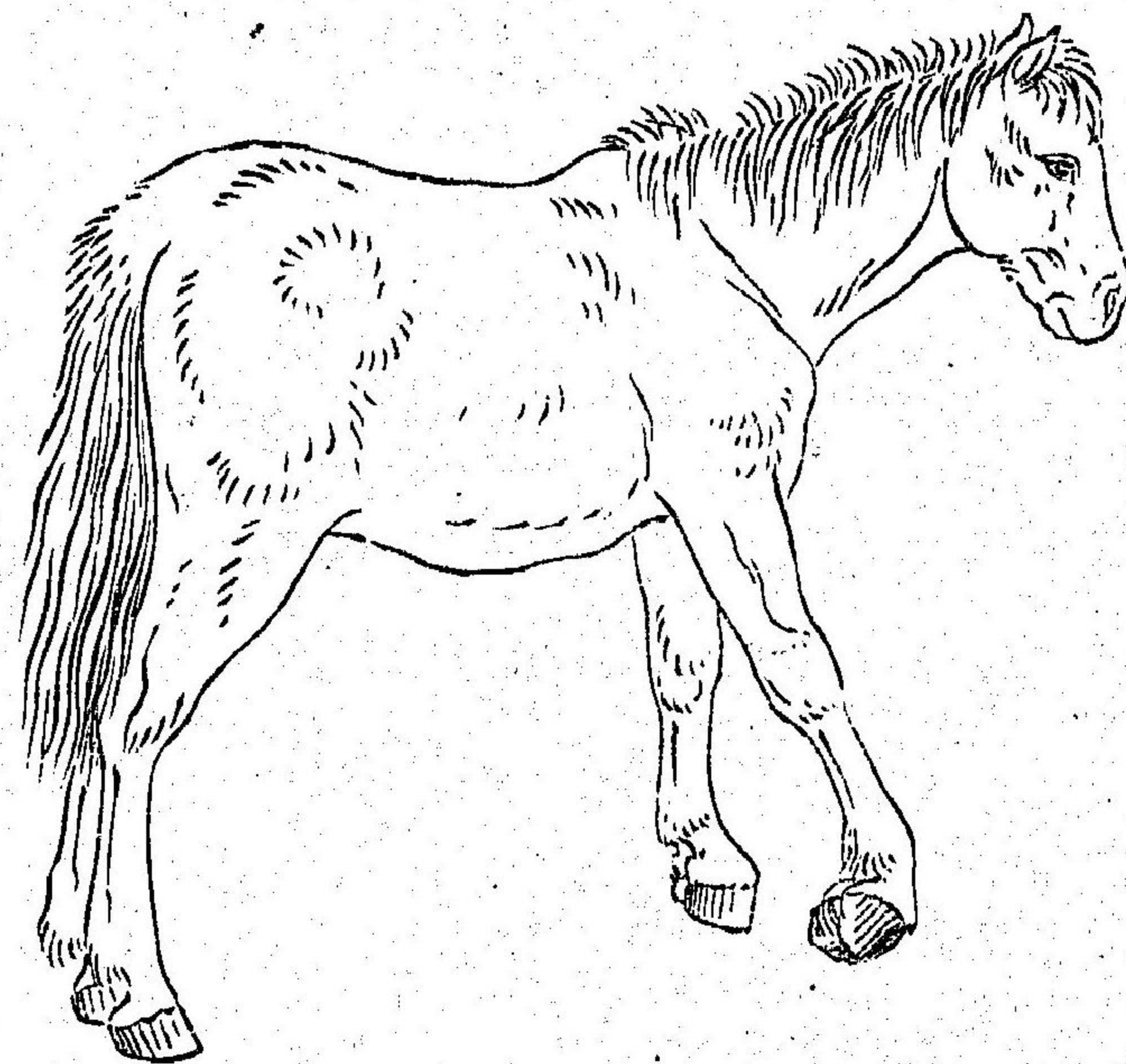
第八十三圖 前肢の熊足内國種青毛牡馬四尺三寸二歳

體形及肢勢。此の馬は上圖の如く兩前肢とも甚しき突球にして右蹄殊に著しく
加ふるに高度の山羊蹄を伴ひ殆んど蹄負縁を以て支へ得ず前壁面を以て地を踏
むでをる。

原因。不明なれども此の肢勢は通常父母より繼承すること多く或は亦發育期の
馬を舍飼せし結果に依り發することもある、殊に軟繋の馬を放牧せず繋厩せし
ものに屢々見る處なり。

削蹄及裝鐵法。斯の如きものに向ひて矯正を試みるは寧ろ不可能に屬すれども
強ひて之れを行へば前壁を削りて浮游せる蹄踵に負重せしむることに努め尙ほ

圖三十八第
(足熊肢前)



少しく内蹄側を削りて内
踏みにすべし、一般の削蹄
裝鐵法は第七十四圖を應
用すべし。

第五章 産牛馬に關す 計
第一節 馬匹の部
一、馬種別頭數

年次	内種	雜種	外種	計	農家百戸 ニ對シ	前年ニ比シ増減				
						内種	雜種	外種		
明治卅一年	五、五五、六二七	三、五三三	八、九一、五八八	八、九一、五八八	△	五、四九、九二八	八、九三	一、七七	△	四、七、八三
同卅二年	五、〇四、四九四	四、八七六	七、六二、五四七	七、六二、五四七	△	五、一、三三三	一、〇三、二五〇	一、七〇	△	四、〇、九三五
同卅三年	四、八四、八二四	五、〇四六	七、〇七、五九一	七、〇七、五九一	△	四、九、六七〇	一、四一、七〇〇	三、六〇	△	五、一、四
同卅四年	四、四、四二六	七、〇、一九八	一、五、五九一	一、五、五九一	△	三、三、四〇八	一、四一、五〇〇	四、五三	△	八、八〇、六
同卅五年	四、四、五、五六六	七、六、八〇五	一、七、七、一、五、五、一、〇、八	一、七、七、一、五、五、一、〇、八	△	二、六、八、五〇〇	八、六〇七	一、七、八	△	一、八〇、六、五
同卅六年	四、二、四、二、七、四〇	八、七、九、九、六	一、六、二、七、五、一、五、三、七、四、五	一、六、二、七、五、一、五、三、七、四、五	△	一、四、二、九二	八、四九一	一、四、四、八	△	八、六、七
同卅七年	二、八、四、八、四、〇	一、〇、三、一、三、〇	二、〇、四、七、一、三、九、〇、七	二、〇、四、七、一、三、九、〇、七	△	一、三、五、四、四、四	一、五、八、三、四	一、四、一、三、八	△	三、三、七、八
同卅八年	二、三、五、八、八、八	二、九、〇、三、九	二、七、八、一、三、七、六、二、五	二、七、八、一、三、七、六、二、五	△	四、八、九、七二	二、五、八、九、九	六、七二	△	三、四、〇、二
同卅九年	二、六、八、八、八、六	二、七、三、八、三	二、一、八、八、一、四、五、四、六、六	二、一、八、八、一、四、五、四、六、六	△	五、一、〇、三、八	三、八、三、五、三	八、四、七、〇	△	九、七、八、五、一
同卅四年	二、九、〇、〇、七、二	一、九、三、一、三、一	二、〇、四、九、一、四、九、九、二、五、二	二、〇、四、九、一、四、九、九、二、五、二	△	三、一、七、五	二、五、七、四、九	八、六二	△	二、九、七、六、六

備考
農家百戸に對する頭數算出上の農戸數は農會農事調査表に依る但し神繩縣は農會の設立なきを以て帝國統計年鑑に依り三十二年十二月末現住戸數より一割を減じたる數を以て之れに當てたり

二、種牡馬累年比較

年次	内種	雜種	外種	計
明治卅一年	四、三、九、七	一、三、一、七	八〇	五、七、九、四
同卅二年	四、二、〇、〇	一、六、一、〇	一〇四	五、九、一、四
同卅三年	三、六、一、六	一、七、六、八	一四一	五、五、二、五
同卅四年	三、一、八、五	二、二、五、一	一七一	五、六、〇、七
同卅五年	二、七、九、〇	二、六、四、九	一九八	五、六、三、七
同卅六年	二、一、五、九	二、一、四、三	二五五	五、五、五、七
同卅七年	一、三、八、二	三、二、五、七	三二四	四、九、六、三
同卅八年	九、七、四	三、三、五、六	四七七	四、八、〇、七
同卅九年	五、五、九	三、三、六、九	五八九	四、五、一、七
同卅四年	三、八、〇	三、六、六、四	七八三	四、八、二、七

三、馬の出産と斃死累年比較

年次	出		産		斃		比
	頭數	此馬千頭ニ付出產	種牡馬一頭ニ付出產	種牡馬一頭ニ付出產	頭數	馬千頭ニ付斃死	
三十一年	一〇一、四五六	一一六	一八	二五、五八四	一六		

明治三十年以降累年種付成績の比較左の如し

年次	種馬所數	種牡馬數	種付出願牝馬	種付牝馬
三〇	三	四四	九八〇	四五二
三一	四	五六	一、九七二	九二七
三二	四	九三	四、一八二	二、〇五〇

種馬所	種牡馬數	種付出願牝馬	種付牝馬
秋田種馬所	三六	三、六二六	一、三六六
福島種馬所	一九	三、三一九	一、〇五〇
宮崎種馬所	四	三、三二八	一、四一九
島根種馬所	七	三、八五六	一、二一九
愛知種馬所	五	二、三九四	一、二六〇
石川種馬所	六	二、〇九〇	一、〇六九
長野種馬所	五	二、〇九五	一、四四〇
鹿兒島種馬所	三	三、〇六三	九八六
計	一六	三、七三九	一、四九六

備考

本表の外種馬牧場種牡馬の場内蕃殖牝馬種付餘勢を以て民有牝馬に種付したるもの奥羽種馬牧場に五百八十八頭、日高種馬牧場に百十五頭計七百三頭あり

明治四十一年各種馬所に於ける種付頭數左の如し

種馬所	種付地區	所種數付	月種付始日終日	出願牝馬合格牝馬種付牝馬
鹿手種馬所	巖岩手縣	二九	自四月二十五日	二、三六八
熊本種馬所	熊本、長崎、福岡、大分縣	二六	自七月十一日	二、四九〇
宮城種馬所	宮城、山形縣	二六	自七月九日	一、六五三
平均	一〇一、四六九	一一〇	一九	二四、五八七
三十二年	一〇三、九三四	一一	一八	二六、一一六
三十三年	一〇四、五八二	二二	一九	二六、一八三
三十四年	一〇一、三一五	一五	一八	二三、九四三
三十五年	一〇〇、八九六	二七	一八	二七、八八九
三十六年	一〇二、九三七	二二	一九	二三、六〇五
三十七年	九六、八〇五	一八	二〇	二四、八七八
三十八年	九六、三四四	二八	二〇	二三、五九三
三十九年	九九、三四九	二〇	二二	二一、九七八
四十年	一〇七、〇七二	二七	二二	二二、一〇二
平均	一〇一、四六九	一一〇	一九	二四、五八七

四、種馬所及種付成績

山	青	巖	福	宮	長	岐	滋	山	靜	愛	柄	茨	千	群	埼	新	長	兵
形	森	手	島	城	野	阜	賀	梨	岡	知	木	城	葉	馬	玉	湯	崎	庫
一七	一八	二七	一九	一九	一一	一四	〇五	七五	四七	三九	二九	一一	一九	三三				
三三	三八	七〇	四九	三二	一七	七七	一八	三七	四〇	二五	八〇	二九	一二	二七	一一	七九	三六	二〇
一	九	一五	八六	五	四	一	五	一	三	二	一	一	一	一	一	八	一	一
二五	二四	四五	四一	二五	九一	六〇	一〇	二二	三三	六八	三七	一七	八二	七	五〇	六九	一五	一五
二	六	八	七	二	一	二	一	四	四	四	〇	七	九	二	三	四	一	一
二七	三二	五五	四三	二八	一六	六六	一六	二六	三七	一〇	五八	二五	九二	九	六一	七四	一七	一七
四	五	〇	五	二	一	一	一	二	三	二	二	四	三	五	三	八	六	三

道府縣名	検査所數	検査頭數	合格		計	不合格
			内國種	雜種		
北海道	四三	八六一	一	四六〇	一六一	六三三
神奈川県	一	六		五	一	六

五、種牡馬検査成績
 昨四十一年に於ける種牡馬検査は北海道廳外三十九縣に於て施行せり、検査頭數は六千六十八頭にして合格したるもの四千六百七十二頭合格せざるもの千三百九十六頭なり、其詳細左の如し

四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三
一一	一〇	九	九	九	九	八	七	六
三七〇	三一八	二六九	二一〇	一八四	一六二	一五三	一二三	一一五
三七、三三九	三四、一五八	三〇、六八五	二二、五一二	一七、三六八	一三、六四六	一〇、五六九	九、二二〇	七、四八三
一四、九八九	一二、四八四	一一、一九九	八、二〇四	六、〇四八	四、七九九	四、二〇六	三、一四四	二、七五一

道府縣名	頭數	金額	頭數	金額	頭數計	金額
北海道	二二	二、二〇〇	二四	一、九二〇	四六	四、一二〇
神奈川県	一一	一〇八〇	一一	一〇八〇	二二	二、一六〇
兵衛庫	三二	二四〇〇	四	四〇〇	三六	二、八〇〇
長崎	一一	八〇〇	一	一〇〇	一二	九〇〇
新潟	一一	八〇〇	一	一〇〇	一二	九〇〇
群馬	一一	八〇〇	一	一〇〇	一二	九〇〇
千葉	一一	八〇〇	一	一〇〇	一二	九〇〇
茨城	四	四〇〇	一	一〇〇	五	五〇〇
栃木	五	四〇〇	一	一〇〇	六	五〇〇
愛知県	二五	二〇〇〇	三	三〇〇	二八	二、三〇〇

産馬獎勵規程により四十一年度に於て民有馬匹に對し獎勵金を下付したる地方及頭數金額左の如し

六、優等馬匹

計	四一六	六、〇六八	二八四	三、七五〇	六三六	四、六七〇	一、三九八
---	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------

道府縣名	頭數	金額	頭數	金額	頭數計	金額
秋田	二六	六五〇	一七	四五七	四三	一一〇七
福井	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
石川	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
富山	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
鳥取	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
島根	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
岡山	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
廣島	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
山口	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
徳島	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
愛媛	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
高知	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
福岡	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
大分	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
佐賀	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
熊本	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
鹿兒島	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五
沖縄	一〇	三六九	一六	一八六	二六	五五五

八、輸入馬國別表

國名	數量		價額	
	數量	價額	數量	價額
同	四十年	四三三	四六〇	三九九、七三九
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
明治	三十七年	一五九	一七二	一三三、八五二
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同

七、輸入馬累年比較

計	鹿兒島	宮崎	熊本	大分	福岡
一七五	一六	二	九	二	一
一六、三八〇	一、六〇〇	一、二〇〇	七二〇	一六〇	八〇
二二二	二〇	一四	二	三	一
一五、七八〇	一、六〇〇	一、二二〇	七二〇	一四〇	四〇
三九七	三六	二六	二	五	二
三三、一六〇	三、二〇〇	二、三二〇	一、四四〇	二八〇	一一〇

高知	徳島	廣島	岡山	鳥取	島根	富山	石川	福井	秋田	山形	青森	巖手	福島	宮城	長野	岐阜	山梨	静岡	
三	一	一	一	一	一	二	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
二四〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	一六〇	一〇〇	八〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一六〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	一四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	四〇
四	一	三	二	二	三	三	六	二	二	八	五	五	四	三	四	二	一	二	二
二八〇	八〇	一六〇	八〇	八〇	一六〇	一四〇	四〇	八〇	二四〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	一六〇

年次	内種	雑種	外種	計
明治三十一年	一、六六九	四三一	五二五	二、六二五
同 三十二年	一、六八四	五三三	五七五	二、七九二
同 三十三年	一、六八〇	六九二	五一四	二、八八六
同 三十四年	一、八〇五	八一五	四八九	三、一〇五
同 三十五年	一、八〇四	八一五	五六一	三、一八〇
同 三十六年	一、八〇九	九一四	五七八	三、三〇一
同 三十七年	一、四六九	一、一七四	五二〇	三、一六二
同 三十八年	一、五四四	一、三四五	五七五	三、四六四

備考 馬種別表に同じ

二、種牡牛累年比較

同 卅五年	一、一二九、七八七	一二四、七〇六	二〇、八八八	一、二七五、三八一
同 卅六年	一、〇七六、三七七	一八九、五二〇	二〇、二一九	一、二八六、一一六
同 卅七年	九七二、三三〇	二〇七、二三七	二〇、五六八	一、二〇〇、一三五
同 卅八年	九〇六、四四一	二四一、四四三	一九、七二六	一、一六七、六一〇
同 卅九年	九〇〇、三二五	二六九、九七二	二〇、〇七六	一、一九〇、三七三
同 卅四年	八九一、九七二	三三三、八一八	二一、三七二	一、二三七、一六一

年次	内種	雑種	外種	計
明治卅一年	一、一三五、九六八	七九、一七五	一五、三五一	一、二三〇、四七六
同 卅二年	一、一三九、四六六	九五、九二四	一七、四七五	一、二五二、八六五
同 卅三年	一、二二七、〇一六	一一五、〇二一	一九、一七七	一、二六一、二一四
同 卅四年	一、一四八、二〇二	一一四、三三三	一九、八〇六	一、二八二、三四一

第二節 牛畜の部

一、牛種別頭數

清國	關東	韓國	英吉利	佛蘭西	白耳義	北米衆	濠洲	其他の國
四八	一	二二	四三	七四	九	二五九	三	
六、九五八	一二五	四二八	二一三、六三八	一三五、八六三	三、五五五	一〇三、六五〇	九五〇	
四五	一二	二〇	二〇	六三	二〇	二五八		
一〇、四五〇	二、〇五〇	二五	九四、二九五	一三六、五三二	九、六七五	九、〇八〇	一一三、二二二	

島鳥富石福山青岩福宮長岐滋山静愛三奈栃
根取山川井形森手島城野阜賀梨岡知重良木

二八 | | | 二 | | | | | | | | 二 | | | 〇六八 |

六四一五八一二二四七三二二一六四二一七二四 | 九

一七二二三五五〇八二六四二二九七八二八 | 三

二二九二八三五七七八一五〇〇一三九四六四二四一五六〇〇二二六三二

茨千群埼新長兵神大京東北
城葉馬玉瀉崎庫川阪都京道
海

道府縣	内國種	外國種	雜種	合計
一 七 二五九 二 五四	四 二三〇 二八二 六一二 二六三 三八二 二四七 四一六	一 八二七 三六八 六三九 五二九 六九三 三七二 一〇五	一 〇五	一 七二七

三、種牡牛検査成績 (四十一年度)

同 三十九年	同 四十年	同 四十一年
一、四九七	一、三三六	一、三七八
一、七二二	二、四七二	三、二一五
七四三	八八二	一、二七九
三、九五二	四、六九〇	五、八七二

國年別次	三十四年		三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年		四十年		平均
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
年次	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	平均				
頭數	一三一、九三四	一四五、四〇〇	一四四、四四三	一五一、四五三	一五一、八二〇	一五五、七八九	一四七、〇四九	一四五、二五九	一五一、四〇〇	一七四、七八五	一四九、九三三				
牛千頭三付	一〇七	一一六	一一五	一二八	一二九	一二一	一二三	一二四	一二七	一四一	一二二				
牛千頭三付	一七八	一八九	一八六	一九一	一九一	一九四	一九三	一九五	一九八	二一六	一九三				
種牛一頭	五〇	五二	五〇	四九	四八	四七	四六	四二	三八	三七	四六				
頭數	一八、〇一一	一九、一七一	一七、五八八	一七、五九二	一七、五四九	一六、三四九	一五、八六七	一四、〇九八	一一、四九〇	一二、五九〇	一六、〇七一				
牛千頭三付	一五	一四	一四	一四	一四	一三	一三	一二	一一	一〇	一三				

五、輸入牛國別表

四、牛の出産と斃死累年比較

備考 四十年に比較するに内國種は四十二頭外國種は三百九十七頭雜種は七百四十三頭計千八百八十二頭を増せり

計	沖島	鹿島	宮崎	熊本	佐賀	大分	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	和歌山	山口	廣島	岡山
計	一、三七八	一、二七九	三、二一五	五、八七二											
出	五六	一五八	二〇一	二二九	三三五	六〇八	二六二	二六一	三三三	六九一	一六一	二〇九			
産	一〇七	一九八	二〇九	二二九	三三七	七三〇	二四一	二四一	三三四	七五〇	一〇〇	七五			
死	一〇一	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二

地方	牛		馬	
	明	治	四	十
北海道	三二一	四九七	六二、一四三	六二、四七四
東北	二六、六六三	二四、五九五	一、四六五	一、九六二
大坂	二四、五九五	一、〇六〇	三、一五	二六、九七八
京都	一、〇六〇	七、八〇九〇	五、三三八	二五、一二九
神奈川	七、八〇九〇		八、八三七	六、三七八
兵庫				八六、九二七
計				

六 府縣別耕作用牛馬頭數

合計	英吉利		獨逸		瑞西		白耳		和蘭		關東州	
	頭	價額	頭	價額	頭	價額	頭	價額	頭	價額	頭	價額
六〇〇天												
一四、三三〇		二〇〇七										
一八、六九二												
四、七六五		八九五										
二〇、七九三												
七、五四七		九三三										
		二九六六										
		二、二九										
		二九〇三										
		三、五九										
		六、二七										
		一、五〇										
		七、五四七										
		肉用										
		同上										
		同上										
		同上										

國別	三十九年		四十年		四十一年		備考
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
韓國	二七六	四、〇二〇	一七六	三、〇九〇	五、〇三〇	九、六七三	農耕用
北米合衆國	二四	三、三〇〇	二六	三、二六九	五	二、五五八	蕃殖用
濠洲						三、八〇六	同上
英領加奈陀						三、三六一七	同上
英吉利	四	三、六五一〇	二	八五〇	二	三、三六一七	肉用
清國			二四				蕃殖用
獨逸							同上
瑞西							同上
白耳							同上
和蘭							同上
關東州							肉用
計	三四八	四、三三〇	一八三	四、五四六	五四九	一、三三二、五五三	
韓國	二七六	四、〇二〇	一七六	三、〇九〇	五、〇三〇	九、六七三	農耕用
北米合衆國	二四	三、三〇〇	二六	三、二六九	五	二、五五八	蕃殖用
濠洲						三、八〇六	同上
英領加奈陀						三、三六一七	同上
英吉利	四	三、六五一〇	二	八五〇	二	三、三六一七	肉用
清國			二四				蕃殖用
獨逸							同上
瑞西							同上
白耳							同上
和蘭							同上
關東州							肉用
計	三四八	四、三三〇	一八三	四、五四六	五四九	一、三三二、五五三	

熊佐大福高愛香徳和山廣岡鳥島富石福秋山
歌

本賀分岡知媛川鳥山口島山根取山川井田形

五、一六二
三、五〇四
三、六八七
三、〇〇八
四九
三六、八八六
四七、二七六
七二、五三六
八一、二四〇
五八、六一二
二七、四一八
二六、一七六
三二、一四二
三九、〇一三
一五、二三七
三九、六九八
六一、〇三八
一三、三六八
四五、七一三

二六、八〇四
五一、六六三
四、二四二
六、三二七
一一、一四五
一、三二七
一、六九九
五、一四〇
一〇、一三一
一七、三四一
八一九
一三、一四五
一、八五五
八、一一〇
二六、五七〇
四一、〇九九
四七、〇二七
一八、八〇二
九一、九一八

三一、九六六
五五、一六七
七、九二九
九、三三五
一一、一九四
三八、二一三
四八、九七五
七七、六七六
九一、三七一
七五、九五二
二八、二三七
三九、三二一
三三、九九七
四七、一二三
四一、八〇七
八〇、七九七
一〇八、〇六五
三二、一七〇
一三七、六三一

青岩福宮長岐滋山静愛三奈栢茨千群崎新長

森手島城野阜賀梨岡知重良木城葉馬玉瀧崎

五八、六八四
一〇、九二〇
二五二
二〇五
二〇、五七七
二〇〇
三六
八、五〇五
二八、八八一
一、七四七
一三、〇五九
六二八
一四、六四八
四、七六五
一、七八二
七二二
二二〇
五、三七七
七、六二四

二〇、七二二
三五、二一一
二一、三九四
三〇、二一九
三六、七五四
五三、一一四
五二、四三七
二八〇
二、四七六
五、〇七五
一〇、二二五
一六、〇三八
九七二
二一、六三八
四、七四一
四一、二五六
六三、〇一四
六五、〇八三
四五、八五四

七九、四〇六
四六、一三一
二一、六四六
三〇、四二四
五七、三三一
五三、三一四
五二、四七三
九、一八五
三一、三五七
六、八二二
二二、二八四
一六、六六六
一五、六二〇
二六、四〇三
四七、五二三
四一、九六九
六三、二四四
七〇、四六〇
五三、四七八

青	岩	福	宮	長	岐	滋	山	靜	愛	三	奈	枋	茨	千	群	埼	新	長
森	手	島	城	野	阜	賀	梨	岡	知	重	良	木	城	葉	馬	玉	瀨	崎
三〇、九七四	一九、六九七	二四、一六四	一二、七一九	二六、三五八	一、一六一	二、五五二	四、六九九	一〇、二六三	一、六五〇	一、四二二	八、一九〇	八、七九五	一三、〇〇七	六、六二八	二、九〇二	九、五二三	九、二七五	九、二七五
一二七、六三二	一五二、二〇七	二一七、一九〇	二二三、四六九	二九九、六六五	一六八、三五五	一〇二、一三二	二七三、九九九	四九一、三八八	二三〇、一三〇	四七、八九七	一一三、〇四四	一九八、五八〇	一八四、九〇〇	二七二、六四七	一七六、一一二	二九〇、六一六	一八八、七八二	一八八、七八二
三八、五五四	三六、一三四	五一、三五九	一〇〇、八七二	五五、〇〇六	五一、九八四	二五、五五六	一〇八、四二七	七九、七四九	九九、六九七	一四、六六五	六一、四一六	六六、一七四	七八、六三五	七〇、九六二	四三、六八八	一三二、六九七	三六、四〇四	三六、四〇四
二四、二六八	一一、九四一	五、四四八	八、七九六	一、九七九	〇、六九〇	二、五二〇	一、七一五	二、〇八九	〇、七一九	二、九六九	七、二四五	四、四二九	七、〇三五	二、四三一	一、二〇五	三、九五四	四、九一三	四、九一三
八〇、三三九	五四、五一	四七、〇四九	一一、六〇九	四七、九一八	二、二二三	九、九八六	四、三三四	一二、八六九	一、六五五	九、六九七	一三、二九一	一六、五四一	九、三四〇	一、一八七	二、一八七	六、八七七	二五、四二八	二五、四二八

兵	神	大	京	東	北	地
奈	奈	阪	都	京	海	方
川	川	都	都	都	道	方
庫	庫	都	都	都	道	方
二四、二一三	二、五六八	四、八五六	一八、〇七一	四、五九四	二〇、二八八	畜産改良費
二五八、八四三	一〇〇、九〇七	一四〇、三三五	一八〇、一五五	一七六、一一二	二六九、一八七	勸業費總額
一一六、七五〇	四六、六一八	三七、七〇五	四三、六八八	五三、五三八	五五、一九九	普通農業獎勵費
九、三五五	二、五四五	三、四六〇	一〇、〇三二	二、六〇九	七、五三七	勸業費總額ニ對スル百分比
						普通農業獎勵費ニ對スル百分比

第三節 道廳府縣別畜産改良費豫算 (四十二年度)

百分比	計	宮	鹿	八	大
比例		崎	兒	丈	島
		島	島	島	島
四五、五九	一、〇〇八、九二二	二〇、一六〇	六四、七五三	一、七七七	
五四、四一	一、二〇四、〇三一	六四、六五二	一〇八、一〇〇		
	二、二一二、九五三	八四、八一三	一七二、八五三	一、七七七	

熊	佐	大	福	高	愛	香	德	和	山	廣	岡	島	鳥	富	石	福	秋	山
本	賀	分	岡	知	媛	川	島	山	歌	口	島	山	根	取	山	川	井	田
一五、七〇五	一、四五〇	三七、四〇二	〇、二五〇	六、一九七	四、七九二	三、九八三	二、八六三	一、四八三	一〇、八四四	一九、〇八七	二五、三三三	一九、一九五	一〇、三〇六	二、五四一	三六、三七一	六、五九五	一七、九一七	一二、一三四
一六〇、二九六	一二〇、五二五	一八五、二一五	三八六、五五二	一一一、八五六	一三四、〇二四	一〇四、一三三	一二二、四九六	七九、〇八二	一七一、八二八	一七三、六六一	二五一、九二二	一八二、三三二	一〇四、七七二	二一五、九九一	二〇七、一四二	一六八、九六〇	一六六、四一四	一七一、一七一
三六、二九九	五〇、五六一	七一、二三九	一一三、八八三	三九、五六三	四五、二三一	四九、四八四	二二、二八二	二二、〇九三	四九、〇三三	六九、九二一	一二九、六二八	四五、二四九	二六、六五四	二二八、三五九	六二、七八〇	三七、一〇五	六九、二三五	五三、七六〇
九、七九七	一、二〇三	二〇、一九四	〇、〇六五	五、〇八六	三、五七五	三、八二五	二、三三七	一、八七五	六、三一三	一〇、九九一	一〇、〇七九	一〇、五二七	九、八三七	一、一七六	一七、五五八	三、九〇三	一〇、七六七	七、〇八九
四三、二六五	二、八六八	五二、五〇二	〇、二二〇	一五、六六四	一〇、五九五	六、六九六	一二、二九七	六、四二二	二二、一一六	二七、二九八	一九、五二七	四二、四二二	三八、六六六	一、九八〇	五七、九三四	一七、七七四	二五、八七九	二二、五七一

計	宮崎	鹿兒島
五六二、七八二	一三、四四一	四〇、九〇二
八八二、八八二	一三九、五〇七	二二七、五〇九
四四二、八八九	三四、九二五	七六、七二五
四四二、八八九	九、六三五	一八、八〇五
四四二、八八九	三八、四八五	五三、三一〇
四四二、八八九	一九、四六二	

二、種畜場經費豫算 (最近三ヶ年)

地方	明治四十二年 度		明治四十一年 度		明治四十 年度	
	經常部	臨時部	經常部	臨時部	經常部	臨時部
北海道	五、三三八	一六、一〇三	七、五五一	二、五七	三、六一八	五、一八六
京 都	二、三五四	四、八四九	一七、〇三三	八、七六四	三、八一八	八、八〇四
兵 庫	一〇、七〇七	三、三九〇	一四、〇九五	六、〇九六	三、八七六	一、〇四五
千 葉	七、三三〇	一、五五五	八、八七五	七、二二六	七、五四三	一、〇四五
茨 城	五、二七〇	二、九〇〇	五、二七〇	四、九四〇	五、五二六	二、〇五二
岐 阜	一七、〇五八	二、九〇〇	一九、九八六	四、九四〇	五、五二六	一、五〇九
福 島	一七、三五六	五、〇九六	一三、四七七	三、八〇三	六、六七六	一、五〇九
岩 手	一七、五七七	五、九七	一八、一七四	二、〇三四	一、九二六	六、六六八
山 形	九、四八八	九、四八八	二〇、〇五四	六、六〇	一四、五八八	三、二四九
石 川	一九、二二五	八、六〇四	二七、七一九	一、七七一	一四、七〇八	一九、三三八
鳥 取	八、六三三	八、六三三	一八、〇九三	一、七三六	七、〇五〇	三、九二八
計	一六、一〇三	七、五五一	六、一七九	二、五七	三、六一八	五、一八六

計	鹿兒島	大分	岡山	高根
二四〇、五五	二二、五五	二〇、五七	一七、〇九	九、〇六
五、七三	九、二六	五、三五	一、〇三	一、〇三
二九、九六	二、八〇	二、五二	一、七〇	一、〇一
一、四二	九、六〇	七、四九	三、〇五	一、五八
四、六四	九、五六	六、四〇	一、四九	四、五九
二、五七	一、九一	一、三八	三、〇五	一、六三
一、三三	三、四〇	九、四八	一、〇四	八、四二
六、二二	一、〇五	七、五七	一、〇四	一、〇四
一、七五	一、三九	一、七〇	一、〇四	八、四二

實用馬學講義 終

明治四十二年十一月十五日印刷
 明治四十二年十一月三十日發行

(實用馬學講義)

正價金壹圓

著作 池松常記

巖手縣盛岡市油町十一番地

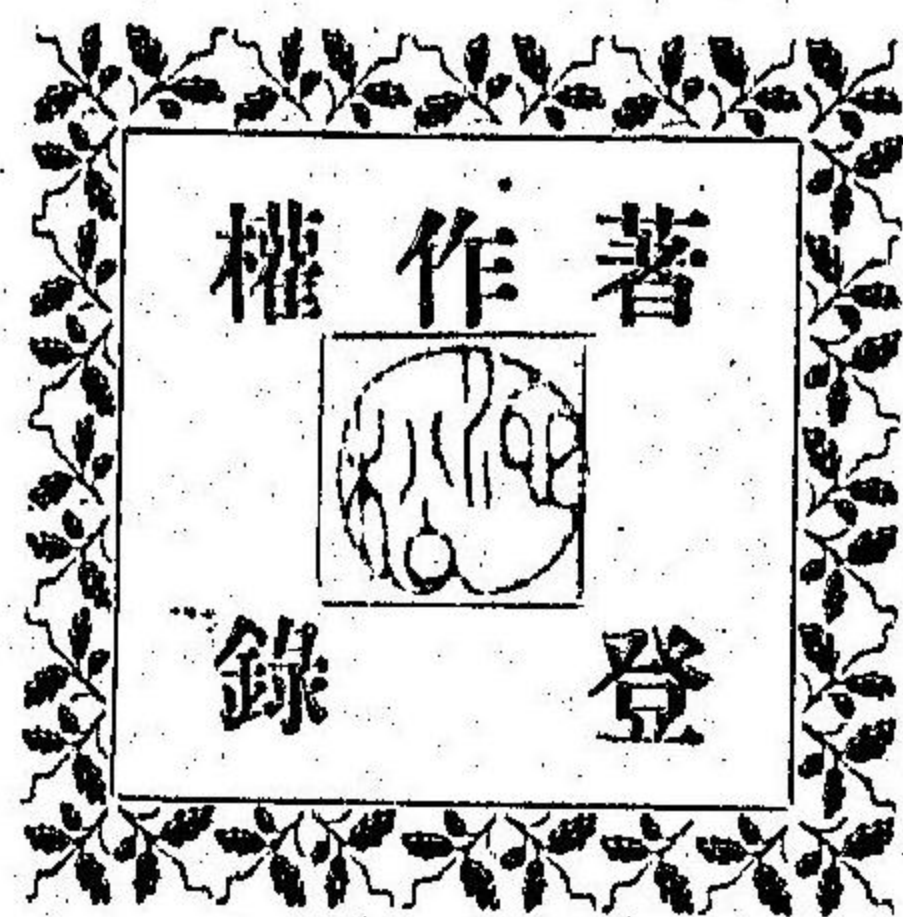
發行 穴山篤太郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目十三番地

電話本局一〇五五番
 振替東京六九六番

印刷 三協印刷株式會社

東京市京橋區弓町二十四番地



發行元 同特販賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
 振替貯金東京六九六番
 大阪市南區心齋橋筋二丁目
 振替貯金大阪四三二番
 盛岡市吳服町
 振替貯金東京五八七二番

有隣堂
 文海堂
 文明堂

弘 通 書 肆

東京市	同	同	京都市	同	大阪市	但馬豐岡	同八鹿	播摩明石	長崎市	長岡市	越後高田	上野富岡	下總千葉	水戸市	和歌山市	大和大淀	名古屋市	同	同
丸善書店	東京堂	東平次郎	村上勘兵衛	利世館書籍部	三島書店	石田松造	同支	福井書店	安中書店	目黒書店	高橋書店	木田書店	多田屋支店	川又銀造	高市伊兵衛	倭本商店	川瀬書店	片野書店	三輪文次郎
静岡市	遠江濱松	甲府市	大津市	近江長濱	岐阜市	長野市	仙臺市	盛岡市	弘前市	青森市	陸奥八戸	同三本木	山形市	秋田市	福井市	金澤市	加賀松任	伯耆倉吉	松江市
吉見書店	谷島屋書店	柳正堂	吉田淺造	文泉堂	郁文堂	西澤喜太郎	佐政書店	佐々木仙助	今泉書店	同支	浦山政吉	兼子殊彦	五十嵐書店	成見書店	品川書店	宇都宮書店	三谷吉郎	徳岡長藏	有田傳助
松江市	岡山市外	同	廣島市	周防山口	同	高松市	松山市	同	高知市	福岡市	同	久留米市	豊後大分	佐賀市	熊本市	日向宮崎	鹿兒島市	札幌區	同
川岡清助	古谷半三郎	田中博英堂	植村靜登	白銀書店	小原松千代	宮脇書店	土肥書店	世良書店	澤本駒吉	森岡書店	積善館支店	菊竹書店	甲斐治平	河内壯助	長崎次郎	丸屋書店	吉田幸兵衛	富貴堂	札幌興農園

有隣堂
發行
之內書

畜産と獸醫書目

畜産書

(總記)

水原獸醫學士著 (全一冊)	畜産學原理	正價 十一圓廿二錢	肥田學士著 (第一號一冊)	畜産部試驗報告	正價 四十六錢
厚木駒平治著 (全一冊)	家畜化育要論	正價 六十四圓十八錢	日山豐次郎著	家畜原論	正價 四十五錢
田口農學士著 (全一冊)	畜産學教科書	正價 八十八錢	(牧草)	收草圖譜	正價 八圓
岩田勇著 (全一冊)	畜産學講習新書	正價 六十七圓五錢	農務省編 (全一冊)	實用收草新書	正價 八圓十錢
佐藤平治著 (全一冊)	畜産講習全書	正價 八十八圓	小川農學士著 (全一冊)	收草論	正價 十一圓八十錢
北海畜産協會編 (全三冊)	畜産學講義	正價 二十三圓	村上要信著 (全一冊)	家畜食物論	正價 二十二圓
肥田學士著 (全一冊)	畜産學	正價 八圓廿五錢	和四歌吉著 (全一冊)	苜蓿とクローバー	正價 四十四圓
江馬九三郎著 (全一冊)	畜産寶典	正價 六十七圓五錢	橫山正令著 (全一冊)	馬糧考	正價 三十三圓
井宗鶴編 (全一冊)	收畜必携	正價 四十三圓五錢	(産牛)	産牛新論	正價 八九圓
佐藤學士著 (全一冊)	養畜の乘	正價 四十三圓			

肥田學士著 (全一冊)	養畜新書	正價 六十六圓十錢	口澤勇一著 (全一冊)	産馬新論	正價 八十八圓
江馬九三郎著 (全一冊)	相馬學	正價 四十五圓	田浦浦一耶、藤澤休之進共著 (全一冊)	撰馬指針	正價 六十八圓
賀島政基著 (全一冊)	牛體鑑識法	正價 二十二圓	内田純一著 (全一冊)	産馬飼畧	正價 三十五圓
村上要信著 (全一冊)	養牛道	正價 七十七圓	江馬九三郎著 (全一冊)	相馬學	正價 四十五圓
岩田勇編 (全一冊)	種牛圖說	正價 十一圓二十錢	加藤獸醫學士著 (全一冊)	新撰馬學	正價 六十六圓十錢
農務省編 (全一冊)	牛馬蕃殖飼養法要畧	正價 二六圓	工藤一著 (全一冊)	相馬便覽	正價 二十四圓
河相大三著 (全一冊)	乳牛及製乳新書	正價 四十五圓	村上要信著 (全一冊)	相馬毛色新說	正價 四十五圓五錢
肥田學士著 (全一冊)	實用育牛大鑑	正價 十一圓二十錢	青木信太郎著 (全一冊)	馬之鑑定及使役法	正價 四十五圓
石橋三郎治著 (全一冊)	牛乳と衛生	正價 六十五圓十錢	(牧羊)	日本牧羊問答	正價 六十七圓
(産馬)	牛乳寶典	正價 三十八圓	杉山安太郎編 (全一冊)	收羊說	正價 三十二圓
原田獸醫學士著 (全一冊)	産馬大鑑	正價 三十五圓十錢	勸業局編 (全一冊)	收羊手引草	正價 二十二圓

畜産書

内藤道雄著 (全一册)	山羊全書	正價 四十錢	坂田平作著 (全一册)	家兔飼養法	正價 六十錢
原山嘉次郎著 (全一册)	家庭の山羊	正價 三十錢	得能正通著 (全一册)	養兔真論	正價 三十錢
村上要信著 (全一册)	山羊飼方	正價 三十錢	(雜)		
(養豚)			今泉敬學士著 (全一册)	家畜年齡圖說	正價 二十錢
高山敬著 (全一册)	養豚全書	正價 八十五錢	安部三郎著 (全一册)	小畜飼養論	正價 六十錢
飯田平作著 (全一册)	通俗養豚書	正價 七十錢	原山嘉次郎著 (全一册)	最新豚料理	正價 三十錢
非關十二郎著 (全一册)	養豚成効詳説	正價 八十錢	丸岡周作著 (全一册)	家畜飼料標準	正價 二十五錢
村上要信著 (全一册)	養豚新書	正價 七十錢	谷口孝二著 (全一册)	牧手牧夫心得草	正價 二十五錢
池久吉著 (全一册)	養豚手引	正價 二十五錢	牧畜雜誌社發行 (毎月一回発行)	牧畜雜誌	正價 一拾八錢
村上要信著 (全一册)	家畜の飼養と病理	正價 五十錢	日本畜牛改良同盟會發行 (毎月一回発行)	畜牛雜誌	正價 一拾錢
(養兔)					
水間小左衛門著 (全一册)	養兔全書	正價 四十五錢			

獸醫及蹄鐵書

(總記)			○内科學	正價 四十七錢	送料 六錢
獸醫名語彙編 (全一册)	家畜醫範	正價 七十四錢	(十卷)	同 四十五錢	同 六錢
(内譯)			(十一卷)	正價 六十錢	送料 八錢
○解剖學	田中獸醫學士著 (全三册)		(十二卷)	正價 五十六錢	送料 八錢
(一卷)	正價 六十錢	送料 八錢	(十三卷)	正價 五十六錢	送料 八錢
(二卷)	同 三十七錢	同 六錢	(十四卷)	同 五十錢	同 六錢
(三卷)	同 四十八錢	同 六錢	○產科學	三浦獸醫學士著 (全二册)	
○生理學	新山獸醫學士、時重獸醫學士、坂井著 (全三册)		(十五卷)	正價 二十八錢	送料 四錢
(四卷)	正價 三十七錢	送料 六錢	(十六卷)	同 四十錢	同 六錢
(五卷)	同 二十七錢	同 四錢	○獸醫學教科書	生利獸醫學士著 (全一册)	正價 十二圓二錢
(六卷)	同 四十錢	同 六錢	木暮謙吉、坂島政基著 (全一册)	獸醫學大意	正價 二十四圓五十錢
○藥物學	西川獸醫學士著 (全三册)		原山嘉次郎著 (全一册)	獸醫寶典	正價 一圓五十錢
(七卷)	正價 四十錢	送料 六錢	生利獸醫學士著 (全一册)	家畜病理通論	正價 八十五錢
(八卷)	同 六十錢	同 八錢	(解剖組織)		
(九卷)	同 五十錢	同 六錢			

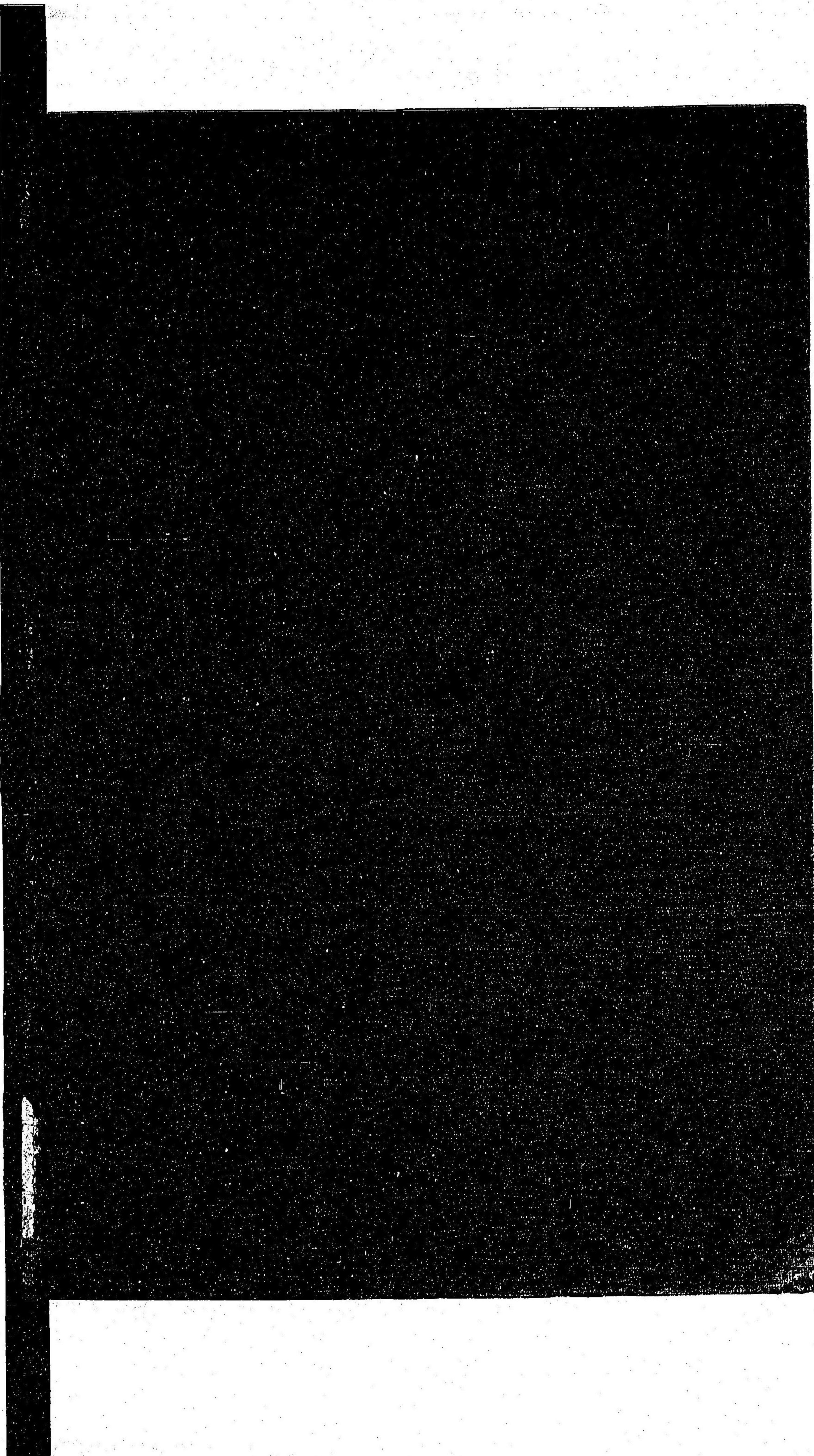
獸醫及蹄鐵書

金澤醫學士著 (全一册) 家畜病理解剖學 送料 六七十錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜比較解剖圖譜 送料 八四二十錢	今川醫學士著 (全一册) 馬牛解剖圖說 送料 四四十錢	中江醫學士著 (全一册) 馬體解剖圖譜 送料 六十四錢	大國醫學士著 (全一册) 獸醫回診錄 送料 四廿五錢	杉本醫學士著 (全一册) 家畜組織學 送料 八八十錢	〔生理、產科及衛生〕		勝島醫學士著 (全三册) 家畜生理學 送料 六九十錢	生駒醫學士著 (全一册) 家畜發生學 送料 六十五錢	實用家畜產科學 送料 六十五錢	水原醫學士著 (全一册) 家畜衛生學 送料 十一圓二十錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜衛生要論 送料 四四十錢	生駒醫學士著 (全一册) 家畜衛生學教科書 送料 八六十錢	水原醫學士著 (全一册) 家畜眼科學 送料 四十五錢	〔寄生虫〕		生駒醫學士著 (全一册) 寄生虫學 送料 四四十錢	杉本醫學士著 (全一册) 家畜細菌學各論 送料 四十四錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜外寄生動物學 送料 四三十錢	〔診斷〕		原島醫學士著 (全一册) 家畜診斷學 外科篇 送料 十一圓八十錢	原島醫學士著 (全一册) 家畜診斷學 內科篇 送料 十一圓八十錢			
生駒醫學士著 (全一册) 家畜衛生學教科書 送料 八一錢	〔藥物、調劑〕		武藤醫學士著 (全三册) 獸醫藥物學 送料 十二圓廿六錢	坂島醫學士著 (全一册) 家畜藥物學 送料 十二圓廿六錢	水田醫學士著 (全一册) 獸醫調劑寶鑑 送料 十一圓廿二錢	水田醫學士著 (全一册) 獸醫調劑提要 送料 六十五錢	〔內科及外科〕		勝島醫學士著 (全三册) 家畜內科學 送料 四三十錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜內科類症鑑別 送料 四三十錢	原島醫學士著 (全一册) 家畜外科手術學 送料 十二圓二十錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜外科須知 送料 六六十錢	佐々木醫學士著 (全一册) 家畜臨床診斷學 送料 十一圓三十錢	〔去勢〕		生駒醫學士著 (全一册) 增訂去勢術 送料 十一圓二十錢	杉本醫學士著 (全一册) 簡易去勢術 送料 二三十錢	〔治療及雜〕		森下醫學士著 (全一册) 家畜簡明治療法 送料 四三十錢	曾我醫學士著 (全一册) 畜疫治療方 送料 二十錢	陸軍醫學士著 (全一册) 病馬治療錄 送料 十二圓五十錢	陸軍醫學士著 (全一册) 馬原病學 送料 二十四錢	勸業局編 (全一册) 牛病通論 送料 八圓廿錢	武藤醫學士著 (全一册) 日本畜牛病論 送料 十二圓五十錢	津野醫學士著 (全一册) 牛乳衛生警察 送料 十一圓八十錢

今川醫學士著 (全一册) 家畜外科各論 送料 十四圓六十錢	中川醫學士著 (全一册) 獸醫外科手術學 送料 四五十錢	〔眼科〕		原島醫學士著 (全一册) 家畜眼科學教科書 送料 八六十錢	水原醫學士著 (全一册) 家畜眼科學 送料 四十五錢	〔寄生虫〕		生駒醫學士著 (全一册) 寄生虫學 送料 四四十錢	杉本醫學士著 (全一册) 家畜細菌學各論 送料 四十四錢	今川醫學士著 (全一册) 家畜外寄生動物學 送料 四三十錢	〔診斷〕		原島醫學士著 (全一册) 家畜診斷學 外科篇 送料 十一圓八十錢	原島醫學士著 (全一册) 家畜診斷學 內科篇 送料 十一圓八十錢
佐々木醫學士著 (全一册) 家畜臨床診斷學 送料 十一圓三十錢	〔去勢〕		生駒醫學士著 (全一册) 增訂去勢術 送料 十一圓二十錢	杉本醫學士著 (全一册) 簡易去勢術 送料 二三十錢	〔治療及雜〕		森下醫學士著 (全一册) 家畜簡明治療法 送料 四三十錢	曾我醫學士著 (全一册) 畜疫治療方 送料 二十錢	陸軍醫學士著 (全一册) 病馬治療錄 送料 十二圓五十錢	陸軍醫學士著 (全一册) 馬原病學 送料 二十四錢	勸業局編 (全一册) 牛病通論 送料 八圓廿錢	武藤醫學士著 (全一册) 日本畜牛病論 送料 十二圓五十錢	津野醫學士著 (全一册) 牛乳衛生警察 送料 十一圓八十錢	

狂犬病說 安福宗師著(全一册) 送料價二十錢	病畜看護法 津野獸醫博士著(全一册) 送料價八錢	食肉衛生警察 津野獸醫博士著(全一册) 送料價十一圓六十五錢	獸醫警察 津野獸醫博士著(全一册) 送料價十一圓二十五錢	屠畜檢查員指掌 金澤常雄著(全一册) 送料價二十二錢	炭疽病接種試驗報告 農務省編(全一册) 送料價二五錢	皮膚及鼻疽病 藤下右衛門著(全一册) 送料價二三十錢	增訂獸醫及開業 藤下右衛門著(全一册) 送料價六六錢	獸醫畜產法規 農務省編(全一册) 送料價六六錢	(蹄鐵及雜誌)	應用蹄鐵學 水田榮次著(全一册) 送料價八十九錢	應用蹄鐵學 水田榮次著(全一册) 送料價四十六錢
蹄鐵覽要 必讀者蹄鐵(全一册) 送料價四十四錢	蹄鐵書 水原誠醫學士著(全一册) 送料價六十五錢	蹄鐵要術 陸軍省編(全一册) 送料價四十四錢	陸軍蹄鐵術教範 陸軍省編(全一册) 送料價二十二錢	蹄病學 四村獅子雄著(全一册) 送料價十一圓二十錢	蹄病新論 金澤常雄著(全一册) 送料價六十五錢	簡易蹄鐵學 兵頭芳太郎著(全一册) 送料價八十九錢	東京獸醫新報 東京獸醫新報社發行(每月一回發刊) 送料價五十二錢	家畜處方錦囊 郭逸閣(即著)(全一册) 送料價四十八錢	中央獸醫會雜誌 中央獸醫會發行(每月一回發刊) 送料價一十二錢		

328
105



328
105

064798-000-2

328-105

实用馬学講義

池松 常記/著

M42

CCD-0250



